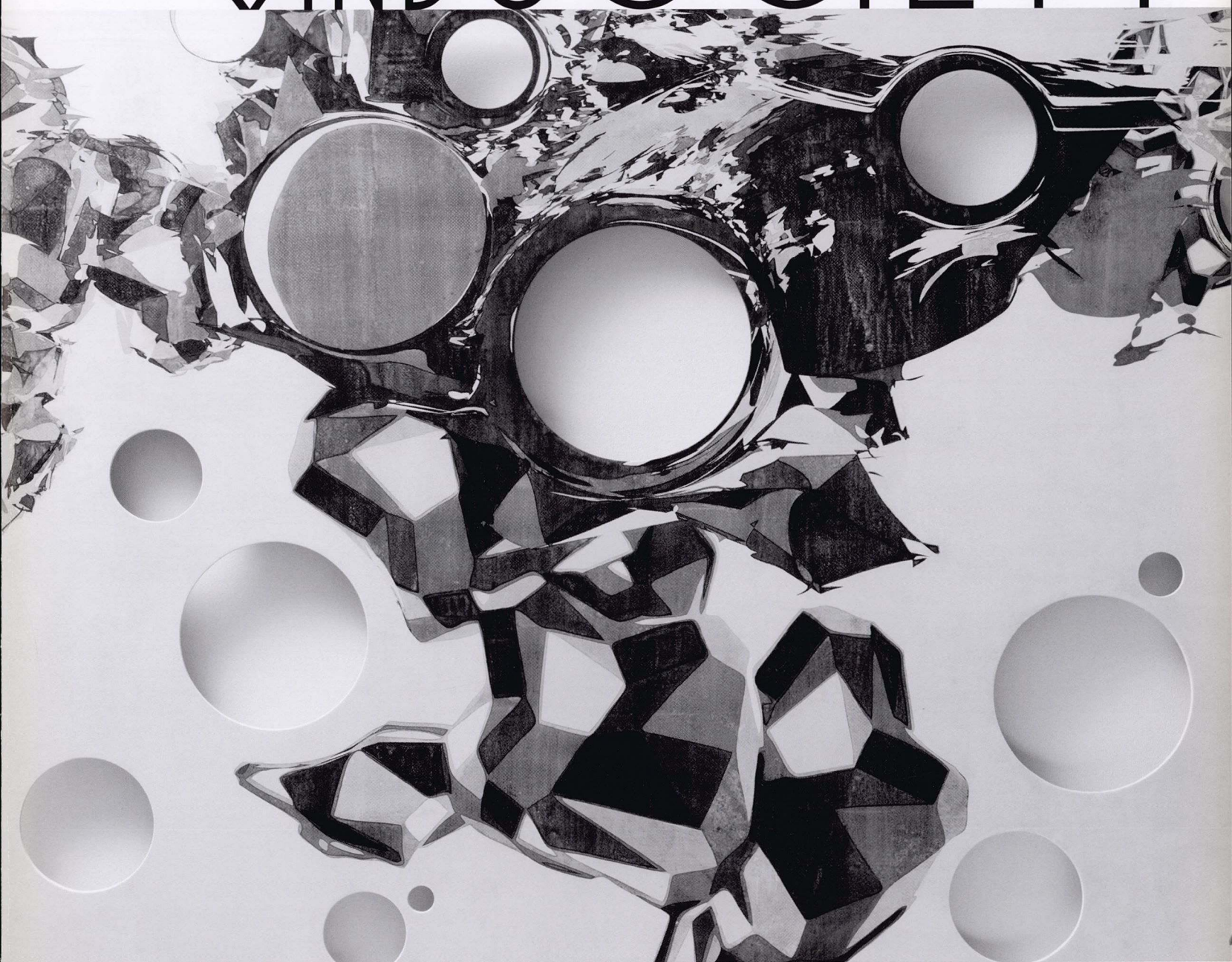


建築と社会 ARCHITECTURE AND SOCIETY



特集 — 建築と土

日本建築協会

7
2011

日本建築協会企画・販売
出版図書一覧

1917年3月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

*

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会 1988年

A4判 企画・発行：日本建築協会 本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集 1992年

A4判 企画・発行：日本建築協会 本体価格2,000円

昭和生まれ 関西の建築家50 1987年

A4判 企画・発行：日本建築協会 本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念講演記録集

講演記録集 話のはなし 1997年

B6判5分冊 企画：日本建築協会建築クラブ 販売価格2,500円（税・送料込み）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款（平成21年6月改訂）

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項・建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律第13条および省令第4条に基づく書面

販売単位：2部1単位とする

価格：1単位700円（税込）送料は実費

日本建築協会事務局（06-6946-6981）で販売

近刊 平成21年3月10日発行

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

管理の良い現場、悪い現場が一目瞭然！
現場のブローケンウィンドウズを見逃すな

著者 玉水 新吾
四六判 224ページ
定価 1,900円＋税

最新刊 平成22年11月10日発行

プロが教える住宅の植栽

門廻り、アプローチ、壁、インテリア、屋上、住空間で緑（樹木・草花）を効果的に使いこなすための知識と考え方

著者 藤山 宏
B5判 176ページ
定価 2,800円＋税

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

*

購入希望者は、（社）日本建築協会事務局
（TEL06—6946—6981、FAX06—6946—6984）まで。

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇・四六判2色刷イラスト入

〈プロのノウハウ〉シリーズ

企画：日本建築協会 発行：学芸出版社 本体価格¥1,600～¥2,800

衛生設備のトラブル50

建築設備トラブル研究会

建築の現場管理システム

伊東貞夫

鉄筋工事・本音の現場学

荒川治徳

新版コンクリート工事のチェックポイント100

加賀秀治

建築と音のトラブル

中川清ほか

建築基準法の性能規定を読みこなすコツ

高木任之

建築工事の祭式

「建築工事の祭式」編集委員会

第二版 環境と共生する建築25のキーワード

大西正宜

飛躍する構造デザイン

渡辺邦夫

木造住宅のしくみ

在来工法の基本と応用 浅野平八・東 敏博

改訂版 建築物の消防法を読みこなすコツ

高木任之

インテリアコーディネートの100ポイント

町田ひろ子監修／松本 茂・村元俊子著

プロが教えるキッチン設計のコツ

井上まるみ

木づくりの常識非常識

上村 武

現場で学ぶ 住まいの雨仕舞い

玉水新吾

建築トラブルにみる常識非常識

荒川治徳

住宅エクステリアの100ポイント

藤山 宏

第三版 都市計画法を読みこなすコツ

高木任之

第三版 建築基準法を読みこなすコツ

高木任之

建築主が納得する住まいづくり

玉水新吾

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

玉水新吾

プロが教える住宅の植栽

藤山 宏

日本建築協会創立70周年記念事業・B5判

選書特装版

企画：日本建築協会 発行：学芸出版社 本体価格¥3,000～¥4,000

水にまつわるトラブルの事例・解決策

〈建築篇〉 「建築漏水」編集委員会

建築デザインのための構造計画

須賀好富

水にまつわるトラブルの事例・解決策

〈設備篇〉 「設備漏水」編集委員会

入門・建築積算

生島道春

建物の汚れ—トラブル事例と解決策

「建物の汚れ」編集委員会

建物の結露—トラブル事例と解決策

「建物の結露」編集委員会

わが友市川宏君の死を悼む

日本建築協会元会長 佐野正一



大正13年3月24日 京都市北区紫野大徳寺町63番地の8にて出生

平成23年6月4日 逝去

●学歴

昭和22年3月 第三高等学校卒業

昭和25年3月 京都大学工学部建築学科卒業

●職歴

昭和25年4月 京都大学工学部助手

昭和27年11月 ㈱東畑建築事務所入社

昭和36年7月 チューリッヒ駐在、この間欧州建築界視察

昭和37年5月 ㈱東畑建築事務所取締役

昭和44年5月 ㈱東畑建築事務所専務取締役

昭和48年～50年 (社)大阪府建築士会理事

昭和50年～62年 大阪建築設計監理協会副会長

昭和57年4月 ㈱東畑建築事務所代表取締役社長

平成6年～13年 (社)日本建築協会会長

平成9年4月 ㈱東畑建築事務所代表取締役会長

平成20年7月 ㈱東畑建築事務所取締役名誉会長

●受賞

昭和57年7月 建設大臣表彰

昭和61年5月 黄綬褒章受章

平成6年4月 双光旭日章受章

●建築事業における功績

昭和27年に㈱東畑建築事務所に入社以来、設計監理業務に従事し、京都駅南口再開発ビルアバンティや大阪国際見本市新会場インテックス大阪、京都市国際文化交流館、千里ライフサイエンスセンター等々や、大阪駅前第1棟、第4棟を完成させた。

また、日本建築協会においては、昭和48年から53年まで法規委員長として委員会の任務を官民の接点に立つパイプ役と位置付け、法規の解釈、運用面での問題点を究明し、「建築と社会」誌上で建築物の社会性を問うた。

その後、平成6年～13年まで日本建築協会会長職を務め、協会設立80周年記念事業等を指揮した。

畏友、市川宏君が6月4日午前、神戸の病院で卒然としてなくなった。どこといって難点のない健康を維持していたのだが、ここ数年心肺の不快で神戸の行きつけの病院の診察を受けることが多かった。信頼する病院で健常を告げられ安心するのが常だった。今回も同じことだとおもったのが違った。早朝の巡回で正常とおなじ経過だったのが、巡回の後に不定時に予想外の突然の発作が起こった。一瞬の事態である。これが最期の場面となった。市川宏の一生はこれが最期だった。悲痛というほかはない。

彼の生涯は京都にある。小学校から中学校を終え、次は高等学校である。ためらわず第三高等学校を選んだ。小学校、中学校いずれもいい成績だったからであろう。期待通り第三高等学校に入学したが、時期はまさに戦争中である。昔からの学校の伝統らしきものが消え、勤労奉仕と軍事教練にあけくれる毎日だった。短くはない期間だったが、この間の印象はとぼしいものがある。隣に見える京都大学の校舎群。いずれもがくろぐろとした権威の象徴のように感じられたに違いない。難関というものがあるが、まさしくこの場合、難関をこえたものだけが栄冠を得る。彼は大学合格をことのほか嬉しく思えたはずだ。

大学ではじめて建築技術というものを縦横に学んだ。かつて東畑謙三の設計した東方文化学院京都研究所の記憶は遠ざかり、巨大な工場の鉄骨構造が目前を往来して、新しい構造技術の基礎づくりの声をきいた。戦後というあたらしい環境のもとで、勝手な思い付きまじりの復興がはじまっているのだ。東畑謙三は当然これに目を光らせた。理想と現実との落差である。これは大切なことだ。慎重に考えた。大型鉄骨構造の登場はよいとしても、施工方法がなくてはしっかりした工事はできない。こうして鉄骨の新しい設計技術が改善されることになった。受注者、製鉄会社もこれを継承して、新方式は前進をはじめた。

市川宏は教室に居たときからこの問題には関心があった。そして次第に構造という部

門の特別な判断でなく、設計計画全般の問題として新しい理解と展望をはじめるのである。彼が昭和27年(1952)東畑建築事務所に入社したときの情勢である。この時期、彼は東畑の長女を貰って結婚した。女婿になったことで東畑との関係は一層濃いものになった。

昭和37年(1962)には取締役、昭和44年(1969)には専務となり、昭和57年に取締役社長になった。これからが新しい市川宏の出発になると、そう思いきめた。古い友人たちが待っていた。設計事務所の経営者となって周囲に話をきいてまわった。偏見のない姿勢でスタッフの意見を聞き、その力をかりて建築の設計をどうするかを考えつづけた。

平成10年(1998)東畑謙三死去。仰ぎ見る巨大な影とともに直接指導の影は消えた。影響の大きさを惜しむかのような市川宏以下の平静さは印象を残した。時代は急速に変わりつつある。善悪はともかくその流れの中にいる。商業主義の大型スーパーマーケット、大型遊戯施設、立体化した工場、多目的の都市施設、重層の住宅施設、重層の文化施設など対象は広がった。それが市川新社長の下での実績となっていた。いきいきとした造形が生まれ、しかし「重と剛」前時代のイメージを感じずるものもある。それはそれでよいではあるまいか。

社長在任中の平成6年に、私の後を引き継ぐ形で、社団法人日本建築協会の会長職に就いてもらった。協会では設立80周年記念事業をまとめあげたことが最大の功績である。ここでも真摯に人の意見を聞く姿勢が、協会活動の発展に寄与したことは言うまでもない。

市川宏さん、長い間おつきあいいただいたこと、感謝の言葉もない。

ご配慮いただいたこと、なによりも有難く御礼申し上げる。

諸霊とともに永遠の安静をお祈り申し上げます。
(安井建築設計事務所代表取締役相談役)

会告

総会議決のお知らせ

平成23年 6 月17日開催の平成23年度
第1 回通常総会において、下記議案が
それぞれ原案のとおり承認されました。

- ・第1号議案
平成22年度事業報告の件
(詳細p3)
- ・第2号議案
平成22年度決算報告の件
(詳細p4)
- ・第3号議案

役員選任の件
(詳細p7)

- ・第4号議案
一般社団法人の申請について

* 6月21日付で退任の顧問、理事

●顧問

中嶋俊行 大阪府

●理事

樋口洋一 大阪ガス(株)

大石忠彦 (株)きんでん
黒川省二 (株)竹中工務店
木戸 徹 鹿島建設(株)
佐伯 博 (株)東畑建築事務所

退任された顧問、理事の方には、長年
にわたり会務遂行にご尽力いただきあ
りがとうございました。
再任及び新任の顧問及び理事、監事は
p7の会務分掌の表のとおりです。

通常理事会議決の
お知らせ

平成23年 6 月2 日開催の平成23年度
第1 回通常理事会において、下記議案
がそれぞれ原案のとおり承認されまし
た。

- ・第1号議案
平成22年度事業報告(案)の件
- ・第2号議案
平成22年度決算報告(案)の件

- ・第3号議案
役員選任(案)の件
- ・第4号議案
一般社団法人の申請(案)の件

臨時理事会議決の
お知らせ

平成23年 6 月22日開催の平成23年度
第1 回臨時理事会において、下記議案
がそれぞれ承認されました。

- ・第1号議案

役付役員選任の件

- ・第2号議案

常任理事並びに常設委員長委嘱の件

- ・第3号議案

理事の会務分掌の件

いずれもp7の会務分掌の表のとおり
です。

評議員会議決の
お知らせ

平成23年 6 月2 日開催の平成23年度
評議員会において、下記議案がそれぞ
れ原案のとおり承認されました。

- ・第1号議案
評議員会副議長互選の件

嘉納秀一氏を選任

- ・第2号議案

役員(顧問、理事、監事)候補者推
薦の件

- ・報告事項

平成22年度事業報告(案)の件
平成22年度決算報告(案)の件
一般社団法人の申請(案)の件

「民間(旧四会)連合
協定工事請負契約約
款」改正のお知らせ

「民間(旧四会)連合協定工事請負契
約約款」が2年ぶりに改正され、6月
27日(月)から販売されております。
「改正の概要」「新旧対照表」は、民間
(旧四会)連合協定工事請負契約約款
委員会HP(<http://www.gcccc.jp/>)
をご覧ください。販売方法、販売価格
は変更ありません。
販売場所は、下記のとおりとなってお
りますので、ぜひご利用ください。

※販売場所

●(社)日本建築協会・本部事務局
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-
7-31

大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
TEL: 06-6946-6981

FAX: 06-6946-6984

●(社)日本建築協会・京都支部
〒604-0944 京都市中京区押小路通
柳馬場東入橋町641
京都建設会館別館
TEL: 075-211-2857

FAX: 075-255-6077

●(社)和歌山県建築士会
〒640-8045 和歌山市ト半町38
建築士会館

TEL: 073-423-2562

FAX: 073-433-2772

●大阪府咲洲庁舎諸用紙販売
〒559-0034 大阪市住之江区南港北
1-14-16 2階

TEL: 06-4703-8420

FAX: 06-4703-8421

平成22年度事業報告書

平成22年4月1日～平成23年3月31日

1. 総 会

- (1) 第1回通常総会 平成22年6月18日
議事 ①平成21年度事業報告書(案)の件
②平成21年度収支決算書(案)の件
③役員選任の件
- (2) 第2回通常総会 平成23年3月23日
議事 ①平成23年度事業計画(案)の件
②平成23年度収支予算(案)の件

2. 理 事 会

- (1) 第1回通常理事会 平成22年6月2日
議事 ①平成21年度事業報告書(案)の件
②平成21年度収支決算書(案)の件
③役員選任の件
④総会等の開催の件
- (2) 第1回臨時理事会 平成22年6月22日
議事 ①役付き役員選任の件
②常設委員長及び常任理事の委嘱の件
③理事の会務分掌の件
- (3) 第2回通常理事会 平成23年3月23日
議事 ①平成23年度事業計画(案)の件
②平成23年度収支予算(案)の件

3. 評 議 員 会

- (1) 第1回定時評議員会 平成22年6月2日
議事 ①評議員会議長互選の件
②役員(顧問、理事、監事)候補者選任の件

4. 役 員 会 等

- (1) 常任理事会 8回

5. 常 設 委 員 会 等

- (1) 編集委員会 委員会 12回 小委員会等 85回
(2) 事業委員会 7回
(3) 教育委員会 6回
(4) 出版委員会 11回
(5) 建材委員会 1回
(6) 史料研究会(再読関西近代建築) 3回
(7) 関西の建築界群像委員会 2回
インタビュー 12回

6. 特 別 委 員 会 等

- (1) 工高生デザインコンクール審査委員会 1回
(2) 青年技術者選考委員会 1回
(3) 読者と選ぶ「建築と社会」賞審査会 1回

7. 建築と社会・特集号

- 4月号 食と建築・都市
5月号 ホスピタリティのあるケア空間
6月号 太陽光発電
7月号 建築と石
8月号 再生・受け継ぐ・繋がる
9月号 第57回青年技術者
10月号 建築ストック社会の形成への展望
11月号 LED照明の活用・将来を考える
～人・地球への思いやり～
12月号 東京スカイツリー
1月号 UR向ヶ丘第一団地ストック再生実証試験
第17回会員作品「私の空間作法」
2月号 BIMは設計を変革するか?
3月号 東海支部復活50周年記念総括号
東海-TOKAIオムニバス

8. 講 演 会

- (1) 「建設に携わる者によるNGO活動—ネパールの学校建築—」
講 師: 赤尾建蔵 (財)竹中大工道具館館長
講 演 日: 平成22年6月18日
参 加 者: 60名
- (2) 出版記念講演会・「プロが教える住宅の植栽」
講 師: 藤山 宏 (有造景空間研究所所長)

講 演 日: 平成23年2月3日

参 加 者: 48名

(3) 講習会・「わかりやすいエレベータ新基準解説講習会」

講 師: 橋詰裕基 (三菱電機㈱)
井上 淳 (三菱電機ビルテクノサービス㈱)
山本宜永 (三菱電機ビルテクノサービス㈱)

講 演 日: 平成23年3月16日

参 加 者: 12名

9. 見 学 会

上本町YUFURA

平成22年5月26日 参加者26名

茶室「対龍山荘」

平成22年6月19日 参加者34名

甲子園球場スタジアムツアー+見学

平成22年11月16日 参加者36名

関西大学堺キャンパス

平成23年3月24日 参加者31名

阿倍野A1地区第2種市街地再開発事業A2棟建築工事

平成22年7月9日 参加者27名

大阪「かくれたええとこ」再発見バスツアー

平成22年11月21日 参加者14名

10. 建築工事实務講習会

本部主催「施工計画・仮設見積」

平成22年12月2日

①施工計画(仮設・地下工事)

講 師: 白塚 芳郎/鴻池組大阪本店

②施工計画(躯体・仕上・設備工事・工程)

講 師: 池内 昌志/浅沼組大阪本店

③仮設見積

講 師: 阪井 聡/大林組大阪本店

受講者: 53名

東海支部主催「施工計画・仮設見積・積算業務」

平成23年1月28日

①施工計画

講 師: 日吉 智紀/清水建設名古屋支店

②仮設見積

講 師: 田端 聡/大林組名古屋支店

③積算業務

講 師: 時武 治/竹中工務店名古屋支店

受講者: 42名

11. 新 建 材 の 紹 介

建材の特性等の検討及び今後の会誌「建築と社会」の誌面での紹介の方法等について検討を行った。

12. 表 彰 ・ 顕 彰

①優秀卒業生の表彰

本人の研鑽意欲の向上を促し激励するため、高等学校、専門学校建築科の優秀な卒業生160名を表彰した。

②読者と選ぶ「建築と社会」賞の顕彰

「建築と社会」の趣旨にふさわしい社会性、環境などに配慮した有意義な建築作品や論文を顕彰する。作品部門

・佐野記念病院/介護老人保健施設 栄公苑

岡田泰典、西田佳代

論考部門

・白井晟一における石の「発見」 倉方俊輔

・京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に— 中村昌生

13. コ ン ク ー ル

第56回工高生デザインコンクール

設計課題: あなたのまちのデイサービスセンター

応募者: 19校・108点

審査会: 平成22年10月16日 表彰式: 11月13日

審査委員: 菅 正太郎(すがアトリエ代表)他11名

入選作品: 10点(うち最優秀1点、優秀2点)

14. 後 援 ・ 協 賛 の 承 認

・特集展示「日本建築協会と関西の建築界」: 6月2日～7月26日、シンポジウム「関西建築界の歩

みを語る」: 7月3日 於: 大阪歴史博物館(後)

・第30回大阪都市景観建築賞(愛称: 大阪まちなみ賞)(協)

・「第1回ニッポン建設映像祭」(後)

・第34回人間—生活環境系シンポジウム(協)

・「あすなろ夢建築」第20回大阪府公共建築設計コンクール(協)

・「実務者のための戸建て住宅の地盤改良・補強工法—考え方から適用まで—」講習会(協)

・第32回Japan Home & Building Show(協)

・街の色研究会・京都シンポジウム2010「京都の街の景観を考える」(後)

・「建築・建材展2011」(協)

・耐震基礎研究報告会「地震被害からみた建築基礎構造の設計・施工上の留意点」(後)

・2010年児童画展(後)

・「2010年度かんでん住まいの設計コンテスト」(後)

・「第29回大阪都市景観建築賞(大阪まちなみ賞)講演会」(後)

・「第24回世界建築会議」(UIA2011東京大会)(後)

・「建築物の煙制御計画指針(案)」講習会(後)

・「東京スカイツリー講演会」(協)

・「津山洋学資料館」講習会(後)

・「コンクリートとコラボレーションによる持続可能な住まいと地域住環境の設計」連続シンポジウム(後)

・「リビング&デザイン」(後)

・「エネ蔵2011—エネルギーソリューション&蓄熱フェアー—」(後)中止

※「後」は後援、「協」は協賛を示す。

15. 青年技術者の顕彰

・満35歳以下の技術者を対象に、昭和29年度から実施しており、第57回は、応募者29名のうち、20名を顕彰した。

・また、顕彰者を称え激励するため、平成21年度と同様に表彰式、講演会及び先輩・役員との交流会を行った。

16. 建築関係団体との交流

建築関係4団体交流会

平成22年12月14日に太閤閣にて開催した。

建築関係14団体合同交流会

平成23年1月4日にシェラトン都ホテル大阪にて開催した。

17. 役員を送った団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪住宅センター	理事
大阪市街地再開発促進協議会	理事
大阪建築防災センター	評議員
日本建築総合試験所	評議員

18. 各 支 部 事 業 活 動

京都支部

・会議の開催: 総会1回、役員会2回

・事業: 見学会1回

受験講習会 2級建築士(製図)延べ7日間

中国支部

・会議の開催: 総会1回 常議員会1回 企画・幹事会4回 懇親会1回

東海支部

・会議の開催: 総会1回、役員会12回、総務委員会等の委員会26回

・事業: 支部機関紙の発行2回

講演会1回

支部復活50周年記念講演会1回

見学会、セミナー3回(国内)

支部復活50周年記念見学会1回(海外)

支部会員名簿の発行

懇親会3回、ゴルフ親睦会2回

「建築と社会」東海支部復活50周年記念総括号編集

・協力事業: 中部建築賞協議会ほか5団体の事業実施に協力した。

平成22年度決算報告書

貸借対照表

平成23年3月31日現在

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金・預金	15,995,740	28,241,422	-12,245,682
貯蔵品	43,096	46,796	-3,700
未収入金	2,509,750	3,446,133	-936,383
前払費用	101,734	114,519	-12,785
仮払金	9,002	6,402	2,600
流動資産合計	18,659,322	31,855,272	-13,195,950
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
基本財産合計	0	0	0
(2) 特定資産			
記念事業積立預金	27,000,000	13,000,000	14,000,000
事業基金積立預金	29,000,000	29,000,000	0
退職給付引当資産	8,030,040	7,315,947	714,093
特定資産合計	64,030,040	49,315,947	14,714,093
(3) その他固定資産			
什器備品	111,260	111,260	0
投資有価証券	446,647	446,208	439
保証金	3,436,650	3,436,650	0
その他固定資産合計	3,994,557	3,994,118	439
固定資産合計	68,024,597	53,310,065	14,714,532
資産合計	86,683,919	85,165,337	1,518,582
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	1,065,422	1,137,775	-72,353
前受金	4,041,529	3,757,296	284,233
預り金	196,874	122,962	73,912
流動負債合計	5,303,825	5,018,033	285,792
2. 固定負債			
退職給付引当金	8,030,040	7,315,947	714,093
固定負債合計	8,030,040	7,315,947	714,093
負債合計	13,333,865	12,333,980	999,885
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計	0	0	0
2. 一般正味財産			
(うち基本財産への充当額)	(0)	(0)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(56,000,000)	(42,000,000)	(14,000,000)
正味財産合計	73,350,054	72,831,357	518,697
負債及び正味財産合計	86,683,919	85,165,337	1,518,582

正味財産増減計算書

平成22年4月1日から平成23年3月31日まで

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
受取会費	40,451,800	42,862,383	-2,410,583
個人正会員受取会費	11,722,500	12,803,083	-1,080,583
個人正会員(地方)受取会費	970,200	937,650	32,550
団体正会員受取会費	27,750,000	29,106,250	-1,356,250
準会員受取会費	9,100	15,400	-6,300
事業収益	18,956,201	25,963,615	-7,007,414
編集委員会収益	12,899,923	18,835,969	-5,936,046
契約約款収益	3,950,030	4,765,380	-815,350
出版委員会収益	389,935	477,283	-87,348
事業委員会収益	337,300	327,000	10,300

科 目	当年度	前年度	増減
教育委員会収益	1,170,663	1,363,683	-193,020
建材委員会収益	0	0	0
事業雑収益	208,350	194,300	14,050
雑収益	520,307	384,928	135,379
経常収益計	59,928,308	69,210,926	-9,282,618
(2) 経常費用			
事業費	33,939,307	36,554,226	-2,614,919
給料・手当	12,984,671	13,204,240	-219,569
法定福利費	2,209,634	2,110,926	98,708
編集委員会事業費	14,333,998	16,317,718	-1,983,720
契約約款費	1,919,972	3,460,935	-1,540,963
出版委員会事業費	168,706	112,771	55,935
事業委員会事業費	217,422	218,108	-686
教育委員会事業費	2,095,381	1,016,824	1,078,557
建材委員会事業費	0	0	0
雑費	9,523	112,704	-103,181
管理費	25,470,304	26,183,747	-713,443
給料・手当	11,651,058	11,579,112	71,946
退職給付費用	714,093	595,093	119,000
法定福利費	1,288,850	1,263,096	25,754
福利厚生費	2,672	33,435	-30,763
助成費	1,612,610	1,820,000	-207,390
会議費	915,912	905,220	10,692
旅費交通費	12,760	14,810	-2,050
通信運搬費	373,932	410,617	-36,685
集金費	617,455	660,947	-43,492
消耗品費	1,543,904	1,828,901	-284,997
備品購入費	115,500	135,190	-19,690
修繕費	22,460	7,192	15,268
印刷製本費	44,310	13,440	30,870
光熱水料費	205,626	213,491	-7,865
保険料	21,710	18,520	3,190
租税公課	481,800	702,800	-221,000
清掃費	0	14,700	-14,700
建物管理費	4,555,067	4,556,220	-1,153
雑費	1,290,585	1,410,963	-120,378
経常費用計	59,409,611	62,737,973	-3,328,362
当期経常増減額	518,697	6,472,953	-5,954,256
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	518,697	6,472,953	-5,954,256
一般正味財産期首残高	72,831,357	66,358,404	6,472,953
一般正味財産期末残高	73,350,054	72,831,357	518,697
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高	73,350,054	72,831,357	518,697

財務諸表に対する注記

1. 重要な会計方針

- (1) 有価証券の評価基準及び評価方法
その他の有価証券 時価のあるもの…期末日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は移動平均法により算定）によっている。
- (2) 固定資産の減価償却の方法
什器備品…定額法によっている。
- (3) 引当金の計上基準
退職給付引当金…期末退職給与の要支給額を引当てている。
- (4) 消費税等の会計処理
消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
小 計	0	0	0	0
特定資産				
記念事業積立預金	13,000,000	14,000,000	0	27,000,000
事業基金積立預金	29,000,000	0	0	29,000,000
退職給付引当資産	7,315,947	714,093	0	8,030,040
小 計	49,315,947	14,714,093	0	64,030,040
合 計	49,315,947	14,714,093	0	64,030,040

3. 基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。

科 目	当期末残高	(うち指定正味財産からの充当額)	(うち一般正味財産からの充当額)	(うち負債に 対応する額)
基本財産				
小 計	0	—	—	—
特定資産				
記念事業積立預金	27,000,000	—	(27,000,000)	—
事業基金積立預金	29,000,000	—	(29,000,000)	—
退職給付引当資産	8,030,040	—	—	(8,030,040)
小 計	64,030,040	—	(56,000,000)	(8,030,040)
合 計	64,030,040	—	(56,000,000)	(8,030,040)

4. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

(直接法により減価償却を行っている場合)

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
什器備品	1,112,560	1,001,300	111,260
合 計	1,112,560	1,001,300	111,260

財産目録

平成23年3月31日現在

(単位：円)

科 目	金額
I 資産の部	
1. 流動資産	
現金預金	15,995,740
現金手許有高	84,272
普通預金 三井住友銀行大阪中央支店	4,562,265
普通預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	4,441,942
普通預金 りそな銀行北浜支店	4,609,505
郵便振替 00910-9-39975	2,259,764
普通預金 マーチャンダイズビル内郵便局	37,992
貯蔵品	43,096
切手・はがき	43,096
未収入金	2,509,750
会誌収入	1,988,500
個人正会員会費収入	452,400
地方会員会費収入	12,600
団体正会員会費収入	56,250

科 目	金額
前払費用	101,734
助成費	101,734
仮払金	9,002
見学会・会議保険料	9,002
流動資産合計	18,659,322
2. 固定資産	
(1) 基本財産	
基本財産合計	0
(2) 特定資産	
記念事業積立預金	27,000,000
定期預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	11,000,000
定期預金 りそな銀行北浜支店	13,000,000
定期預金 三井住友銀行大阪中央支店	1,000,000
普通預金 りそな銀行北浜支店	2,000,000
事業基金積立預金	29,000,000
定期預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	9,000,000
定期預金 りそな銀行北浜支店	20,000,000
退職給付引当資産	8,030,040
定期預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	8,030,040
特定資産合計	64,030,040
(3) その他固定資産	
什器備品	111,260
書棚1式	111,260
投資有価証券	446,647
中興国債ファンド 三菱UFJモルガン・スタンレー証券	446,647
保証金	3,436,650
本部事務所賃貸契約による保証金	3,436,650
その他固定資産合計	3,994,557
固定資産合計	68,024,597
資産合計	86,683,919
II 負債の部	
1. 流動負債	
未払金	1,065,422
会誌発行費	559,975
助成費	42,795
集金費	5,400
人材派遣費	361,752
租税公課	95,500
前受金	4,041,529
個人正会員会費収入	1,292,400
団体正会員会費収入	2,095,829
地方会員会費収入	153,300
準会員会費収入	0
会誌収入	500,000
預り金	196,874
給与源泉税預り	28,210
報酬源泉税預り	61,868
健康保険料本人負担分預り	15,480
介護保険料本人負担分預り	2,412
厚生年金保険料本人負担分預り	28,904
誤振込み預り	60,000
流動負債合計	5,303,825
2. 固定負債	
退職給付引当金	8,030,040
固定負債合計	8,030,040
負債合計	13,333,865
正味財産	73,350,054

収支計算書

平成22年4月1日から平成23年3月31日まで

(単位:円)

科 目	予算額	決算額	差異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
会費収入	39,752,394	40,451,800	-699,406
個人正会員	11,558,570	11,722,500	-163,930
個人正会員 (地方)	853,416	970,200	-116,784
団体正会員	27,332,008	27,750,000	-417,992
準会員	8,400	9,100	-700
事業収入	21,217,516	18,956,201	2,261,315
編集委員会収入	15,025,000	12,899,923	2,125,077
契約約款収入	4,230,766	3,950,030	280,736
出版委員会収入	500,000	389,935	110,065
事業委員会収入	290,000	337,300	-47,300
教育委員会収入	1,000,000	1,170,663	-170,663
建材委員会収入	0	0	0
事業雑収入	171,750	208,350	-36,600
雑収入	230,934	520,307	-289,373
前受金収入	0	4,036,163	-4,036,163
前払費用収入	0	786,519	-786,519
仮払金収入	0	958,700	-958,700
預り金収入	0	5,496,747	-5,496,747
貯蔵品収入	0	3,700	-3,700
事業活動収入計	61,200,844	71,210,137	-10,009,293
2. 事業活動支出			
事業費支出	33,985,925	33,939,307	46,618
事業関係人件費支出	15,522,925	15,194,305	328,620
編集委員会事業費支出	14,023,000	14,333,998	-310,998
契約約款費支出	2,670,000	1,919,972	750,028
出版委員会事業費支出	130,000	168,706	-38,706
事業委員会事業費支出	230,000	217,422	12,578
教育委員会事業費支出	1,380,000	2,095,381	-715,381
建材委員会事業費支出	0	0	0
雑支出	30,000	9,523	20,477
管理費支出	26,449,640	24,756,211	1,693,429
管理関係人件費支出	13,284,069	12,939,908	344,161
退職給付支出	0	0	0
福利厚生費支出	20,000	2,672	17,328
助成費支出	1,671,998	1,612,610	59,388
会議費支出	970,000	915,912	54,088
旅費交通費支出	35,000	12,760	22,240
通信運搬費支出	430,000	373,932	56,068
集金費支出	700,000	617,455	82,545
消耗品支出	1,850,000	1,543,904	306,096
備品購入費支出	150,000	115,500	34,500
修繕費支出	40,000	22,460	17,540
印刷製本費支出	50,000	44,310	5,690
光熱水料費支出	240,000	205,626	34,374
保険料支出	20,000	21,710	-1,710
租税公課支出	668,573	481,800	186,773
清掃費支出	30,000	0	30,000
建物管理費支出	4,560,000	4,555,067	4,933
雑支出	1,730,000	1,290,585	439,415
前受金支出	0	3,751,930	-3,751,930
前払費用支出	0	773,734	-773,734
仮払金支出	0	961,300	-961,300
預り金支出	0	5,422,835	-5,422,835
貯蔵品支出	0	0	0
事業活動支出計	60,435,565	69,605,317	-9,169,752
事業活動収支差額	765,279	1,604,820	-839,541
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0

科 目	予算額	決算額	差異
2. 投資活動支出			
特定資産取得支出	714,093	14,714,093	-14,000,000
退職給付引当資産取得支出	714,093	714,093	0
記念事業積立預金支出	0	14,000,000	-14,000,000
投資有価証券取得支出	0	439	-439
投資活動支出計	714,093	14,714,532	-14,000,439
投資活動収支差額	-714,093	-14,714,532	14,000,439
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
当期収支差額	1,186	-13,109,712	13,110,898
前期繰越収支差額	47,827,000	30,549,780	17,277,220
次期繰越収支差額	47,828,186	17,440,068	30,388,118

1. 資金の範囲

資金の範囲には、現金・預金・未収入金及び未払金を含めている。
なお、前期末及び当期末残高は、下記2に記載するとおりである。

2. 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

科 目	前期末残高	当期末残高
現 金 預 金	28,241,422	15,995,740
未 収 入 金	3,446,133	2,509,750
合 計	31,687,555	18,505,490
未 払 金	1,137,775	1,065,422
合 計	1,137,775	1,065,422
次期繰越収支差額	30,549,780	17,440,068

平成23年度
日本建築協会役員会務分掌

23.6.22現在・敬称略

名誉会長 佐野正一 (株)安井建築設計事務所			顧問 *野口邦彦 大阪市		
会長	中井 進	㈱日建設計	副会長	大井 昇二	㈱大林組
副会長	*足高 晴夫	㈱きんでん	副会長	*天野 直樹	㈱竹中工務店
副会長	*久徳 博文	大阪ガス㈱	副会長	本多 友常	和歌山大学
副会長	松村 孝治	㈱東畑建築事務所	副会長		
理事 ○印は常任理事及び委員長					
(総務) 6名		葛田 守弘 ㈱鴻池組			
大林 剛郎 ㈱大林組		小橋 鴻三 清水建設㈱			
栗原 信英 栗原工業㈱		近藤 徹 不二熟学工業㈱			
佐野 吉彦 ㈱安井建築設計事務所		銭高 善雄 ㈱銭高組			
立野 純三 ㈱ユニオン		今井 雅則 戸田建設㈱			
○松原 徹雄 ㈱日本建築総合試験所		藤井 實 エスケー化研㈱			
○山形 政昭 大阪芸術大学		藤原 富男 ㈱大阪建設業協会			
(財務) 4名		*福田 泰造 福田泰造建築事務所			
奥村太加典 ㈱奥村組		森畑 武 MO建築研究室&RG			
木村 之彦 木村工業㈱		與謝野 久 ㈱日建設計			
大寺 正直 中央電設㈱		(事業) 6名			
森本 晴夫 三和建設㈱		中田 誠 (独)都市再生機構			
(編集・出版) 9名		城口 俊雄 ㈱大阪城口研究所			
○上原 正行 U建築工房		○瀬戸川 葆 関西住宅品質保証マネジメント㈱			
*三柴 利雄 鹿島建設㈱		前田 亮 西松建設㈱			
佐藤 栄一 ㈱日本建築材料協会		澤邊 繁克 ㈱熊谷組			
○設楽 貞樹 ㈱安井建築設計事務所		清王 政志 ㈱大阪空調調和衛生工業協会			
竹中 統一 ㈱竹中工務店		(研修) 6名			
立成 良三 ㈱大阪住宅センター		岩橋 貞雄 八千代電設工業㈱			
浅野真一郎 関西電力㈱		上林 研二 地域生活空間研究所			
吉村 英祐 大阪工業大学		久保 博司 大成建設㈱			
○*米井 寛 ㈱東畑建築事務所		千種 幹雄 ㈱昭和設計			
(会勢) 12名		永原 穰 王建工業㈱			
浅沼 健一 ㈱浅沼組		和田 克朗 元㈱日本建築センター			
池内 哲郎 野里電気工業㈱					
常務理事		*安本 志郎		理事合計51名	
監事		杉山 泰生 元㈱日本建築協会		前田 隆司 ㈱前田商会	
3名		*三木 徹 ㈱安井建築設計事務所			

注 *印は新任
細則抜粋 第17条 会務分掌理事のうち若干名を常任理事に選任する。

平成23年度
日本建築協会評議員

議長 三木 敏男 副議長 嘉納 秀一

23.6.1現在・敬称略

区分	任期 (22.6.1~24.5.31)	任期 (23.6.1~25.5.31)
技術 2	三木 敏男 ㈱サングローブ 村上幸三郎 村上デザイン事務所	
総合 13	*合田 達生 ㈱銭高組 *川崎 博章 ㈱浅沼組 川本 勝一 安藤建設㈱ *赤松 千州 ㈱竹中工務店 梅原 弘記 ㈱大林組 山本 清彦 戸田建設㈱	肥後 行人 ㈱鴻池組大阪本店 浅野 博光 ㈱奥村組西日本支社 重見 法人 三井住友建設㈱
	中道 正伸 ㈱中道組 原 眞一 コーナン建設㈱	今西 邦夫 ㈱今西組 *伊藤 忠昭 ㈱金山工務店
電気 4	河島 秀光 ㈱きんでん 森 博明 三和電気土木工事㈱	嘉納 秀一 三宝電機㈱ 嶋田 雅景 ㈱クリハラント
空調 4	安原 和利 ㈱精研 春木 雄一 ㈱三晃空調大阪本店	吉武 秀幸 ㈱三冷社西日本支社 若林 尚史 若林設備工業㈱
建材 3	安田 誠 安田㈱ 山中 豊茂 ㈱山中製作所	深江 隆司 アスワン㈱
中国 4	国沢 幹男 ㈱国語・監理 嶋津 孝之 広島大学	清田 剛一 ㈱大方工業所 村重 保則 現代建築設計事務所㈱
東海 6	小宮 三辰 三辰設計事務所 鈴木 慶智 ㈱伊藤建築設計事務所 芳山 明久 東海支部 幹事	後藤 利秋 ㈱和光建築計画研究所 中村 哲士 アトリエ・N *篠原 佳則 安井建築設計事務所
京都 3	長瀬 博一 長瀬建築研究所 高田 光雄 京都大学 山田 昌次 花豊造園㈱	

24人 15人

総数39人 *印は新任

平成23年度
日本建築協会支部長 (敬称略)

京 都 上林 研二 地域生活空間研究所
中 国 森畑 武 MO建築研究室&RG
東 海 *福田 泰造 福田泰造建築事務所

(社)日本建築協会から ご入会のおさそい

建築に関連する各種の活動を行っている日本建築協会に、ご入会になりませんか！

会員は、建築関係の幅広い分野（設計事務所、ゼネコン、官公庁、教育・研究機関、メーカーなど）から個人や団体が参加し、活動しております。21世紀の建築界発展のために、またあなた自身が異業種の方々と交流され、社外ネットワーク形成に役立てていただくことも可能です。

※建築に興味をお持ちの方ならどなたでもご入会いただけます（資格は問いません）。

●会員の特典

- ★ユニークで新鮮な内容を誇る会誌「建築と社会」が毎月配布されます。
- ★話題の建築物、一般では未公開の施設等の見学会や建築関係の著名な講師の講演会・講習会に会員割引で優先的に参加できます。
- ★協会所蔵の貴重な図書・資料の閲覧等ができます。
- ★会誌「建築と社会」に建築作品、研究報告、レポート、ニュース等を投稿できます。
- ★青年技術者の顕彰に応募できます。
- ★協会の各種委員会活動に参画し、様々な情報交換・社外交流の場として利用できます。

●入会申し込み方法

当会ホームページ（<http://www.aaj.or.jp>）の入会申込み画面に記入送信するか、入会申込フォームをプリントアウトし、FAXまたは郵送にて、下記あてお送りください。

〒540-6591
大阪府中央区大手前1-7-31
OMMビル7階
（社）日本建築協会
Eメールアドレス：soumu@aaj.or.jp
TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984

会員の種別と会費

会員の種別			会 費
正 会 員	個人正会員	本部および支部地域	年額 14,400円
		上記以外の地域	年額 12,600円
	団体正会員		年額 25,000円/口
	学生会員		年額 8,400円

建築と社会

ARCHITECTURE AND SOCIETY

|No.1072| 2011 7
日本建築協会

■特集予告

8月号/鉄道駅に注目する
9月号/第58回青年技術者
10月号/建築と防災(仮称)

編集委員会(平成23年度)

■副会長 本松村 友常
■編集担当理事 浅野真一 正行 一樹 貞統 一利 雄祐 寛
○副委員長 勝山 太郎
■編集小委員会 計画系 飯田 国彦 鈴木 克彦 中野 直人 高橋 和也 松田 昇 赤松 次郎 吉村 辰祐 吉村 宏明 荒木 孝司 菅野 忠志 菅野 敦夫 菅野 浩和 菅野 隆史 菅野 章博 菅野 仁子 菅野 純一 菅野 淳司 菅野 充久 菅野 佳代 菅野 晴彦 菅野 敬彦 菅野 俊紀 菅野 多恵 菅野 調将 菅野 晃也 菅野 衛信 菅野 直樹
△飯田 国彦 鈴木 克彦 中野 直人 高橋 和也 松田 昇 赤松 次郎 吉村 辰祐 吉村 宏明 荒木 孝司 菅野 忠志 菅野 敦夫 菅野 浩和 菅野 隆史 菅野 章博 菅野 仁子 菅野 純一 菅野 淳司 菅野 充久 菅野 佳代 菅野 晴彦 菅野 敬彦 菅野 俊紀 菅野 多恵 菅野 調将 菅野 晃也 菅野 衛信 菅野 直樹
★伊藤 浩一 佐藤 雄一 佐藤 平一 佐藤 亮介 佐藤 一郎 佐藤 博一 佐藤 智三 佐藤 平一 佐藤 宣夫 佐藤 好夫 佐藤 耕一 佐藤 尚
△岡田 秋子 岡田 石子 岡田 岸本 岡田 志摩 岡田 角田 岡田 難波

○委員長 ○副委員長 △幹事

印刷 2011年6月25日
発行 2011年7月1日
発行人 社団法人日本建築協会
発行所 社団法人日本建築協会
大阪府中央区大手前1-7-31
電話 06-6946-6981
印刷所 柳澤印刷株式会社
定価 1200円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。

特集●建築と土

■総論	建築と土●藤森照信	22
■各論1	土の民家は守りのかたち●安藤邦廣	24
	一生焼きを入れる焼物人生—山川草木に触れながら— ●山田脩二	26
	人が生きていくところには必ず建築が存在する●久住有生	28
	新たな土の可能性●山下保博	30
■各論2	思い出のアイト・ベン・ハッドウ (Ksar Ait-Ben-Haddou) ●鈴木 恂	32
	客家土楼民居と生土建築の魅力●片山和俊	34
■編集後記		36

追悼文	わが友市川宏君の死を悼む●佐野正一	1
会告	総会議決のお知らせ、通常理事会議決のお知らせ、臨時理事会議決のお知らせ、評議員会議決のお知らせ、「民間(旧四会)連合協定工事請負契約約款」改正のお知らせ、平成22年度事業報告書、平成22年度決算報告書、平成23年度日本建築協会役員会務分掌・日本建築協会評議員・日本建築協会支部長	2
作品作風	学校法人 大阪電気通信大学寝屋川市駅前学舎 あべのキューズタウン 第百六十二母屋 天理教河原町大教会信者詰所	10 12 16
研究の風景	青井哲人研究室●明治大学理工学部建築学科	18
gallery	京都祇園から発する●関井 徹	20
法令コーナー	「五條新町」重伝建地区と建基法緩和条例●上田 朗	37
構造の頁	低騒音・低振動による耐震補強工法—3Qシリーズ— ●小林正和	38
再読	生駒ビルディング●酒井一光	39
関西近代建築		
関西の建築界群像	清水重敦●根木和人	43
新建材の頁	省資源型高耐食ステンレス鋼 JFE443CT (SUS443JI) ●JFEスチール	44
入賞発表	第10回読者と選ぶ「建築と社会」賞入賞 【論考部門】・白井晟一における石の「発見」/倉方俊輔 ・京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心—/中村昌生 【作品部門】・佐野記念病院/介護老人保健施設 栄公苑/ 岡田泰典・西田佳代	45
information	大阪歴史博物館開館10周年記念特別展「民都大阪の建築力」、48 京都工芸繊維大学美術工芸資料館で同時開催、にっぽんの客船 タイムトリップ展、空想のきらめき〜シュルレアリスムとイメージ世界 〜、京都文化博物館リニューアルオープン、「日本美術にみる「橋」 ものがたり—天橋立から日本橋まで—」、フェルメールからのラブレ ター展京都展開催、「建築家のあかりコンペ」作品募集、「夏休み! 子ども絵画コンクール」、医療福祉建築賞2011募集!、建設リサイク ル法説明会(第1回)、塚脇淳展 Drawings+Maquettes	48
月間の動き	平成23年5月分	56

本文デザイン 高橋善丸

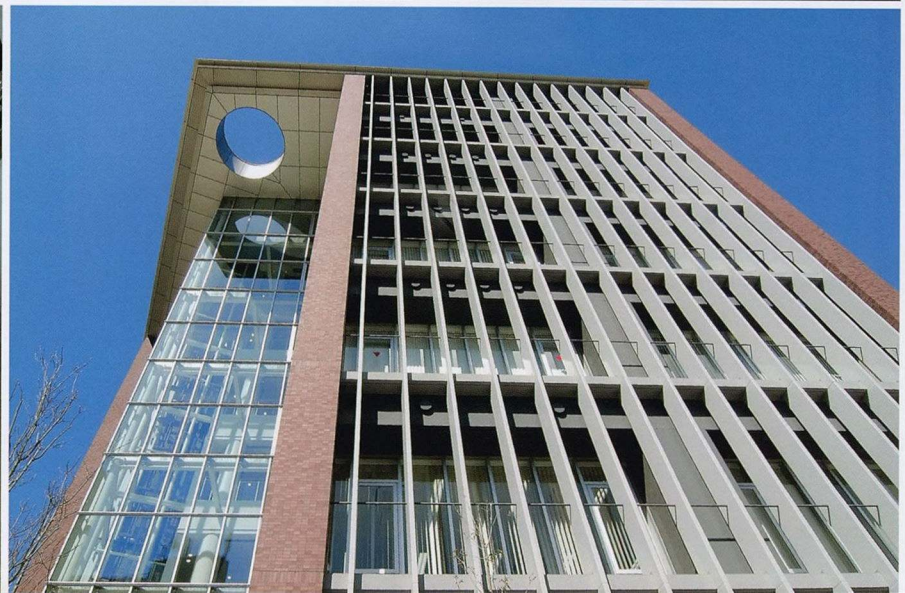
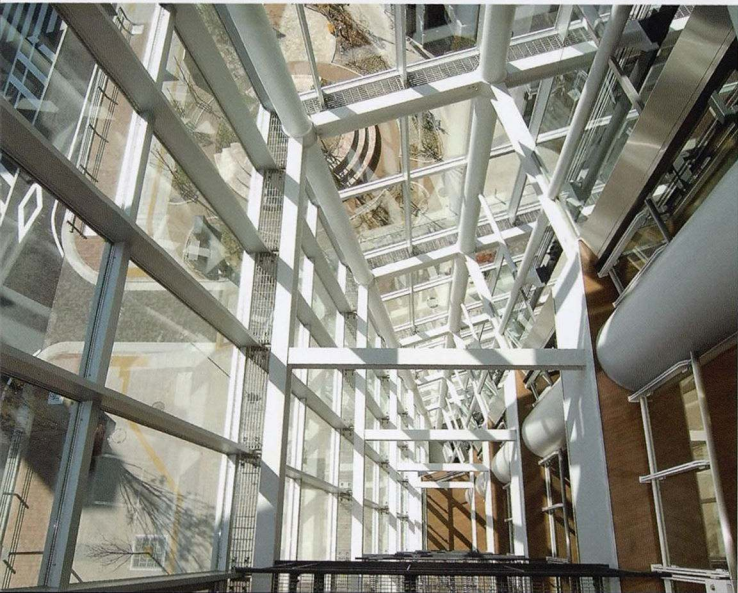
今月の表紙

作品:柳澤顕 表紙デザイン:灰田瑞穂 撮影:表恒匡 協力:アートコートギャラリー

untitled (tangled)

2011年/変形パネルにアクリル絵具/145.5×112cm

生命が環境と相互作用し、絡まることによって成立しているように、絵画においても外部の空間との絡まりを表現できないか。コンピュータ上で形態を膨張させ、レーザーカットによって円形をくり抜いた。形式が図像と連動し、実際の展示では壁画との絡まりとしてさらにその複雑な関係性を提示できたら、と考えている。
(柳澤 顕)



建築主 学校法人大阪電気通信大学
設計・監理 大林組大阪本店一級建築士事務所
施工 大林組

学校法人 大阪電気通信大学寝屋川市駅前学舎

寝屋川市駅前の再開発地区内に、大阪電気通信大学のサテライトキャンパスとして計画された新学舎は、従来の大学キャンパス内における校舎とは異なる様相で、街に対するアピール度の高いファサードデザインの付与を意図した。街に対する開放性を有し“魅力ある駅前キャンパス”として、次の3つのテーマの実現を目指した。

■“賑わい”の創出

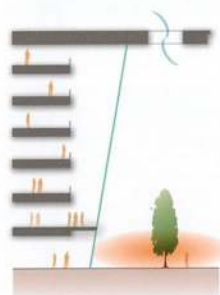
シースルーEVとカーテンウォールの透明な外皮を通して学生のアクティビティを演出し、街の風景との一体感に寄与するため、隣地の三角公園の空間と連続させたオープンスペースを確保した。

■“新たなランドマーク”の創出

大庇のある学び舎が存在感を演出し、光や風を通すために穿たれた丸孔は空間に変化を与え、道行く人々の視線を引き付ける。丸孔に向かって伸びるシンボルツリーは、上昇性をもって成長する学生達を象徴している。

■安全・安心・快適な“教育環境”の創出

快適な教育環境を実現させることを意図して、日射抑制と近隣相互の視線制御を同時に図るため、西・南面には縦ルーバーを設けた。さらに各階に設けた水平庇は、夏期の熱負荷低減に加えて、緊急時救助活動の円滑化にも寄与し、安全・安心な教育環境を実現した。(浅野浩明、三好祥子/大林組)



所在地——大阪府寝屋川市早子町185-1
敷地面積——1,178.64㎡
建築面積——786.94㎡
延床面積——4,721.53㎡
構造規模——SRC造(一部RC造+一部S造)
地上7階
工期——2009年11月～2010年12月
最寄駅——京阪 寝屋川市駅
撮影——硯安雄(フォトスペース セキ)





東側外観



アーバンアベニューから望む立体的な回遊をイメージさせるサークルブリッジとそれを優しく包むテントの天蓋

所在地——大阪市阿倍野区阿倍野筋1-6-1
敷地面積——37,803.45㎡
建築面積——32,984.34㎡
延床面積——183,730.40㎡
構造規模——S造、一部SRC造、地下2階、地上6階、塔屋2階
工期——2009年1月～2011年3月
最寄駅——地下鉄天王寺駅 阿倍野駅
撮影——伸和／八幡輝幸

アーバンアベニュー「花時計」



施行者 ■
大阪市

建築主 ■
東急不動産（特定建築者）

設計・監理 ■
安井建築設計事務所・東急設計コンサルタント共同企業体

施工 ■
竹中工務店・東急建設共同企業体

あべのキューズタウン

（阿倍野A1地区第二種市街地再開発事業A2棟）

【時間軸と事業ロケーション】

阿倍野地区第二種市街地再開発事業の構想は1976年まで遡る。28haの広大な木造密集市街地の改良を目的として、当時の権利者数が3,000名以上という難しい事業を、大阪市が「管理処分方式」による第二種市街地再開発事業として進めた。A2棟はその大規模再開発の完了に近づく核となる事業で、天王寺・阿倍野ターミナルという南大阪の玄関口に位置し、西日本最大級の再開発による商業施設となる。

【建築の骨子と街並みの形成】

本計画では、従前の活力ある商店街であった「あべの銀座」の賑わいを路面店側に残せるように配置し、特定建築者が運営する商業ゾーンをその奥に配置した。これは、この地域で形成された街の活気（権利者店舗）を路面に配置することで、コミュニティとコミュニケーション（地域の交流の場）の保全・育成と、大型ショッピングセンターとの共存共栄を図り街全体の活性化を目指した。全体の建築計画では容積率を抑え、その空間的な余裕を活かし建物をセットバックさせ、ひな壇状に商業空間の奥行きを形成するアウトモールを創出している。またアウトモールから人の流れを受け入れるインナーモールは、吹き抜けなどの変化豊かな空間で構成されており、人の流れを円滑に施設奥へ引き込む。アウトモールとインモールとの両方を備えたハイブリッドモールは、各要素に“コミュニティとコミュニケーションの場”を備え、地域にひらかれたライフスタイル型SCを具現化させてゆく。ファサード計画は、阿倍野筋に面する約300mの壁面を分節化し、地上部街路、屋上の立体的なテラス、パティオなど、緑に溢れた開放的な空間を形成している。それは、単に物を売るだけの施設ではなく、前述した“コミュニティとコミュニケーションの場”を創造し、情報発信源となる施設をイメージしており、外観の大きなガラスの円形屋根テント屋根の天蓋は人々が集まる場の形成を外部に発信している。

（高木幸二／東急設計コンサルタント）



雨に濡れずに回遊できる軒下空間と人々がたたずみ、話そう姿をデザインしたランドスケープ



来訪者の期待感・高揚感を高める、立体的な外観デザイン



賑やかで彩りある空間が広がる地下1階サークルプラザ



3階フードコート前のアーバンテラスは緑と空を感じることが出来る



地下1階天王寺駅から接続するダイナミックなウェルカムコート



緑溢れる開放的な空間の4階パティオ





建 築 主 天理教河原町大教会

設計・監理 竹中工務店

施 工 竹中工務店

第百六十二母屋

天理教河原町大教会信者詰所

天理教の本部がある天理地区には、「神殿」とそれを囲む「おやさとかた」、信者が修行する「信者詰所」など多くの施設が点在している。「信者詰所」とは、各地で日常生活を送っている信者が天理へ帰参する際に寄り集まる場所を言う。

本計画は、大教会を京都に構える天理教河原町大教会の信者詰所で大正13年築造となる木造建屋老朽化の建替えに伴い諸機能を集約するものである。建物は、性格の異なる玄関棟と信者室棟の2棟を渡り廊下で繋ぎ、中庭を囲む配置としており信者同士を視覚的にも精神的にもひとつに「つなぐ」場の創出を目指した。建築へと放たれた真摯で実直な想いが、ここで過ごされる方々に伝わり、自分自身と純粋に向き合える場となってくれる事を心から願っている。

□ 玄 関 棟：大きな屋根でひとつに「つなぐ」

多くの帰参信者をお迎えする玄関、ホール、大広間を主たる用途とした。2本のキール梁で支えられた斜めの大屋根によって迎えられここで心をひとつに「つなぐ」場とした。また、内部空間においても大屋根は勾配天井へとその形を変え、更なる想いへの高まりを持たせた。

□ 信者室棟：素材・自然と「向き合う」

帰参した信者が宿泊する為の施設であり簡素で端正な外観を始め、主たる内装は躯体に直接クロスを張るというシンプルな構成とした。また、共用廊下には天井地下材をそのまま仕上ルーバーとして用いる等「素材そのもの」でどこまで向き合えるか」にも意欲的に取り組んだ。更に、自然環境を有効に享受できるよう各階信者室の共用廊下に面した部分は光を透過する硝子障子とし、各居室内のサッシには自然通風をする為の換気框を採用した。

(菅 孝美・吉田 幸正／竹中工務店)

所 在 地——奈良県天理市田井庄町605

敷地面積——13,960.87㎡

建築面積——2,021.98㎡（敷地全体 3,700.42㎡）

延床面積——4,896.91㎡（敷地全体 7,567.29㎡）

構造規模——RC造 地上4階

工 期——2010年3月～2012年7月（2011年6月現在、仮使用許可中）

最 寄 駅——近鉄奈良線 天理駅

撮 影——フォト・ビューロー 庄野 新



研究の風景

明治大学
理工学部建築学科

青井哲人研究室

建築史・建築論研究室

■はじめに

明治大学青井研究室（建築史・建築論研究室）は、青井哲人先生が明治大学に着任された2008年4月に始まり、今年で4年目になる研究室である。現在は博士課程2名、修士課程10名、学部4年生8名の計20名が在籍し、様々な研究・活動を行っている（写真1）。筆者は2009年度より青井研究室に在籍する、現在博士課程の学生である。ここでは筆者が青井研究室に所属してから現在までの2年と少しの間に経験した、研究室の特徴的な活動を紹介することで、青井研究室の「研究の風景」をお伝えしたい。

■「建築家 坂倉準三展」

筆者が青井研究室に進学し、最初に関わったのは神奈川県立近代美術館で2009年5月から9月まで開催された「建築家 坂倉準三展」に関する活動であった。展覧会に際して、青井研究室は坂倉準三のターミナル計画に関する研究を担当し、渋谷駅周辺の都市模型を制作した。坂倉準三は戦後日本の大都市ターミナル形成に大きく関わったほとんど唯一の建築家であるが、特に継続的に携わったターミナルが渋谷である。模型制作では1966年当時の渋谷に「渋谷再開発計画'66」で構想された「アルケード」と称するペディストリアン・ウェイが重ね合わされた状態を表現した（写真2）。坂倉準三展を機に、駅の建築史、戦後東京のターミナル近傍の形成史は研究室の大きな研究テーマのひとつになっている。

■台湾都市サーベイ

一年間のうち、研究室で最も大きなイベントのひとつが夏の台湾調査である。夏休みに入ると青井先生の研究調査に数名の学



写真1 ゼミ旅行での集合写真



写真2 「建築家 坂倉準三展」で展示した渋谷駅とその周辺模型。白い部分が坂倉準三設計（1/400）



写真3 「台南サーベイ2010」食堂での発表風景

生が同行し、民家の実測と住人への聞き取り調査を行う。近年は台湾民家の寝室に存在する揚げ床「総鋪」の調査を行っている。

一方で、昨年からは青井先生の研究調査とは別に、学生主体で都市サーベイをはじめた。昨年は台南の街を5人の学生が走り回ってサーベイを行った（「台南サーベイ2010」）。

17世紀から19世紀に形成した台湾の都市は、日本の植民地支配（1895～1945）のもと市区改正によって切り刻まれていくのであるが、台湾最古の都市と言われる台南もその一つである。「台南サーベイ2010」は、台南において、市区改正が先行都市を切断した際に現れる境界面を観察し、その「切断」に対して建物が応答している痕跡を採集するものであった。青井先生は以前、彰化の街を地籍図片手に自転車で走り回り、市区改正による「切断」にもかかわらず保存される都市組織の性質を明らかにしている（青井哲人著『彰化 一九〇六年 市区改正が都市を動かす』アセテート、2006年）。

「台南サーベイ2010」はその性質を都市型建築レベルで観察したもので、我々は「切断」に対する応答を観察できるサンプルを300ほど集め、取捨し、聞き取りや実測を行って類型化し、一週間の間にパネルをつくり市内の食堂で発表を行った（写真3）。

このサーベイにおける類型化の特徴は、切断に対する反応を型として取り出したことである。先行する地割りに対してどう「切断」が行われ、残った敷地はどのくらいの

大きさで、接道条件はどうかということを検討すれば、そこに現れる都市型建築がほとんど想像できるのである。例えば写真4の鋭角街屋はもともとの地割りに対して斜めに市区改正道路が敷設された事例である。地割りに従う内部の平面と、市区改正道路に正面を向ける立面、このズレをペランダでつじつま合わせが行われている。写真5の純粹亭仔脚は市区改正道路の敷設により、土地がわずかとなってしまった事例。市区改正道路に対して亭仔脚を設けなければならないため、一階に内部空間がとれなくなっている。二階へは梯子で上がる。写真6の再生産街屋はもともとの土地が市区改正道路によって楔形に残された事例。建物の正面をももとの巷から、市区改正道路側に向け、さらに間口を細分化し5つの店舗に変換している。

これらの事例は一見一つひとつ個性的で、特異なもののように見えるが、その反応には共通性を見ることができる。応答後に生まれる形態は、先行形態、切断の様態、都市建築の原理、建築法規などの複雑な絡み合いの結果として現れるが、それらの関係は固定された関係になく、また無限の組み合わせを持つ関係でもない、一種の論理的なマトリックスから選びとられるようにして生成される。「台南サーベイ2010」は台湾における都市型建築の原理の強靱さを証明するものとなった。

学生主体の台湾都市サーベイは今年度以降も継続的にやっていく。



写真4 鋭角街屋



写真5 純粹亭仔脚

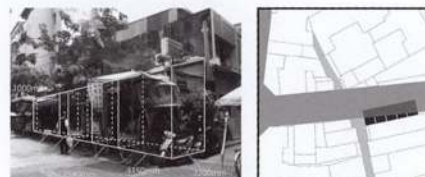


写真6 再生産街屋

3. 切断された土地及び建物をAさんが地権者から10年ほど前に一括で借り上げた。
4. その際、Aさんと地権者の間で交渉が行われた。その交渉によって、地権者からの補償無しで、Aさんの負担で切断された建物を取り壊し、軽量鉄骨の建物を建設した。
5. その建物は都市計画道路に対してファサードを向けて（間口を奥行に変換）5店舗に建物を細分化された。分譲した店舗をAさんの妹さん、友人・知人などに貸し出した。

■都市発生学

青井研究室では2009年度末から「都市発生学」と称した研究会を主催し、これまで3名の先生方にご講演していただき、議論を行ってきた。都市発生学研究会は、都市を生成の相で、つまり生き物として捉えた場合、いかなる議論が展開できるかを考え、その概念と体系を構築しようと始めた研究会である。我々が捉えようとする都市の生成は、マクロに捉え得る都市の生長や収縮ではなく、建物やその凝集構造を問題とするレベル、つまり「都市組織urban tissue」レベルでの生成である。これまでに行った研究会では、都市組織の生成がドラスティックに観察できる、災害後の都市をテーマに、どのように都市が復元・再生していくのか、そのプロセスを考える議論を行った。

第一回の研究会は「関東大震災後の復興プロセス バラックから本建築へ」をテーマに田中傑先生（東京理科大学）にご講演いただいた。関東大震災で罹災した東京の市街地には23万棟ものバラックが出現し、復興事業が施行されるまでの間、生活の場となった。田中先生は、そのバラックがいかなる経緯で、いかなる主体によって建設され、さらに合法的建築物である「本建築」へとどのように更新されていったのかを建

築・都市計画法規や復興事業との関係の中でご紹介された。田中先生は震災からの都市組織の再生過程を驚異的な解像度で明らかにされている。

第二回の研究会は「闇市＝都市論序説—都市建築史から見た東京の闇市」をテーマに初田香成先生（東京大学）にご講演いただいた。新宿の思い出横丁や吉祥寺のハモニカ横丁など、戦後東京の闇市を起源に持つ駅前の空間をとりあげ、その誕生から変容までの過程を明らかにし、戦後の闇市が現在の東京の都市空間にいかに関与しているのかをご紹介いただいた。闇市の形成と変容を追うことで、東京の駅前空間形成の一端が鮮やかに示された。

第三回の研究会は「移動する人々—災害の住居誌—」をテーマに牧紀男先生（京都大学）にご講演いただいた。地震に対して強い家をつくるのが災害に備える唯一の方法のように考えられているが、災害後の「移動能力」の大小も災害に対する対応能力を決定している。災害後、人々の移動によって地縁コミュニティが解体しても、別のネットワークを使って人々は新しい定常状態をつくり出す。牧先生は災害前とは違う次元での新たな安定を、復興が成ることだと言う（写真7）。

以上のように青井研究室では災害後の都市を舞台に、その復元・再生過程を考える公開研究会を3回開催し、研究室でも戦後復興期の都市形成を研究してきた。そんな我々にとって、2011年3月11日の東日本大震災は問題意識を大きく問われる機会であったことは言うまでもない。

■三陸海岸の集落 災害と再生：

1896、1933、1960

青井研究室としては震災後、津波による災害からの復興に対して後方支援となるようなサイトを集成することとし、作業を始めた。具体的には、三陸地方の集落が経験してきた過去の津波災害と、その後の復興・再生の軌跡を集落単位で把握できるサイトを先人たちの記録をもとに集成した「三陸海岸の集落 災害と再生：1896、1933、1960」（写真8）。

1896年以降三度の津波が三陸海岸の集落を襲っており、この地方における津波災害は反復的なものであることがわかる。さらにその都度、復興・再生の計画が練られ実施されてきたことを考えれば、今回の東日本大震災からの復興を歴史の問題として考えることは極めて重要であり、過去の事実と先人の歩んだ軌跡を観察することは大きな意味を持つと考えられる。

「三陸海岸の集落 災害と再生：1896、1933、1960」は現在約40集落（2011年6月初旬現在）の情報を公開しているが、今後も更新を続け最終的には約200集落の情報を公開する。

■研究室の震災からの復旧

震災から1ヵ月ほど経ち、4月になると研究室では三陸のサイト集成を行う一方で、破損した書架や机を学部4年生がつくり直すプロジェクトを始めた。彼らは構法・材料・施工上のアドバイスを、建築家の光本さん、濱名さん（mihadesign）や材木屋からいただきながら、設計を進めている（写真9）。書架、机の他、物置兼仮眠スペースとなるロフトも組み込まれる予定である。当初、材料の確保が心配されたが、なんとか夏休み前の完成を目指す（写真10）。

■おわりに：今後の課題

以上、青井研究室のこの2年間の活動で特徴的なものをご紹介した。研究室は発足して4年目に入り、上記の活動を含め個々の研究も充実しつつある。今後の課題は、その成果をきちんと社会化することである。今年度は今までの活動とともに、社会化を意識し、作業を行っていききたい。

（文責：石樽督和）

青井哲人のブログ：VESTIGIAL TAILS/TALES
http://d.hatena.ne.jp/a_aoi/
 青井研究室のブログ：
<http://d.hatena.ne.jp/aoi-lab/>



写真7
第三回都市発生学研究会
牧紀男先生のご講演



写真8 サイト「三陸海岸の集落と再生：1896、1933、1960」
 (<http://d.hatena.ne.jp/meiji-kenchikushi/>)



写真9 mihadesignの光本さんと濱名さんにご指導いただいている



写真10 設計中の家具らしきもの

京都祇園から 発する

アーキテクト
関井 徹

ご縁により京都祇園の花街に設計事務所を開設するにあたり、日本でも稀有なこの環境を建築設計の場に留めず、建築に関わる多種多様な世界の方々が集い発信できる場として開放できたらと考えました。

築70年のお茶屋建築を建築事務所でありながら、展示やコンサート、茶会等様々な催しに利用できるようコンバージョンしました。これまで、お琴のコンサートや絵画の展示会を行っており、今後も積極的に展開していきたいと考えています。



関井 徹 (せきい とおる)

- 1963 兵庫県生まれ
- 1987 京都工芸繊維大学卒業
- 1989 京都工芸繊維大学修士課程修了
- 1989 株式会社佐藤総合計画勤務
- 1996 株式会社佐藤総合計画退社
- 1996 関井徹建築設計事務所設立

<http://www.sekii-ad.com/>

特集

建築と土

建築と土とは古来より切っても切れない関係にあります。日本建築の土壁はもとより、床の三和土や屋根の瓦も土でできています。レンガも土であるし、中東やアフリカには全てが土でできた民家や宗教建築も現存しています。また現代建築におけるタイルもその原料は土でできています。

今回の特集は建築だけではなく、人間のいや全ての生物の営みに欠かせない「土」と、その土を素材として立ち上がる建築の事例およびその考察を通して、現代における建築そのものを見直す機会としたいと思います。

編集委員 静 茂夫

【総論】

建築と土●藤森照信

【各論1】

土の民家は守りのかたち●安藤邦廣

一生焼きを入れる焼物人生—山川草木に触れながら—●山田脩二

人がいきているところには必ず建築が存在する●久住有生

新たな土の可能性●山下保博

【各論2】

思い出のアイト・ベン・ハッドゥ (Ksar Ait-Ben-Haddou) ●鈴木 恂

客家土楼民居と生土建築の魅力●片山和俊

【編集後記】

建築と土

東京大学名誉教授
工学院大学教授
藤森照信

1946年長野県茅野市生まれ。1971年東北大学工学部建築学科卒業。1978年東京大学大学院建築学専攻博士課程満期退学。1980年工学博士号（東京大学）。1985年東京大学生産技術研究所助教授就任。1986年『建築探偵の冒険・東京篇』でサントリー学芸賞を受賞。1991年『神長官守矢史料館』で建築家デビュー。1998年東京大学生産技術研究所教授となり2010年同大学を定年退官。工学院大学教授主任。主な著書に「明治の東京計画」（岩波書店／1982年）、「建築探偵東奔西走」（朝日新聞社／1988年）、「昭和住宅物語 初期モダニズムからポストモダンまで23の住まいと建築家」（新建築社／1990年）、「タンポポハウスのできるまで」（朝日新聞社／1999年）、「建築史的モンダイ」（ちくま新書／2008年）など。

今から20年前、45歳の時に処女作神長官守矢史料館を手がけた時から土という建築材料への関心はあった。

吉阪隆正の学生時代の発言に刺激され、土の塊のような建築を作りたいと志ざし、設計をしてみると、大きな壁が立ち上がる。冬の凍結融解と台風時の流亡である。もちろん、漆喰で仕上げるか、軒を深く出して雨が当たらないように工夫すれば大丈夫だが、土を表現の前面に出そうとするとそうはいかない。

土が直射日光を受けて、青空や緑をバックに浮き上がる光景を生むには、軒の出は浅くなければいけないし、時には雨に当たって少しずつ表面が削れ、中のワラスサや小砂利がしだいに顔を出す味わいも欲しい。

もちろんどうしたら可能か、左官界の指導者や材料学の研究者にも聞いた。しかし、「これまでだれもそんなことしようとしなかったから、実験もないし、答えもない」という状態。

しかたなく、家の冷蔵庫で実験を繰り返し、家のブロック塀で成果を試してみるのだが、分ったのは“セメント分を多くすれば大丈夫だが、しかしそのぶん土らしい風合は失われる”というバカバカしい結論。20年前、この実験をたまたま目撃した伊東豊雄は、「ヘンなことをしてる」としか思わなかったそう。

結局、現代建築に土を使う方法は見つからず、土色に着色したモルタルにワラスサを混ぜて塗った。内壁と外壁では若干異なり、内壁では木ゴテで粗く塗り、外壁では、塗った上に凸凹を付け、さらにボンドを少し混ぜた泥をハケ塗した。

その後の工事ではハイフレックスを少し混ぜるようにしている。これで凍結融解を防ぐことができたし、表面にはごく薄いとはいえ土の層があるから、ワラスサの入った土としが見えない。

どれくらい土としか見えないかというと、左官の神様の久住章さんすら、土に見え、強いショックを受けた、と後で聞いた。こんな土の現代建築が可能なら自分もやってみよう、と決めたそう。その後、久住章さんは大阪ガスが築炉用に開発していたケイソード材料を使い、外壁でも大丈夫であることを証明し、以後、ケイソードが広まる。ここに注意しておいてほしいのは、例の外壁用ケイソードは珪藻土だけで保っているわけではなく、混入している化学物質のおかげということ。今でも日本では土のままでは使えず、何か混ぜないと崩れる。

20年前の処女作で土と取り組み、日本における土の限界を思い知らされ、以後、“ワラス入り土風モルタル”ですませ、土と改めて取り組み直すことはなく過ぎてきた。その間、土風の表現と取り組む建築家がポツポツと現れたことは、とてもうれしかった。

土への表現と改めて取り組み直すことは止めたが、土の建築への関心はずっと変わらず、さまざまな知見を得、思索を深めることができた。

まずアフリカの土の建築から。サハラ砂漠の南に位置するマリ共和国に世界一の土の建築<ジェンネの泥の大モスク>はある。私こ



神長官守矢史料館

そ日本の建築界では最初に訪れるべき、と思っていたのに、ウカウカするうち小林澄夫、久住章らのグループに先を越されてしまった。

でも、グループで行かなくて良かった。サハラ砂漠とニジェール川というアフリカの土と水の二つが、その接点に生み落したく泥の大モスクは、ヤギと裸足の子供が遊ぶ広場に一人たたずみ、眺めるのにふさわしい。

一人たたずみ考えた。これまで訪れた古今東西のどんな建物とも印象が違う。この違いはどこから来るのか。

サハラ砂漠の乾いた青空を背にそびえたつ幅100m、高さ20mの泥だけで出来た建物を前に考えれば、誰でも何かしらの新しい認識を得ることはできるだろう。分った。

“泥の建物には目地がない”

自分の立つ広場から始まり、建物の壁際に到り、立ち上り、屋根となって背後に回り、壁を下り、また地面となって泥の町へと広がってゆくが、そのどこにも目地が見当たらない。切れ目がないのだ。

そもそもなぜ建物に目地が発生するのか。理由は簡単で、この世の各所から集めてきたさまざまな異なる物質を組み合わせるからだ。異なる物質を組み合わせると、その接合にどうしても目地は生まれる。目地は人間の作る建物の宿命にして、建物の証でもある。

一方、動物でも植物でも生命体には目地はない。朝起きて鏡を見たら、自分の顔に目地があったらイヤだろう。シワに加えてメジ。目地の汚れやメジからの水の浸透が自分の顔

面で起きるなんて、女性でなくとも私でも嫌だ。

なぜ生命体には目地がないかの理由は、これまた簡単で、一つの細胞の分裂の繰り返しにより出来たからだ。人間のようなどんな複雑な生命体も元をたどると一つの細胞。

泥の大モスクの印象が、それまで訪れたどんな建物とも異なっていたのは、人間が作った建築にもかかわらず、まるで生命体のように目地がなかったからだ。

建築家という人たちが、普通の人が気にもとめない“目地の納り”をあれほど気にかける理由も、これで氷解するだろう。目地こそ、人が作る建築と、神様の造った自然物を分ける標識なのである。目地は人のしるし。

ジェンネの泥の大モスクを見てから、泥という建築材料への関心が再燃し、アメリカのサンタフェ近くのタオスへ＜サン・フランシスコ・デ・アシス教会＞を見に行った。1813年に作られた教会で、地元原住民の泥の建築の伝統とニューメキシコのスパニッシュの伝統の混合によって生まれたアメリカきっての泥の建築として知られている。

泥の建築は、アフリカ大陸、ユーラシア大陸、アメリカ大陸どこにもあるが、その全容はすでに判明していて、アフリカ代表がジェンネの大モスク、アメリカ代表がタオスの教会、そして残念ながらユーラシア大陸にはそれほどものはない。泥の建築について考えるにはジェンネとタオスの二カ所を訪れればいい。ちなみに村野藤吾はタオスを訪れてから新潟県糸魚川に＜谷村美術館＞を作っている。

タオスでも、私は新しい認識を得ることが

出来た。

まず、泥のインテリアというものは無い、という残念な事実。日干し煉瓦を積み上げて作る泥だけの建築も、天井だけは泥ではない。丸太の根太を架け渡し、草や小枝を並べた上に牛フン入りの泥を塗って屋根を作るから、室内の天井には根太や梁が現われる。ジェンネもタオスもそうだった。タオスの場合、室内の壁も漆喰で仕上げられていた。

中国のヤオトンにはもしかしたら土だけのインテリアというものがあるかもしれないが、私の訪れたヤオトンは、土のヴォールトの表面に漆喰を塗っていた。

タオスのインテリアは期待はずれだったが、外部は素晴らしい。ジェンネのような超絶感はないかわり、ヒューマンスケールの泥の味わいは深い。とりわけ建物の出隅みや背面に取りつけられた泥のふくらみがいい。パットレスと呼ぶのかどうか知らないが、泥の建築は長い年月にじだいに壁の下の方が外に向ってはらむ。はらみを押さえるために外から新たな泥を盛り上げることになるが、この盛り上がりが素晴らしい。若い女性の乳房とくらべられるくらい造形的にも触覚的にも魅力にあふれている。昔の経験を思い出して書くしかないのがまことに残念。

ここでも泥の建築は、生き物のようであった。

(ふじもり てるのぶ)



ジェンネの泥の大モスク



土の民家は 守りのかたち

建築家
筑波大学大学院教授
安藤邦廣

1948年宮城県生まれ。九州芸術工科大学工学部環境設計学科卒業。東京大学助手を経て1998年より現職。

日本及びアジアの伝統的住宅の研究・木造建築のデザインと技術開発の研究。近年は特に里山の保全と民家の再生を連携する活動および国産材の活用を図るための板倉の家の設計と普及に取り組んでいる。

主な著書に「茅葺きの民俗学」(はる書房/1983年)、「現代木造住宅論」(INAX出版/1995年)、「住まいを四寸角で考える」(学芸出版社/2005年)、「民家造」(学芸出版社/2009年)、「小屋と倉」(建築資料研究社/2010年)等。

主な受賞に日本建築学会奨励賞1989年、福島県建築文化賞(共同設計)1994年、日本建築学会賞(論文)2011年など。

■戦乱がもたらした土壁■

日本の民家が土壁で造られるようになったのは、戦国時代(15~16世紀)のころである。日本最古の民家とされる箱木家住宅(兵庫県神戸市)は千年家と呼ばれるほど古い民家であり、このころに建てられたものと推定されている。その外観は厚い土壁で囲われ、日本の民家の開放的なイメージとはほど遠いものである。内に入ると、土間は薄暗く、天井は吹き抜けた大きな空間だが、壁にあげられた窓は極めて小さい。床上の部分は表と裏に分割され、オモテは客間で、ウラはオイ(茶の間)とナンド(寝室)に分割されている。このオモテとウラを仕切る壁は柱間に厚板を落とし込んだもので、外周りの厚い土壁とは異なる造りとなっている点が興味深い。床にも壁と同様に厚板が張られ、客間のオモテは木で構成された空間となっている。

近畿地方の他の古い民家を見ると、内部の間仕切り壁も土壁になっている。さらに時代が下り、17世紀や18世紀の民家になると天井にも土が載せられ、土の囲いはさらに徹底されていることがわかる。この土で囲われた住まいの出現は、日本の住宅の歴史を画するものであり、民家の成立はこの土壁の導入と深く関わっているのである。

15世紀といえば戦国時代の始まりで、それまでの社会経済体制に代わって新しい社会秩序がもたらされ、建築も大きく変わる。その背景には森林資源の変化があげられる。弥生時代以降、日本列島は稲作農耕の拡大によって森林は後退してきた。さらに鎌倉時代に武家の台頭によって戦乱が続く、その武器製造のための鑄鉄の増産も重なって、近畿地方から中国地方の森林に過剰な伐採が進む。そして15世紀の応仁の乱に始まる戦国時代に、

京の町で度重なる戦災と復興が繰り返された結果、森林資源は枯渇するに至る。

このような社会背景で登場した新しい建築技術が土壁であった。それはまず不足する木材資源を補うためであり、また戦乱の中で命と財産を守るための防火構造であった。軸組構造に小舞をかいて土を塗る構法は奈良の仏教建築に始まる。しかし住宅建築としては、古代の寝殿造りの壁は板壁であり、中世の書院造りでは、棧組みに紙を貼った貼付け壁が主体である。その後の数寄屋造において初めて土塗り壁が住宅の主役となる。この数寄屋造は戦国時代に千利休によって草庵茶室として創造されたもので、それは日本における土の文化の到来を告げるものであった。

ところでこの戦国時代を象徴する建築はいうまでもなく城郭建築であり、これも土で塗り込めた建築を極めている。このように土壁は戦国時代に登場した城郭、数寄屋、そして民家に共通するこの時代を特徴づける建築技術であることがわかる。

■稲作が土壁を普及させた■

土壁の材料として忘れてならないのは稲藁である。粘土に大量の藁スサが混ぜあわされて、藁の繊維と粘り気によって土壁は丈夫な壁に固められる。こうしてみると土壁は稲作農耕の普及に伴って、そこで得られる大量の藁を利用したものであるということが出来る。この時代に稲作を生業とした農民が、その住まいを田んぼの土と藁で造ったのが土塗りの民家であったといっても過言ではないであろう。木材資源に代わるものとして、草が新たな資源として注目されそれを利用したものが土壁であったといえる。

土塗りの壁は室内環境からみると、気密性が高く温熱環境を安定させる役割を果たす。



箱木家住宅(兵庫県神戸市・15世紀)厚い土壁で囲まれた閉鎖的な構えは戦国時代の世相を反映している。



同内部 貫構造に土塗り壁の技術開発が民家を成立させた。壁には大量の稲藁がスサとして練り混ぜてある。



同オモテ(客間)の壁だけに落とし板壁で、それ以前の古い壁構法を留めている。

天井に土を載せるとその効果はさらに高まる。木材資源が不足する中で、建築資材に加えて燃料にも効率化が求められ、薪から炭火の暖房に変わっていく。いろいろで薪をふんだんに燃やすには通気性のある造りが求められる。気密性の高い土塗りの民家では、薪を燃やすいろいろは不向きで、炭火の暖房が備わることで成り立っているのである。このような民家の火の使い方の変化の背景には、稲作農耕の普及も重なっている。それまでのいろいろで雑穀を煮炊きして暖房を兼ねていたものから、かまどで炊飯して、それと暖房は分離して炭火で暖を採る方式に変わる。食生活の変化が火の使い方を変え、ひいては家の造りを変えていくのである。

■土塗り板倉の謎■

日本の倉は古代には木を組んで造られていた。校倉や板倉がその典型的な例である。土塗りの倉が登場するのはやはり室町時代のことで、京の町で、金貸し業者の建築として土倉（どそう）とよばれていた。都市化が進む中での防火構造として土塗りの倉が必要とされたといえる。こうして、土塗りの倉は戦国時代を経て江戸時代に、今日みられる土蔵として都市部に普及していく。その一方で、日本の山間部、特に森林資源の豊かな中部地方から関東山地や東北地方の農山村では、板倉が今でも数多く残されている。木材資源が豊かで火災の心配の少ない地域では、古代の板倉が生き続けてきたのである。

そのような板倉をみると、板倉の上に土塗りとしたものがあり、民家における土の使い方を考える上で、大変興味深い。長野県の八

ヶ岳山麓から群馬県の関東山地にかけて、このような土塗り板倉がまとまって分布している。標高が500m～1000mの山間地帯は寒冷的な気候で、カラマツやアカマツの優勢な森林地帯で、その豊富な木材を用いて立派な板倉がつくられてきた。板厚は6センチから10センチ程度で、それをせいらうに組んだものや柱を立ててその間に板を落とし込んだ構法の二通りがある。この厚板の上に土を6センチから10センチ程度塗って仕上げるのがこの地域の一般的な構法である。板壁の全面に堅木のくさびを打ち込んで縄をたらし、そこに土を塗り込むのである。

板に土を塗る理由を尋ねると、昔からそうしているから、あるいは防火のためという答えが返ってくる。しかしこれらの山村は必ずしも建て込んでいる訳ではなく、防火の必要性がそれほどあるとは思えない。土がはげ落ちている板倉もあり、そこで板倉の構法の詳細をみると、板の上下の重ね目にはぎ合わせはなく、隙間も目立つ。従ってこの地域の板倉は土を塗って目止めとすることで初めて倉に必要な断熱性と気密性が備わっている。あわせて防火性能も獲得していると考えられる。

日本列島の北方の地域にはこのような丸太や角材をせいらう組とした民家が少なくない。中国の東北地方の民家は丸太を組んで、その上に厚く土を塗り込めた造りが一般的であり、朝鮮半島の山間部や離島にもそのような民家が残されている。この丸太組は基本的には住民自らあるいはその相互扶助によって造られていることである。山で木を切り倒し、丸太のままで交差部に相欠きを施して組む。丸太は曲がり、太さも不揃いなので当然隙間

だらけ。そこに土を塗り込むことで初めて壁ができる。屋根にも厚く土を載せて断熱と気密を高めている。

このようなせいらう組を基本とした民家はユーラシア大陸の北方の森林地帯に共有された文化であり、その文化の流れが日本列島に及んでいた可能性は否定できない。八ヶ岳山麓や関東山地といった寒冷的な森林地帯に、縄文文化としての北方文化の名残を留めたものの、それが土塗り板倉ではないだろうか。稲作農耕の普及によって、山地から平地へと居住域を移していく過程で、冬向きのこの住宅形式は衰退し、民家が夏を旨とした造りになる一方で、土塗りの板倉造りは倉として受け継がれたのである。この地域では氷点下20度をこす厳しい寒さに見舞われる年もあり、あるいは強風の吹き荒れる日々もある。その時に備えて食料を備蓄し、いざというときには倉に逃げ込むことで生き延びることができた。母屋は壊しても倉は壊すなといわれるように、それは単なる倉庫ではなく命を守る最後の砦なのである。

(あんどろ くひろ)



せいらう組の民家 韓国鬱陵島

民家はせいらう組を基本とし居室(右側)のみを土で塗り込め、かまどの廃熱を利用したオンドルで床暖房する。納屋や畜舎(左側)はせいらう組のまま



土塗り板倉 長野県茅野市 江戸時代後期～明治時代



同細部 厚板の全面に堅木のくさびを打ち込み、そこから縄を垂らして土を塗り込む



中国東北地方(旧満州)の民家 北朝鮮国境の長白山麓の民家は、丸太をせいらうに組んだ構法が基本で、床暖房する母屋だけは土を塗り込め、納屋や畜舎はすべてせいらう組のまま。

一生焼きを入れる 焼物人生

—山川草木に触れながら—

カワラマン

山田脩二 淡路かわら房主宰

山田脩二

1939年兵庫県西宮市生まれ。桑沢デザイン研究所終了後、藤凸版印刷を経て1962年にフリーのカメラマンとなり、20年間フォト・グラファーとして建築・美術などの写真を撮る。1982年に職業写真家に「終止符宣言」をして、淡路島津井で粘土瓦の製造に従事。1984年にフリー瓦(カワラ)マンとなり、瓦のデザイン・企画・製造・販売などの新たな提案を行うために、「山田脩二淡路かわら房」を設立。主な著書に「山田脩二・日本村1969〜79」(写真集 三省堂/1979年)、「カメラマンからカワラマンへ」(筑摩書房/1996年)、「瓦—歴史とデザイン」(小林章男・共著 淡交社/2001年)、「山田脩二 日本旅1961〜2010」(平凡社/2010年)受賞は、吉田五十八賞 特別賞(1991年)、兵庫県文化功労賞(2006年)、織部賞 岐阜県(2007年)、日本建築学会文化賞(2008年)など多数。

「山川草木」という言葉の響きに、私、若い頃から限りなく心を打たれてきました。

「建築」・「山川草木」・「光と影」の三位一体…、なんとも曖昧模糊で漠然とした表現ですが、結構、奥行きが深く好きです。

建築は、山川草木にまみれて溶け込み、歳月と共に移ろう光と影によって際立ち建ち上がってくる風情が好きです。ますます曖昧模糊バージョンになってきました。

建造物たちが、地域・地場の風土の中で怪しげに風化しながらひっそりと佇み続けて消えていく風姿も好きです。

いつの頃からか、建造物たちを必要以上に管理し取り囲み、かくあるべし…と過保護な規制をする風潮が強くなり、枯れてゆく表情の美しさが単調・無表情になってきました。「侘び・寂び」の心…とまでは言いませんが残念な風潮です。それもこれも！木や土や石の素材の使い方に「粹」な遊び心の余裕がなくなったのでしょうか。

山川草木、石、木、土、水などが、建築と強調しあって生き続けて来た深く永い歴史が、ごく普通の暮らしの中にありました。が、なに！今更「建築と土」……？

「土壁」はさておき、焼物について一言二言。

陶芸の世界では、「土と炎の芸術…」など大袈裟に賛美賞賛する過大評価の困った風潮があり、一方で土を焼いて「瓦」を製造すると、直接関係はないのですが、(多少ある

かな)「瓦礫の山」などと言うたとえがあります。(私、人生は「瓦礫の山田…ダ」と自嘲してます。淡路島で二東三文の7万枚の瓦を積み上げた「瓦礫の丘」(覚公園)や、瓦換算30万枚を敷き込んだ「瓦礫の道」(いらかの道・東京 世田谷区)や3,000㎡に瓦のこばい小端立てを並べた「瓦礫の広場」。(草津 湯畑広場などの仕事もしてきました)

土は焼けばいいというモノではありません。

世の中、なにかもかも合理化・均一化・能率・機械化されると、手垢にまみれ、使い古された「手作り」モノを、やたらと職人の伝統の技…などと評価する一方で、木・土・石の粉いモノが、限りなく大量に安く使われる、益々困った風潮です。

そんなご時世、時勢に自省を込めて「建築と土」の特集記事を組むようでは、余程建築と社会(世間・業界)が、本モノの「土」「焼物」から遠ざかってしまい、遂に「この期に及んで」しまったのか…と。軽く厳しくとりとめのない悪態を試みてみたくなる今日この頃の、私には全く展望の見えてこない、ピン트가合っていない建築業界と雑誌媒体です。

どうも、のっけからくどくどと行き先の定まらない、とりとめのない書き出しになってしまいました。が、次へと、喋り続けます。

日本は地球上の、土や木や水と身近に接している小さな島国です。世界でもきっと稀に見る過剰で立派過ぎる美的文化・精神・技能



淡路島・瓦生産地集落の津井 瓦製造のため周囲を削り取られボツンと残った粘土層。1982年撮影

を持ち、頭脳・経済など多方面で先進的で驚異的な島国だと高い評価を受けてきました。(ありがたいことですが、それも3・11の東日本大震災と原発事故で相当にぐらついてきました。)

私が今暮らしている淡路島は、島国の中のもっと小さな、地ベタ・土たちが身近に寄り添っている島です。海に浮かんだこの国の比較的大きな四つの島はさておき、それ以外の沖縄本島・佐渡島・奄美大島などは特有の魅力的な島の風土感が漂っています。この三つに次ぐ面積の淡路島は性格の異なる瀬戸内海と大阪湾、三つの海峡(明石・鳴門・紀淡)に囲まれ、結構「土」の島なのですが、のんびりしすぎて特性豊かな風土感があまり溢れ出てきません。

1982年、突然この島に住み始め、島を代表する地場産業の一つ、「瓦」に物好きにも“深く関わり”心を寄せて、早、というか、ただかやっと30年になりました。(この国の瓦の伝来の歴史、1300有余年に比べると、小さな点にもなりません。)

淡路島で四季折々の瀬戸内海の海の風に吹かれながら、なだらかな丘陵の続く里山の光と影にまみれて「淡路瓦師・カワラマン」と自ら名乗って全国を飛び回ってきました。

かつて、1962年頃から1982年までの20年間、東京を中心にグラフィックデザイン・編集・取材など特に写真撮影を稼業の「カメラマン」でしたが「カワラマン」への一字違い

の転地・転職・転進をして、当時も今も、仕事は手際よく片付け仕上げ、自分の勝手な見知らぬ地域・場所へ、各地の風土を味わいながらの無駄の多い酩酊・徘徊の旅を続けてきました。

「都市・街と村・集落」「山村と海辺」「一級河川と小川」「河原と土手」「国道と農山道」「舗装道路と土の道」などをぶらりと山川草木に触れながらのトボトボ旅でもありました。

「建築と土」から遠ざかり「ぶらり旅行脚」になってきました。

若い20代の初めの頃から全国津々浦々を粋狂で酔狂な、寄り道・遠まわりの回り道、道草だらけの三筋四筋の旅を繰り返し、「オレの人生、焼き入れ続け。20代は写真デザインの雑務と雑仕事の経験と修行。30代は特異なスタイルを持った写真を焼き込み、40代は大量の土で瓦や土管をドカーンと焼き、50代は山に入って雑木の炭焼き現場に…。60代に老化した残りわずかな気力、体力に風前のかすかな火を灯し、写真も土も木も焼き、スミから炭まで焼いて灰になってハイな気分がハイ……サヨウナラ。アレ、焼きと酔いが回ったゾ…」と。

冗談と本気と駄洒落を織り交ぜて一人、悦に入り大言壮語。終わりのない道草だらけの迷走の旅が続けられれば最高……と思い続ける今日この頃です。(原文のまま)

(やまだ しゅうじ)



淡路島・津井 達磨窯と窯ざや(建屋)



淡路島・津井 達磨窯の建屋から黒煙を上げて粘土瓦の焼成中。

注:「達磨釜」について
ダルマさんが背中合わせて座っている姿に似ているので達磨窯と呼ばれた。昭和30年代頃までは、瓦を焼成するために土の達磨窯が全国津々浦々の瓦屋で使われていた。が、現在、全国で数基しか稼働していない。3年前淡路島・津井で山田脩二が主宰し、達磨釜を復原築窯し話題となった。かつて津井地区にも200基もの達磨窯が昼夜稼働していた。いつか機会があれば時間をかけて「達磨窯と土」について大いに喋ります。 山田脩二



淡路島・三原 必至に生き残る屋根瓦の生命力。1990年撮影

人がいきているところには 必ず建築が存在する

左官職人
久住有生

1972年淡路島生まれ。3代続く左官業の家に生まれ、3歳から鋳をにぎる。高校卒業後から各地へ修行に出て、さまざまな親方から左官技術を学ぶ。1995年久住有生左官を開設。ドイツ、フランスなど、海外で経験を積む。1997年京都に改めて修行に出て、日本の文化財建築の現場で腕を磨く。高い左官技術と独創的なアイデアで建築に新風を吹き込み、大きな評価を得ている。

主な施工物件に
「JR金沢駅」エントランスホール天井部左官工事（石川県）2004年、「INAX ライブミュージアム 土・どろんこ館」企画立案・左官工事（愛知県）2006年、「インドネシア大使館官邸」内部修復復元工事（東京都）、「ナント・サンナゼール現代美術祭 エスチュエル」（フランス）2007年、箱根富士屋ホテル 別館「菊華荘・桃の間」内装改修左官工事（神奈川県）、港区立芝浦小学校 階段室大壁・校庭版築築山（東京都）、ITOH DINING by NOBU 左官工事（神奈川県）いずれも2010年

2006年よりフランス グルノーブルにあるグランザアトリエで行われるワークショップの講師を務める。

長い歴史の中今日まで、建築は、その国の文化や風土・気候といった自然環境を背景にその土地の特色が生かされながら作られてきた。

それぞれの土地にはその土地の“色”がある。その土地の自然環境—土・空・海・水・樹木—の中で人間が生活する。人間が手を加えてつくるもの—着るもの・食べるもの・住む処—数えきれないものたちにもその土地の“色”が表われる。

自然の材料から建築がつくられ、建築が集まり街並となる。街は風景の一部となる。

その土地土地の自然の材料から創られた建築は周りの色と揃って自ずと風景になじむ。

同じ材料からつくられ、似た色や質感を持った建物が集まると統一感のある街並がつくれる。その街と周辺がつくる風景は美しい。

人に感動を与える建築はその土地の自然と人の感性が共鳴する処につくられると思う。

■都会のなかの土■

土は世界中どこへ行っても会うことが出来る。場所、時代を問わず、子どもは土と戯れて遊ぶ。

あまり知られていないが、地球上、南極北極以外の様々な場所で土の建築は存在するのだ。現在でも多くの国で土の家が建てられ、多くの人々が土の家と生活をしている。

このように土は人間にとっても近い存在である。しかし“本物の土”が現代建築の仕上げに使われる機会は本当に少ない。一見、“本物の土”の仕上げに見えるものも実は化学物質を混ぜた“偽物の土”を使ったものである場合が多い。

それら“偽物の土”の仕上げは薄っぺらに見えてしまい“本物の土”の仕上げの持つ表情の豊かさや厚みはない。“本物の土”の仕上げが少ないことが残念で仕方ない。

人間は自然が必要不可欠であることを無意識に感じ、都会に自然のものを取り込もうとするのだろう。

建物の密集した都会で建物に自然光を取り入れる工夫をし、街中に水の広場を設け、建物の屋上や壁面を緑化しようと試みる。

だがそれらは仰々しい装置が必要であったり、土から生まれるはずの植物が土と切り離

されたりと本来の自然の姿からはほど遠い。

土は都会に取り入れられる機会も少なく、自然の姿で取り入れられることはほとんどない。

■日本の建築—民家と茶室■

日本の建築は柱と梁の構造から成り、柱と貫に囲まれた部分に壁の骨組みとなる格子状の竹小舞を組み荒壁、中塗り、上塗りの順で各異なる材料を塗り重ね土壁を仕上げる。

民家と茶室、いずれも日本特有の高温多湿気候や地震・台風といった風土に耐えるだけでなく、「長持ちし、かつ美しくみえるように」とあらゆる工夫が施されている。

民家の場合、柱が三寸五分から四寸（10～12cm程度）壁は壁厚およそ三寸五分（10cm）である。

柱や天井のまわしぶちなどの直線の材に囲まれた小さな壁を塗り仕上ることが多いので、ちりのそろった平らで色むらのない壁が美しく見える。

それに対し茶室の場合、建物（茶室）を繊細素朴に見せるために、柱は二寸八分（8.4cm）と細く壁厚は一寸二分（3.6cm）と薄い。

茶室は良い材料を使い手間をかけてつくられる。

目に見えるところだけに良い木を使うのではなく、「貫き」など表面には見えない部材にもキメのそろった柃目の杉を使う。住宅では化粧材に使うような良い木も、土が密着しやすいようにノコ目を入れ使用する。

一言で土壁といっても様々な種類があり、やはり茶室で塗る仕上げは特別だ。

廊下や水屋は大変細かい本聚楽という仕上げを施すが、小間などは荒壁の様に藁が見える粗い仕上げを施し、素朴な感じを出す工夫もする。

「庭が8割、茶室が2割」というお茶の世界で、土壁は完全に脇役だがとても重要である。

職人は自分の技術を最大限に出すものの、「一番いいところで引く」、茶室全体、庭全体の調和を考え仕事をする。

茶室を建てる亭主は、道具（花器・茶器・掛け軸）を茶室をつくる職人に見せる。職人はそれらを引き立たせる良い背景となる壁を塗るのだ。もし“きれいな壁”を塗ってしまふと、亭主の道具が古ボケて見えてしまう。

土を普通に塗ると「きれいな茶色の壁」になる。土を3年程かけて腐らせて、竹を編んだ下地から何回も塗っていくと、最後塗る聚楽の壁は下から出てくるアクによって黒っぽい壁になる。しかし藁の上には土が他より乗らないので土が白っぽくなる。その黒と白のコントラストで「侘び寂び」を演出する。

最終的には濃い色で揃うものの、「チリ廻り」の砂が多い所は幾分色が薄く、「貫き板」の入っているところには土があまりついていないので跡が薄く残り、柔和な表情となる。

また、茶室に使う柱のほとんどは自然の丸柱なので、それらは下が太く上が細い。

しかし床の畳寄せや天井のまわしぶちはきちっと直線に製材された材を使う。

茶室のように、自然な曲線を持つ材と人工的な直線を持つ材に囲われた面を仕上げる際には、壁を上から下まで均一な厚みで平らに塗ってしまうと柱も壁も歪んで見えてしまう。そこで大げさに言うと、三次曲面の壁を塗ることで柱と壁を真っ直ぐに見せ、緊張感を持った空間に仕上げる。

■海外の建築“土”と通じて■

数年前から毎年フランスのグルノーブル大

学建築学校生やその周辺国の左官職人にワークショップで講義と技術指導をしている。また、同フランスのエステュエル・ピエンナーレ「ジャルダン・エトワレ」では日仏学生と公園をつくり、土で遊具や茶室をつくった。モロッコのフェズにある国立建築大学にも指導に出向いた。

海外に出向き「土」の活動が出来ることは、とても幸せなことだ。日々の生活では忘れかけていた当たり前のことに気づき、日常では思いつかない新しい発見の連続だ。

こちらから出向きさえすれば、その土に触れることが出来る。知ることが出来る。

どこでも入手しやすい材であるが、それぞれ地質や風土の違いによりその性質は多様だ。多くの経験や技術によりそれら地の土を使いこなすことができる。

初めて訪れた地で、その土を扱えた時は何より楽しくてたまらない。

アフリカのマリのモスク、ドゴン族の村、中国の客家の里、モロッコのメディナ、スペイン・アンダルシア地方の白い村に世界中のどこにいても土の建物に出会うことが出来る。

建築は風景の一部に過ぎないが、建物が風景を創っている。

その土地土地の人々が、地の材を用いて日常のなかで自然な形で作ったものもある。それらを見て改めて感じるのは、その土地の風土・文化・伝統・歴史、それらが、家というひとつの建築の形となって表れているということだ。

■最後に■

近年、人工的・工業的建材が増え続ける中で、建築の材に土が見直されていることは我々土を扱う人間にとってはとても喜ばしいことではあるが、やはり都会に使われるのは“偽物の土”がほとんどだ。

各々の土地やその風土のなかで、もちろん我々が日々生活している都会の道でも、自然な、その場所の地質が見えるような、有機的な土の建築と向き合える時が一時も早く来てくれることを切望してやまない。

そして、土が生かされた建築たちが街の風景をつくっていけば、人々の心が豊かなものとなり、「世界に誇れる場所・街」ができるのではないかと思う。

(くすみ なおき)



カッパドキアの民家



ハランの学校



ハランの民家



カッパドキアの気球から見た風景

新たな土の可能性

建築家

アトリエ・天工人代表取締役

山下保博

1960年生、鹿児島県奄美市生まれ。芝浦工業大学大学院修士課程修了。いくつかの設計事務所を経て、1991年に独立。

2004年、国際建築家新人賞 ar+d award「最優秀賞」、釜山エコセンター国際設計競技「1等」の受賞をきっかけに、海外にも活動の幅を広げている。

芝浦工業大学、東京大学大学院、東京理科大学で非常勤講師を歴任。

現在は、慶應義塾大学大学院 非常勤講師。

NPO法人 N・C・S 理事長

■なぜ「土」なのか

世界の建築物の中で、構造体として一番使用されている素材は土である。しかし、20～21世紀においてはコンクリート・鉄が多く使用されている。それは地域性のない無秩序な広がりを生み出し、その地域の個性を消すことになった。その上、鋼材の価格変動により投機的な材料として見られることで、建築の質が歪められている。日本では、何千年も前から森林に恵まれ、木の文化が高度に発達してきた。しかし、経済性を理由に、自国の材料を使用するより輸入材の割合が増えてきている現状にある。

それと同時に、21世紀は「環境の世紀」であることから、環境に配慮した材料や構造を考えなければならない。上記の二つを解決するためには、「経済に左右されない素材であること」、「環境型の素材であること」が重要である。そこで、「土」である。完全なリサイクル素材としての土、CO₂排出ゼロの土は、今世紀の素材だと言える。しかし、土建築の弱点は構造強度の弱さにある。今でも世界中の様々な場所で、地震等による倒壊の報告が

上がっている。決して強い材料とは思えない。

そこで、耐震性のレベルが高い日本において、土構造が完成するならば、その技術及びノウハウは世界に発信できるはずである。「経済の輸出」ではなく「知の輸出」を目指したいと思い勉強会を立ち上げるに至った。

■土の研究会

2008年の6月より東京大学の松村秀一先生、藤田香織先生、早稲田大学の奥石直幸先生、佐藤淳構造設計事務所、アトリエ・天工人と企業数社により土の研究会を発足し、2ヵ月に一度勉強会を行っていった。そこで、ドイツ・カッセル大学のゲルノート・ミンケ先生の本「BUILDING WITH EARTH」と出会い、東京大学と早稲田大学の先生と学生を中心に翻訳を行い、「土・建築・環境 エコ時代の再発見：西村書店」を出版した。この本を参考にしながら土に混ぜる自然添加物のリサーチに1年以上を費やし、早稲田大学にて土と自然添加物の材料実験を、東京大学にて構造実験を繰り返し、最終的には酸化マグネシウムが有力な候補としてあがった。

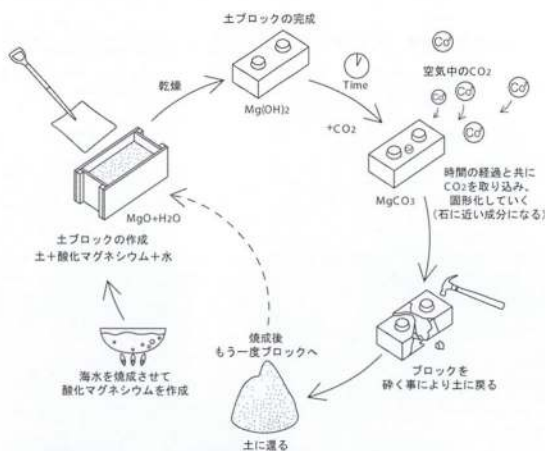


図1



写真1

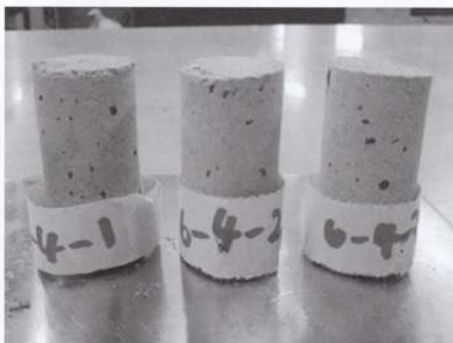


写真2



写真3

■土と酸化マグネシウム

我々の考える土の構造体に必要な粘土質の土は世界中どこにでもある。自然添加物のメインの材料である酸化マグネシウムを入手する方法は二つある。一つ目はマグネサイト鉱物（炭酸マグネシウム・ MgCO_3 ）を焼成して製造する方法。二つ目は海水から抽出する方法で、日本はこのやり方を採用している。

酸化マグネシウムの特性としては水と反応して固形化すること、食品添加物にも使用されているため人間の体に安全であること、また水質改善剤としても効果的である。

一番の特性は、水との反応の後、時間をかけて二酸化炭素を取り込む性質を持ち、炭酸マグネシウム（マグネサイト鉱物）になり自然に帰る。それをまた焼成することにより酸化マグネシウムが取れ、完全なる循環が成立すると考えている。（図1）

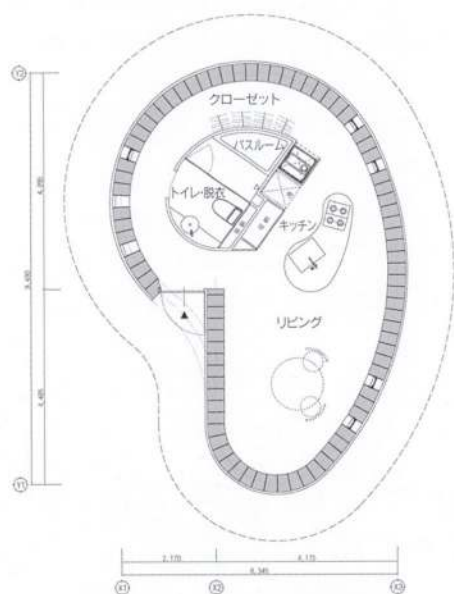


図2

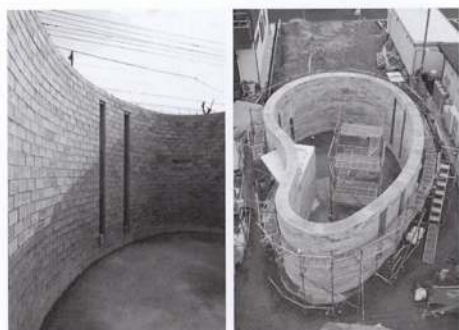


写真6

写真7

■材料実験と構造実験

早稲田大学の興石研究室において、土に混ぜる多種の添加物の実験を行い、最終的には土と酸化マグネシウムの材料単体の実験を行った。（写真1、2）その後、東京大学の松村・藤田研究室と佐藤淳構造設計事務所とアトリエ・天工人で構造実験を行い、構造体になるブロックに必要な圧縮強度 3N/mm^2 を確保できることが検証された。（写真3）

■第1棟目の土プロジェクト

(1) クライアントとコンセプト

2009年の春に、この土の構造体（土ブロック）による日本で最初の住宅を建てたいというクライアントが名乗りを上げた。私は今まで様々な素材を構造的に思考するというプロジェクトを約15年間行っている。その活動に賛同するクライアントが1年間に数名存在することは凄くありがたい。このクライアン

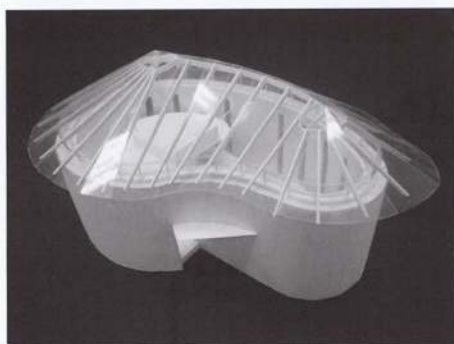


写真4



写真5



写真8

トには実験や土ブロックを制作するワークショップにも参加してもらい、長所・短所の両方共に体感してもらった。

住宅の要望としては凄くシンプルであった。見たこともない建築であって欲しいこと、気持ちのよい空間が欲しいこと、水廻りの機能は充実して欲しいことであった。（写真4）この建築の重要なコンセプトに「密度」を選択している。外壁以外の様々な素材を選択する際にはこの土ブロックの持つ重量感に負けないものであって欲しいからである。

(2) 平面に関して

平面の形は勾玉（まがたま）の形をモチーフにしている。なぜならば、日本の精神的な八百万の神の自然崇拝を如実に表現しているからである。それは日本独自の曲線と言って良いと思う。（図2）延べ床面積は約41㎡と凄く小さい。

(3) 構造と断面に関して

土ブロックは型枠に土、砂、水、骨材、酸化マグネシウムを混ぜたものを突き固め、約3週間自然乾燥させている。大きさは250×400×100を基本としている。目地はブロックと同じ材料で配合割合を多少変えている。（写真5、6、7）この建築物の構造は純粋な土による組積造であり、コンクリート、モルタル及び鉄筋は一切使用していない。臥梁のみが鉄骨である。（写真8）屋根にはトップライトが2箇所あり、1つには企業と開発した新しい自然換気扇が付く予定である。

■完成した後に

2011年の7月初旬には、この小さな住宅は完成する予定である。この完成の後に残るものは膨大な情報と経験である。これらを活かし、次の土ブロックのプロジェクトを探したいと思っている。そこでは、このブロックの機械化を試みたい。そのためには、ある程度の規模の建てものが必要となる。例えば、「教会」「図書館」「美術館」の機能が適している。密度感、調湿効果、断熱効果、防音効果、その他に様々な効用がある。是非、次なるプロジェクトの出現を待ちたい。

（やました やすひろ）

思い出の アイト・ベン・ハッドゥ (Ksar Ait-Ben-Haddou)

建築家
早稲田大学名誉教授
鈴木 恂

1935年北海道生まれ。1962年早稲田大学大学院修士課程修了。吉阪隆正研究室を経て、1964年鈴木恂建築研究所を主宰、後にAMS architectsに改称。1980年早稲田大学教授。早稲田大学芸術学校長を歴任、2006年同大名誉教授。

主な作品に 多くの住宅、GAギャラリー、スタジオエビス、雲洞庵仏舎利塔、早大キャンパス55号館など。

主な著書「メキシコ・スケッチ」「建築家の住居論」「風景の狩人」「回KAIRO廊」「天TENT MAKU幕」など。

■土の集落へ想像逞しく近づくととき■

地球のどんな場所でもそうだが、とくに小さな集落に近づいていく道中には似たような楽しい眺めがまっているものである。

街道の先にちらりと集落全体が捉えられる。歩を進めるごとに集落の姿がはっきりし、あくまでも全体のなかに部分が判別されてくる。つまり、全体の姿を見ながら、部分のいろいろな徴と出会うことになる。そこでいくつかのシンボルを読み解きながら、勝手に集落の骨組みやら構成やらを想像するのである。それはこれから訪れる対象を、自由に想い描ける貴重な時間であり、二度と繰り返すことのない邂逅の時なのである。

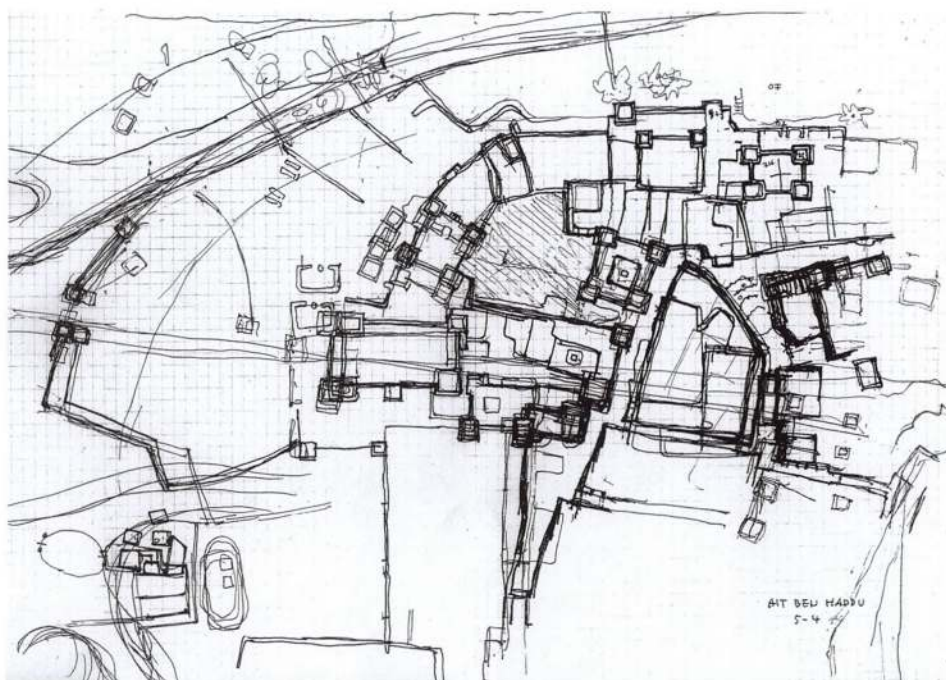
私にとってアイト・ベン・ハッドゥとの出会いはどのようなものであったかを、いま思い起こしている。第一に、土の印象。それは他の集落に比べて、そこへのアプローチの重層された場面展開によって強められた印象だが、集落への近づきの時間として、一連のイメージを引き出してくれる。

話は一般的な旅人の、それも少し遠方からの道程の話になるが、この集落を訪ねる多くの訪問者は、大袈裟に言えば、かならず地中海側からやってくるということがひとつあるだろう。その多くはヨーロッパから南下してくる外来者と想定してみよう。彼らはカサブ

ランカやマラケッシュという大都会の滞在を経て、アフリカ大陸の北側に連なる壁のような山脈アトラスを超えてやってくるのである。地中海文明圏から離脱したある種の開放感、ベルベル人の素朴で強靱な生活情景への興味、そしていよいよ砂漠が始まるという予感と期待など、すでに旅人の感覚は十分に開いて、土の世界を待望している。

低い峠を選んで来たにしても、万年雪の残る山脈を過ぎ、いっきにサハラ砂漠へ向かって下る。雪解け水の幾条もの流れに沿った街道をつたって、と直ぐに、砂礫に吸い込まれるように流れの筋は視界から消え、変わって一面に乾いた土の匂いが広がる砂の道へ、それから点々と椰子の茂るオアシスに出会うのである。すでにこのあたりは、山と砂漠の間のガデスの谷と呼ばれる地域に入るが、カスバやクサルが続くいわゆる俗称カスバ街道の入口に当たる。その谷の始まりにアイト・ベン・ハッドゥが姿を見せるのである。

この道中で旅人は、この集落は地理的に大切な位置を占め、交易の要所にあり、城や砦としても機能したであろうことを推察し、初めて現れるオアシスという風景のなかにそれを捉え直すことになる。砂漠の海のとは口にある土の集落の全体像に感覚の焦点を絞っていく。土であることの自然が徐々に理解されるのはこの過程であり、土の世界の始まりを



スケッチ：土の家々の間を歩きながら、巻き尺ではなく、歩測で実測してみようと試みていたときのスケッチの一枚。

示す土の家々の誇り高い造形を確認するのもこの時だ。そこには、木や石の集落のそれとは違う、背景ごとの場面転換という劇的な近づきのプロセスの時間が輝いている。それは砂漠と土の集落の連続性と集落の膨らみが内包するものとの対峙を、徐々に際立たせる時間でもあるだろう。

■土の家へ手足をつかって躊躇入るとき■

土の集落の外形の特徴は地面と家が同じ材料であることである。砂漠を背景にすると、おおよそ見えるものすべてが同じ材料でできていることに感動するだろう。路と家並、壁と入口が一繋がりになり、集落の凹凸は分節を表すのではなく接合を強調するように見えて美しい。土壁が家々の表裏の大部分を占め、内側のすべてを包み込むような丸まった形をもって、路や入口などもそこに埋め込まれてしまっている。地続きというより、家々が地面から生えているようにも見える。このような外観的な特徴が、近づくものへ内的なものの実在への想像をいっそうかきたてる。これから躊躇入ろうとする内部への期待である。この土の塊の中に一体どのような具体的な生活があるのだろうか、目の前に少しずつ集落の内部が開かれていく。

集落の内部は、旅人にとって予想を裏切る仕組みの中に現れることになるだろう。泥で塗り込められた迷路だけがラビリンスではなく、その奥が深いのだ。カスパヤクサルールの内部はおおよそ、簡単に人を招きいれたりはしない造りになっている。迷路性はもちろん、闇、狭さ、迫る壁、曲がりくねる路や上下の揺れ、突き当たりなど、幾つもの障害を設けて、訪問者を拒否している。その仕組みの総

体が家であり、家の形なのであって、それでは部位別に認識することも難しいほどの密度で詰まっている。

ここで、旅人にとっての驚きは、見た目にあざやかな集落の土の一体感が、内部に侵入したとたんに、触覚をもってしなければ経験することができないものへと変わることだろう。まず足触り、ついで手触りで、肌触り、それをもって糸のような細い空き間に身体ごとねじ込まねばならない。しかし意外に、家の床も壁も天井もすべては土の肌触りによって分かり易く、それこそ触れることで連続していく空間として想像できるのだ。しばらく闇の間隙を彷徨う旅人は、それこそ家がという深奥の平安な核を造りだすための、土でなければならぬ柔らかな構造であり、土の初源的技術の集積によって造形された空間であることに気付くのである。

■土の塔へ暗闇を通して登ったとき■

迷路の先に家があり、部屋の先に屋上があるという構成は、カスパヤクサルに一般的な立体的構成であるが、ここアイト・ベン・ハッドウの屋上にひねり出すように突き出た塔は、形式的にも装飾的にも土の造形群の掉尾を飾るにふさわしい構造物である。闇が蓄えられた家の密実が、ここで天空へと放射される。塔に施された飾りの窓をのぞいて、家の窓のすべてが屋上に集められたように上空に開いている。上に伸びる四隅の塔はしっかりと闇の空間の積層を象徴し、砂漠に住む人々の意志をその垂直の表象に映している。

塔の飾りは彫りの深いものもあり薄く輪郭を消しつつあるものもある。時とともに凹凸は薄れ、また塗り込められ、それを繰り返して

ているのであろう。この集落でも、溶けて砂漠の砂に戻ってしまった塔の数は少なくないはずだ。土の集落の外貌は、たしかに風が壁を削っていくプロセスを表現している。そのために集落の家々の壁は厚く積まれ、その上に厚く土が塗り込められているのである。木造の比ではなく柔らかく脆いものだ。もちろんそれは、積み続け塗り続けなければ、集落自体が持続できないことを意味している。誰がその作業を継続するかなのだ。

銃眼を備え、砦の構えを際立たせていた土の塔が、いまは家によって支えられた威厳をまとって穏やかに立っている。帰路、振り返ると同じ土の塔が立ち去っていく訪問者を見送る高樓のようにも見えた。

探検気分、写真家の二川幸夫さんとこの村を初めて訪ねたのは、もう半世紀に近い古いことになろうか。そのときの感動をこうしていまも覚えているのは不思議と言え不思議なことだ。まだ100世帯ほどの住人がいて、走り回り、迷路の案内役を競っていた子供達のこと。暗い廊下を幾重にも折れ曲がり、ある家に招かれ、3本の梯子を螺旋のように巡って、塔の突き出た中庭から、またその上の屋上へ登り、オアシスの風に吹かれて、土臭い羊の煮込みを御馳走になったことも。

(すずき まこと)

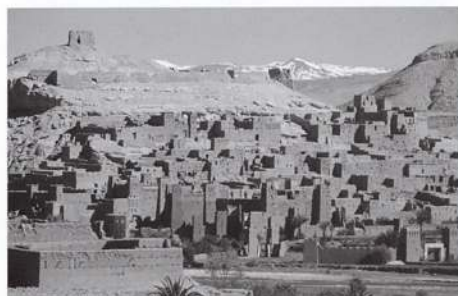


写真1：旅人の多くはこの方向から川を渡って集落に近づくのである。1987年に世界遺産に登録されてからは、宣伝写真の定位置となっているようだ。



写真2：地面近くで厚さ1mにもなる土壁は、あるものは今も立派に四周の塔を支え、あるものは風化して溶けて土に戻っていく。



写真3：斜面の中腹にある家の塔からみると集落の基本単位である四角い家が何軒か見える。走り回る子供達。黙々と屋上で土を練る男達もいた。

客家土楼民居と 生土建築の魅力

建築家
東京芸術大学名誉教授
片山和俊

1941年東京都生まれ 1966年東京芸術大学美術学部卒業、'68年に同大学院修了 1989年東京芸術大学美術学部建築科助教授 2000年東京芸術大学美術学部建築科教授。国内外の町並みおよび集落調査に携わり、住宅を中心とした設計活動と各地の町並みや景観計画に関わる。2009年同大学を定年退任、現在同大学建築科名誉教授。
主な著書として「客家民居の世界—孫文、小平のルーツここにあり」（風土社/2008年）、「家の顔（くうねるところにすむところ 子どもたちに伝えたい家の本）」（インデックスコミュニケーションズ/2006年）、「まちみちすまい—雑誌の中の片山和俊」（東京芸術大学建築展図録/2008）等。

■客家民居との出会い■

果たして進歩なのだろうか。

設計活動で新しい材料や工法、複雑な法規や制度に囲まれ、ネットで探しカタログや見本の山を前にして、何かを作り出すよりも間違いないかを確認する消耗の日々。思わぬ情報や技術に出会うこともあるが、煩雑な作業に人間が住むところはもっとシンプルでよいのではないかと思うことが多い。そして旅する度に、昔ながらの民家や町家の佇まいに、現代の我々が作り出した建築と環境との調和が遠く及ばないことを思い知らされる。

そういう思いを強く受けた建築のひとつに客家民居、生土建築がある。既に25年ほど前のことだ。中国福建省の山奥ではじめて土楼民居に出会った時の衝撃は忘れられない。今は沿岸の厦門からタクシーで気軽に行けるが、当時は曲がりくねった狭い山道を登り降りし、揺られ揺られて行くようなところがあった。それだけにある峠を越えて、眼下の山間に円形土楼が現れた時は、まさに遭遇。地上に舞い降りたUFOを見るようであった。バスに乗っていた我々は、愚かれたように一目散に走り出した。（写真1）

それが長年夢見てきた土楼民居との出会い。生土の厚い壁に囲まれ、大きい素っ気ない外観。その壁に穿たれた狭い大門を入ると、民居の内側には円形に切り取られた青空の下に、木造の軒深い空間が巡り、そこには人間、豚や犬、鶏などの家畜が同居し、営みの垣塙を見るようであった。外観に驚き内観に魅せられて、無我夢中で撮り測りまくった。（写真2）

■生土を学ぶ■

そして同行の福建省袁肇義先生（故人）か



写真1

ら受けた生土建築の講義も忘れられない。“生土”という言葉自体はじめて聞いたし、生土建築学会があるらしいことも知った。“だから中国の建築の築という文字に木がないのか”と、中国の建築が分かったような気がしたのを憶えている。

生土建築には種類がたくさんある。それぞれの風土、地理気候、社会的状況、生産技術、生活様式に関連すること。土は加工せず型枠を用いて作ることで、土を掘る建築は入らず、地面以上の建築を言うことも知った。そして福建省には、夯築造、推築造、土坯壁があり、夯築壁に①瓦礫土。古い家を壊した材料を再利用する方法で、これで作った生土壁は粘着力があってよく、100~200年もつこと②紅壤土。省北に多く、川砂利を入れて用いること③三合土。省東に多く、土に石灰と砂を入れて三合土ができ、そのことを“金包銀”ということ。壁の内側は土で、外側は三合土で作ること④黄土。省南西に多く、客家土楼を作る材料であること。—そして、②③④の質を高めるためには、生土は長時間置き風化させた方がよく、特に客家民居のような高い壁を作る場合には、更に時間を置く必要があること。

土坯（土ブロック）は、型枠に土を入れて作るが（100×300×5~6cm程度）、藁や石灰を混ぜ、モルタルを混ぜる“モルタル粘土成形”もあること。また稲を取り入れた後の土を使い、ブロックにして風化させて使う稲田坯という方法もあること。また夯築の夯は“たたく”という意味と教えてもらった。

生土と共に使われる木材はもともと杉だが、近年少なくなり松のような堅い木を使うようになってきているという。けれども松はヤニがあって、金属と組み合わせて使う場合に要注意という。



写真2



写真3

（写真：木寺安彦）

最後に袁先生から生土建築、特に客家土楼民居の問題点の指摘があり①通風・日照が悪いこと②経済的ではないこと③1戸の面積が少ないこと④遮音など生活上の不便さ一などに加えて、近年家族形態が小家族に変わっていることを考え合わせると、土楼は問題だらけと指摘された。日中興奮して実測している民居に対して、問題だらけなのに何故興味をもつのか、と夜の講義で先生に問われ困惑したことを思い出す。

■生土壁の構成と魅力■

ところで最近東北大震災の被災地を訪れる機会があった。仙台や石巻の津波の爪痕は言葉に表せない凄さだが、内陸部古川の地震で壊れた和蔵を見て、日本には力を受ける厚い壁がないことを改めて実感した。小舞竹を組んだ蔵壁が、小舞竹を境に外側半分が落ちていた。積まれた壁ではなく、木の構造を頼りに厚く塗られた壁であった。

それに較べると客家土楼民居の壁は厚い。3～5階建ての下部で1mを越え、夯築によって積まれた壁である。(写真3) 移動式の型枠を用い、ブロック単位に(約40cm×120cm) 細い竹片や管竹をはさみ補強しながら土を打ち、ずらしながら繰り返して一層ずつ積んでいく。方形土楼のような角部には、竹を交差状に入れ補強する。開口部は両側に木かレンガで壁を作り、上部に直径12cmの杉丸太のマグさを渡し開けるが、窓のような小さい開口部は、後から穿つ方が生土壁の耐力が出てよいという。通常1階には設けず、2階で幅10cm程度、3階で20cm、4～5階で50cm程度である。(図1、2) 土壁の基礎は、硬土に達するまで掘下げ、石塊を入れ小さな石で間を詰め固め、地面から高さ1m位までは玉石積みとして雨水のはね返りから壁を守る。一定の距離を置いて防火と構造的補強を兼ねた主壁を、階段や大門廻りを利用して外周壁と直角方向に設ける。そして雨が多く台風来襲もある地域から、瓦屋根の軒先を十分に出して生土壁を守る。一方、住戸間の隔壁には、20cm角位の土ブロックを積む。生土がまさに生きた素材として様々に使われ、分かってみると納得のいく施工方法であった。

■客家土楼民居の構成と意味■

客家土楼民居は、生土壁だけの建築ではない。内側の生活空間は丸太による木造軸組構造に依っている。その架構単位が各住戸を構成し、各家族が横ではなく、1～4、5階に亘って縦に住む。各住戸には共用階段から各階の内側の外廊下、走馬楼でつながれる。建築の学生の作品にありそうなコンセプトだが、いくら同族の住居とはいえ考えつかない構成である。(図3)

そして土楼のある場所は、福建省南西部ばかりではない。江西省南部、広東省東北部から東南部の深圳や香港にまで広く分布している。場所によって形式が違い、およそ福建省の土楼、江西省の土圉、広東省の围龍屋型、围屋、碉楼などの類型がある。(図4) 壁の素材も場所によって異なる。良質の土が取れる福建省では生土だが、外敵の多い江西省では、外壁に精度の高い石積みが見られる。そして木造の日本から円形が特異な形態に見えるが、福建省南西の山間部では円形の方が地形に馴染みやすい。

つまるところ客家土楼民居は、環境の申し子のような建築であり、合目・合理的な建築である。長年培われた適材適所の構成で質実で無駄がない。そして想像を逞しくすれば、中国の城壁都市群も万里の長城も同じ構法の延長と言える。日本の建築が、木の建築で地面から離れる空間とすると、中国のそれは、

地面を掘り、あるいは積み上げる地面と一体な空間であるようだ。少し具体的に言えば、地面と一体な構築物、城壁や壁が人間の住める安全な領域を確実にし、その中に木造軸組の架構単位が人間の暮らしのスケールを刻む、という構成。その様態は、比喩的に言えば中華料理に似ている。北京、広東、四川というように材料の種類や作り方に地域的な特色はあるものの、どこに行っても中華料理であるように、どこに行っても中国民居という基本的資質は変わらない。

■終わりに■

現代建築は技術的な発展によって、否応なく地域らしさを失っていく方向に向かっている。今更昔に戻ることはないだろう。けれども出来あがった環境がどうか問われると答えに困る場合も多い。袁先生に問われるまでもなく、客家土楼民居は、現代の家族形態、居住性や技術から乖離し問題点も多い。けれども民居も群も堂々として風格があり、周囲の自然環境に見事に調和している。生土の特徴、その良い点を伸ばし弱点を補いながら生まれてきた形と空間に、地域らしさがある。性能が上がりどんな環境にも対応できる強い現代建築の素材や構造、だからと言って気候風土や周囲の環境を横着に扱ってよい筈はない。生土建築から、周囲の環境との応答、地域らしさの再考を示唆しこの稿を終わりたい。

(かたやま かずとし)

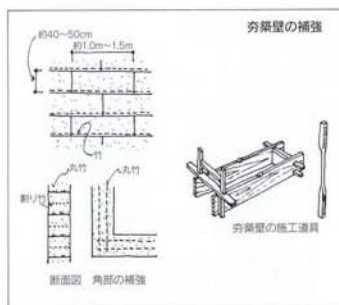


図1 夯築壁の施工道具と補強

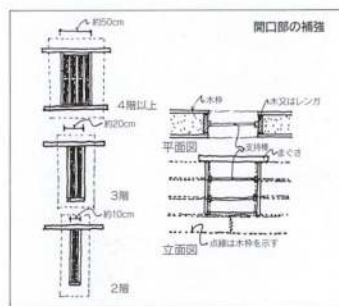


図2 夯築壁と開口部

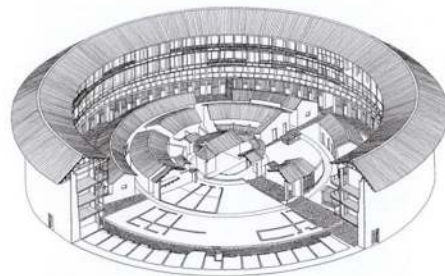


図3 客屋土楼民居—生土壁と木造の構成

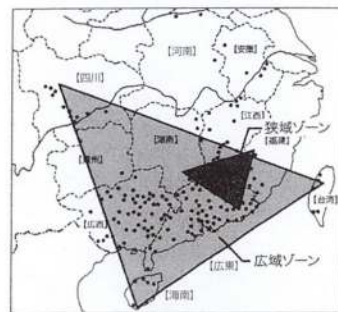


図4 客屋民居の分布

編集後記

建築計画系委員

「建築と土」というテーマに沿って大学教授から左官・瓦職人に至るまで、バラエティに富む、奥行感のある特集になったと思う。「土」という素材はそれぞれの地域固有のものではあるが、どの文章においても「人間という生命の拠り所」といった、何か根源的な価値観を「土」に見出しているという印象を受けた。現代建築のクールさとは真逆の素材である「土」の価値観を再認識することで、新たな建築活動の展望がひろがったような気がする。

(静 茂夫)

カワラマン山田脩二様から厳しいお言葉を頂いた今回の特集だが、言い訳ができぬほどに「土」と真剣に向かい合う機会が少ない方も多いのでは？(私もその一人として反省)。土を様々な角度で切りこんだ各論を読んで頂くことで、身近にあって、でも建築そのものからは遠く感じていた土の世界について、新しい発見と興味を抱いて頂き、土について考え直す機会を得られたなら、今回の特集は十分に意義深いものになると感じている。

(奥村朋孝)

もうすぐ「土用の丑」ですが、「土用」というのは年に四回あることをご存知でしょうか。陰陽五行説では世の中の全ての事象を「木」「火」「土」「金」「水」に分類して考えますが、これを四季に割り当てますと、春は「木」、夏は「火」、秋は「金」、冬は「水」となります。では「土」は？そう、春夏秋冬それぞれの季節の境が「土」すなわち「土用」なのです。人々の生活に1年を通じて深く関わっている「土」。建築においても「土」が時代や地域を超えて人々に深く関わっている素材であることを読み取っていただけたかと思います。(野田隆史)

「土」というと、どうしてもヴァナキュラーなイメージが付きまとう。工業製品を用いて開放的な空間を志向しがちな現代建築と、近しいとは言い難いだろう。それを見直すことが今回の企画の趣旨と解釈しているが、山田氏論考にもあったように、本モノの材料を知らない、深く自省すべきだと受け止めた。木目調のプリントシート等多用される昨今、「材料の冒涇だ」と言われたい設計を心がけたいと、改めて思った。

(米山剛史)

「土」がかたちを変えたレンガや瓦、タイルをまとった建築は目にするが、「土」そのものをまとった建築はほとんど目にすることがない。今回改めて「土」そのものが立ち上る建築をいくつか拝見して、建築本来が持つ力強さや生き物の様な生命力を感じた。特に「ジェンネの泥のモスク」が印象的であった。また、これからの環境の時代にふさわしい環境共生やリサイクル素材としての「土」の可能性を感じることができた。

(楠 敦士)

「土」って何ですか？…ときかれた時に思い浮かべるものは、きっと皆違う。赤い土を思い浮かべる人もいれば、黒い土を想像する人もいるだろうし、園芸用の土だったり粘土だったり、かなり幅広いはずだ。共通して言えるのは、土はその生まれた場所を最も象徴するものだということ。「土」は、建築が母なる大地に根ざしていることを思い出させてくれる最も象徴的な素材だということを、この特集を通して感じてもらえるのではないかなと思う。

(所 千夏)

土地のないところには建築はつくれない。建築を作る場所には必ず土があると言い換えても良い。街の風景の基調色は土の色であることが多い。パーントシエナという色の絵具があるが、シエナの土を焼いた色で、トスカーナ地方を旅すると建物の赤みがかった茶色がこの土の色であることに気づく。かつて、京町家の瓦のいぶし銀も焼いた土の色だった。土の色のパリエーションが多様であることと、土地に根ざした建築が各地各様であることは関係が深いかも知れない。(下坂浩和)

「五條新町」重伝建地区と 建基法緩和条例

上田井 朗

五條市教育委員会 文化財課町並保存整備室室長

重伝建地区(重要伝統的建造物群保存地区)は、文化財保護法に定める伝統的建造物群保存地区を、市が都市計画法に基づいて地域地区として決めたもののうち、伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの等を、国が選定したものをいう。

保存地区の概要

奈良県の五條市五條新町伝統的建造物群保存地区は、奈良県南西部にある五條市の中心市街地に位置し、北に金剛葛城、南に紀伊の連峰、東は大峰、大台ヶ原の秀峰に囲まれ、区域に隣接した南側に吉野川の清流が貫流する。五條新町は江戸時代には伊勢街道の宿場



▲五條新町の町並み

▼重要文化財栗山家住宅



町として賑わいをみせ、現在でも、国の重要文化財で慶長12年(1607)の棟札を確認できる日本最古の町家「栗山家住宅」をはじめ、江戸時代の商家町の面影を色濃く残す伝統的な町並みが続いている。

五條新町の歴史と魅力

五條新町は、中世に起源を持つ「五條村」と、慶長13年(1608)に二見城主松倉重政が二見村の一部に振興策として建設した城下町の「新町」から成る。生活様式などの変化に伴いファサードが改築されたものがあるものの、大部分は古い様式を残し、現在もお伝統的な姿を保っている。木造瓦葺きに厚く漆喰で塗り込めた軒裏や二階壁面、虫籠窓に格子構えなど重厚な構えを持ち、これらが軒を連ねた町並みは、多くの人々を訪れさせる大きな魅力を持っている。

町並み保存の歩み

平成18年3月、五條新町の古い町並みにおける学術的価値の高さが奈良文化財研究所の町並調査により報告された。住民は、町並調査報告の結果を重く受け止め、住民70名による「五條市新町地区町なみ保存会」が発足。伝統的な町並みを守ることで、自分たちの町を「生きた町」として後世に残すことを目指した。市は住民の意向に答える形で、五條新町への伝統的建造物群保存地区制度の導入を決定し、市教育委員会事務局に文化財課を新設した。ここから本格的な伝建制度導入への行政と住民の対話が始まった。保存会と市は毎月の定例幹事会や住民向けの説明会を開催することで、住民間の伝建制度への理解を深めていった。市は平成21年1月に保存条例を制定し、同年4月には保存計画策定のための伝建審議会を設置した。

伝統的建造物群保存地区の決定に至るに

町並み保存の歩み

1975年	第一次町並調査
2004年	第二次町並調査
2008年3月	五條市新町地区町なみ保存会 発足
4月	市に文化財課を新設
2009年1月	保存条例制定
4月	伝建審議会を新設
2010年4月	建基法緩和条例検討委員会を 新設
6月	伝統的建造物群保存地区の都市 計画決定・保存計画の告示
8月	重伝建選定を国に申出
12月	重要伝統的建造物群保存地区に 選定
2011年3月	建基法緩和条例制定

は、住民たちのさまざまな想いが交錯し、その道程は安易なものではなかった。保存会と市の地道な取り組みが実を結び、平成22年6月には大和都市計画伝統的建造物群保存地区の決定と保存計画の告示が行われ、伝統的建造物群保存地区制度をスタートさせることができた。平成22年8月には市は文部科学大臣に重伝建地区選定の申出を行い、同年12月、全国で88番目の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

建築基準法の制限の緩和に関する 条例の制定

伝統的建造物群保存地区内の伝統的建造物は、保存計画に定める修理基準に基づいて現状維持または復元修理を行う。伝統的建物が、建築基準法上の既存不適格建築物である場合には保存が困難となるため、建築基準法第85条の3によって制限の緩和を行うことが必要となる。また、伝統的建造物以外の建築物等については、修景基準に基づき修景整備を行い、壁面線の位置や町並みの調和を図ることで1階の底の位置や建築物の高さなどが制限される。これらが、法上の不適格となる場合には修景基準より町並み景観の保存が出来なくなるため、法第85条の3によって制限の緩和を行うことが必要となる。制限の緩和には、市が有識者による検討委員会を設置し、検討結果を踏まえた建築基準法の制限の緩和に関する条例案を国土交通大臣に提出し、承認を受けて条例を制定する。

平成22年4月、市は伝統的建造物群保存地区制度導入を前提として、委員長に関西学院大学の室崎益輝教授を、副委員長に神戸大学の北後明彦教授を迎え、「五條市五條新町伝統的建造物群保存地区における建築基準法緩和に関する検討委員会」を設置した。検討委員会は保存地区内の既存不適格建築物の実態調査と抽出により、伝統的建造物の保存と制限緩和の基本方針を検討し、条例案の答申を行った。平成23年1月に市は国土交通大臣の承認を得て、平成23年3月18日に同条例は施行された。

総合的な防災対策と町並みの保存

検討委員会が伝統的建造物の保存と制限緩和の基本方針を検討する中で、規制の緩和に対する代替措置として防災体制の強化と都市防災構造の強化、2方向避難の確保、防災計画の策定など総合的な防災対策を提案した。今後は総合的な防災対策のもと、行政と住民が一体となって伝統的な町並みの保存と再生を、さらには町全体の活性化を進めていきたい。

(うえだい あきら)

低騒音・低振動による 耐震補強工法 —3Qシリーズ—

小林正和

大林組大阪本店建築事業部ビルケアセンターリニューアル部
建築第3課

近年、建物を使いながらの耐震改修が求められており、工事に伴う騒音、振動が少ない工法の開発が必要である。このようなニーズに応じ、低騒音・低振動で施工可能な3つの耐震補強工法(3Qシリーズ)を開発した(図1)。

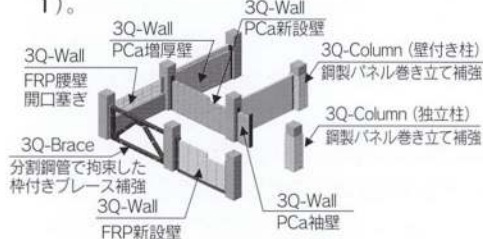


図1 3Qシリーズ概要

- (1) 3Q-Wall工法—各種ブロックを用いた耐震補強工法
- (2) 3Q-Brace工法
- (3) 3Q-Column工法

3Qとは、静か(Quiet)に、早く(Quick)施工可能で、高品質な(High-Quality)補強工法の総称で、3工法とも財団法人建築総合試験所の建築技術性能証明を取得している。

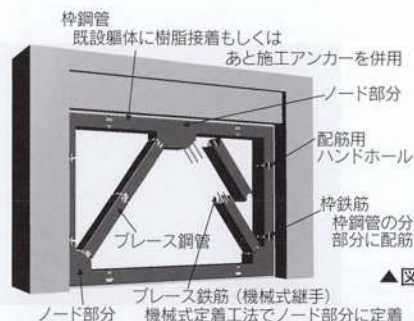
なお、3Q-Wall工法の詳細は、「建築と社会」2004年5月号に掲載しているので、ここでは割愛する。

3Q-Brace工法

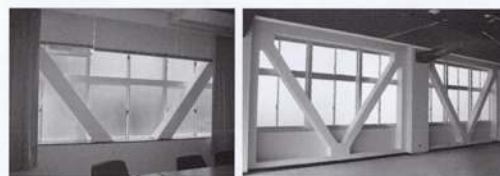
3Q-Brace工法は、材軸方向に分割した棒鋼管とノード部(ブレースとフレームとの交点)を既存躯体にエポキシ樹脂系接着剤で接着、棒及びブレース鋼管内部に鉄筋を配筋した後、鋼管内部に無収縮モルタル(圧縮強度40N/mm)を充填し、棒材とブレース材、鉄筋を一体化したRCブレース工法(図2)である。

●特長

- ①在来工法で必要となるアンカー打設が極少数で、施工時の騒音や振動が軽減できる。
- ②分割鋼管のクリアランスによって現場での納まりの調整(施工管理)が容易にできる。
- ③溶接を使用しないため、火災の心配がない。
- ④地組スペース、建て起こし、揚重機が不要。



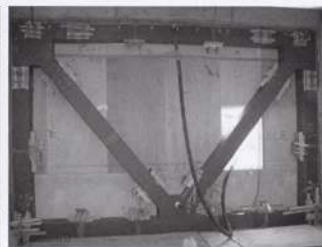
▲図2 3Q-Brace工法の概要と適用例



▼図3 施工手順



(a) 棒鋼管、ブレース鋼管の取り付け



(b) 型枠・グラウト充填



(c) 型枠脱型・仕上げ

- ⑤鋼管表面にボルト等の突起がないため、鋼管に塗装するだけで仕上げるができる。

●施工手順(図3)

- ①準備作業(既存躯体の仕上げ撤去、墨出し)
- ②鋼管の接着・取り付け、配筋
- ③型枠取り付け、グラウト充填
- ④脱型、仕上げ

3Q-Column工法

3Q-Column工法は、図4に示すように小型の鋼製パネル(補強パネルおよび接続パネル)を人力により組み立て、鋼製パネルと既存柱との間に高強度の無収縮モルタル(圧縮強度40N/mm)を充填する既存柱の補強工法である。

補強パネルと接続パネルは、補強パネルの突起部を接続パネルの開口部に嵌め込み、接合ボルトで一体化する。なお、本工法は独立柱だけでなく、壁付き柱にも適用可能である。

●特長

本工法は、従来の「鋼板巻き立て補強」「連続繊維補強工法」における施工上の課題を解

決、改善した補強工法で、以下の特長がある。

- ①補強部材の小型化により、現場への搬入、組み立てが容易。省スペース施工が可能。
- ②現場溶接が不要なため、溶接のために必要な板厚よりも薄板を用い、鋼材量の低減が可能。火災のリスクを低減可能。現場における品質管理(溶接部の非破壊検査)が削減可能。
- ③施工時に騒音・振動がほとんど発生しない。
- ④接着剤や溶剤による臭気の発生がない。

●施工手順(図5)

- ①準備作業(既存躯体の仕上げ撤去、墨出し)
- ②鋼製パネルの組み立て
- ③モルタル注入
- ④(必要に応じて)仕上げ、完成

なお、3Q-Column工法は、東海旅客鉄道(株)大林組、新日鉄エンジニアリング(株)、ジェイアール東海コンサルタンツ(株)により「既存鉄道コンクリート高架橋等の耐震補強工法」として共同開発した「鋼製パネル組み立て補強工法」を、建築物の柱に適用するため、(株)大林組、新日鉄エンジニアリング(株)が建築技術性能証明を取得したものである。

今後の展開

2011年3月11日に発生した「平成23年東北地方太平洋沖地震」は世界中に地震、津波の恐ろしさを知らしめた。今後、3Qシリーズによる耐震補強によって、人命・財産が守られるよう、3Qシリーズの健全な普及、発展に努めていきたい。(こばやし まさかず)

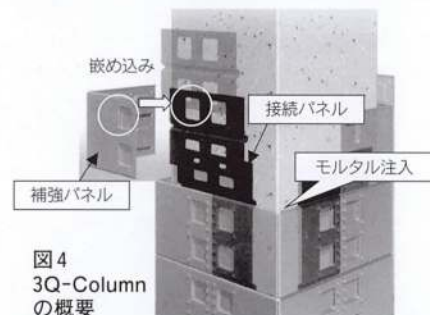


図4 3Q-Columnの概要

▼図5 施工手順



(a) 鋼製パネルの取り付け、組み立て



(b) モルタル注入



(c) 完成

生駒ビルヂング

酒井 一光

再読

関西近代建築

モダンエイジの建築遺産

生駒ビルヂングは、株式取引所（現・大阪証券取引所）や金融機関、百貨店などが集まっていた近代大阪のメインストリート堺筋と、古くから栄えていた平野町通の交差点南西角に、昭和5年（1930）に竣工した。そして、いまでも昔と変わらぬ姿をみせている。

生駒ビルヂングの竣工記事は、本誌13輯11号（昭和5年10月）に「株式会社生駒時計店本店」の名で掲載された。生駒時計店は明治3年（1870）に現在の中央区高麗橋4丁目に創業、後に高麗橋5丁目に移転した。御堂筋拡張に伴い、昭和3年に店舗を立ち退き、新たな本店ビルを建設したのが現在の生駒ビルヂングであった。

同竣工記事は、戦前期の関西建築界の黄金時代を紹介した本誌連載「京阪神新建築集」の記事中で3ページ余りであるが、竣工写真、立面・平面・断面図、工事概要が掲載され、同号の中でも目を引く存在だった。設計を手がけた宗建築事務所の宗兵蔵は、日本建築協会の前身・関西建築協会の時代から副会頭（1921～26年度）、副会長（1927～35年度）も務めた人物であったから、彼の事務所の作品が採り上げられたのもうなずけるが、なにより本建築の作品としての質の高さが読者の目をひく要因となったのだろう。モダニズムの最先端を行くというよりも、アール・デコの“モダン”な雰囲気をも存分に発揮し、当時のクライアントの心を満たしたものであったのだろう。今日でもその評価は変わることなく、大阪の近代建築のシンボルとして不動の

人気を博している。

流行を体現したファサード

生駒ビルヂングは、鉄筋コンクリート造地下1階地上5階塔屋付で、平面形状は堺筋と平野町の交差点に面する部分を正面に向けることから、およそ五角形をしている。五角形の形状は、だいぶプロポーションは異なるものの、生駒時計店の商標である駒の中に「生」の文字をあしらったマークとも共通している。

ところで、交差点に面した建物の正面は、パラペットの中央が一段高くなり、そこから下に向かって5階から3階までテラコッタの装飾列が配されている。鋳銅製の「生」の文字を飾るテラコッタと、その下にほぼ同形の8つのテラコッタが直線状に並ぶ。それぞれの図像の意味ははっきりとしないが、8つのうち最上段が炎のような文様、2・3段目は機械をイメージさせるモチーフに蠟燭や六稜星をあしらったものである。これが3回繰り返され、最下段には盾のような紋章と竣工年「1930」の文字がみえる。文様の機械は、秤やねじなどをイメージさせ、いずれも建物全体を覆うアール・デコの幾何学模様と相性がよい。当時の時計のデザインにもアール・デコが好んで採り入れられていたことから、ビルと商品のテイストの一致も面白い。また、各テラコッタの高さは、窓の高さ（3～5階は窓2段で1階分）とも対応しており、納まりがよい。

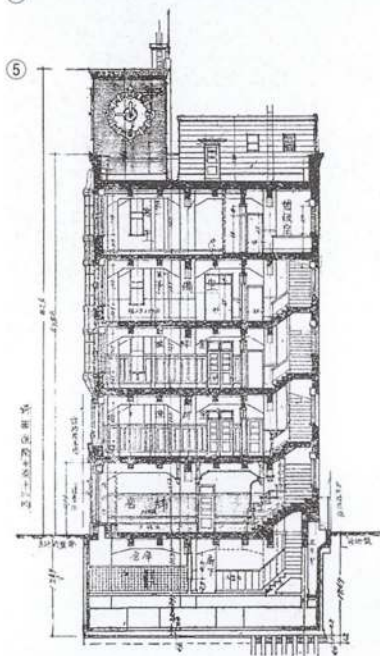
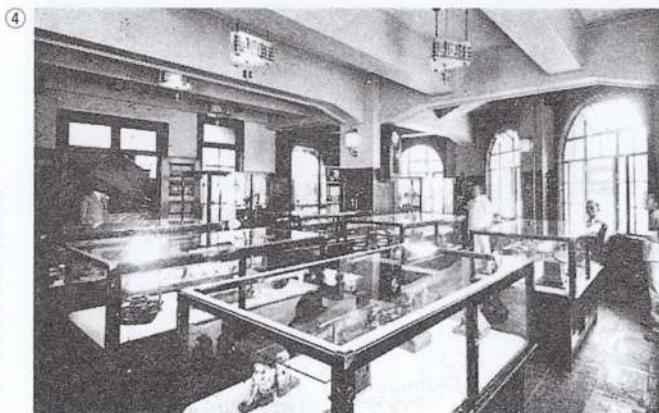
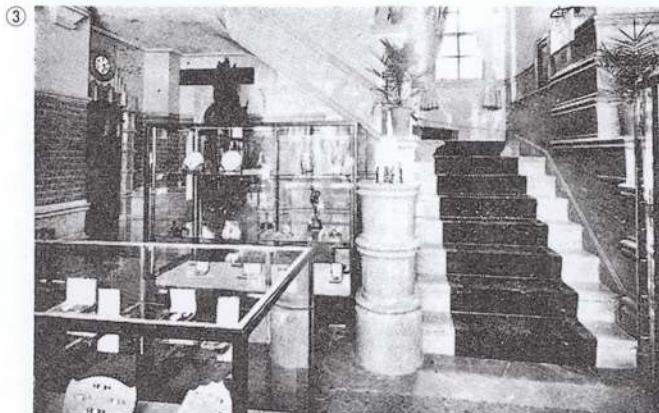


①外観（現在）

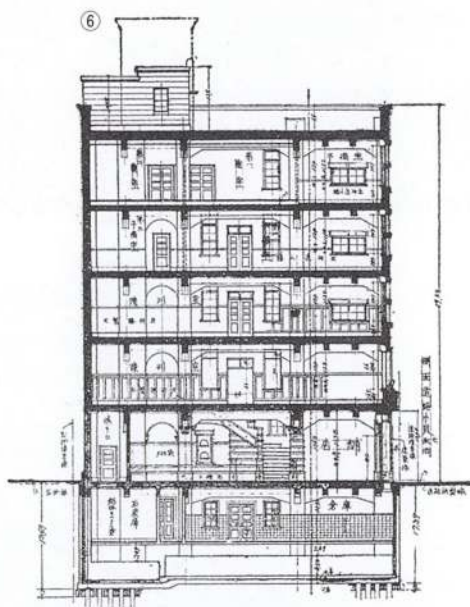
所在地／大阪市中心区平野町2-2-12
設計／宗建築事務所
施工／大林組
竣工／昭和5年
構造／鉄筋コンクリート造
規模／地上5階、地下1階
種別／ビルディング



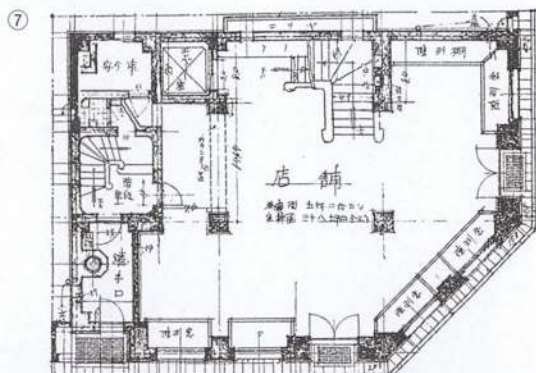
②



⑤

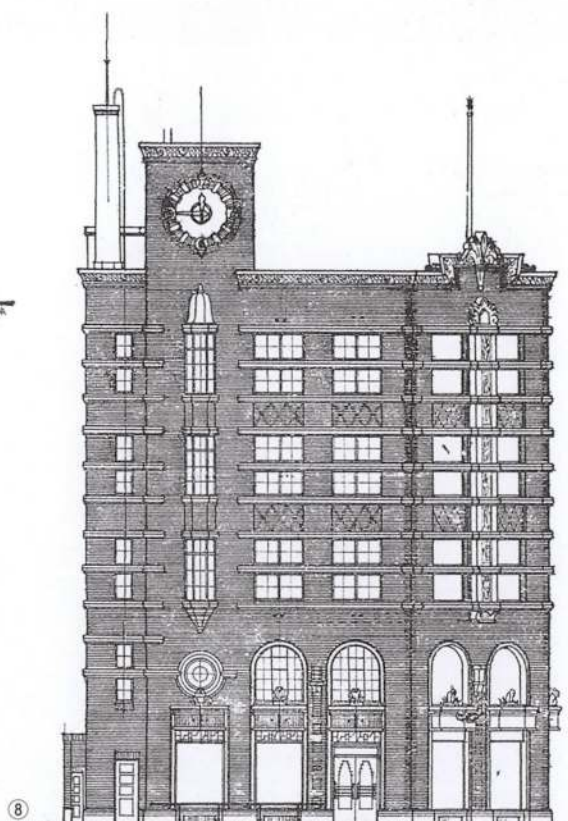


⑥



⑦

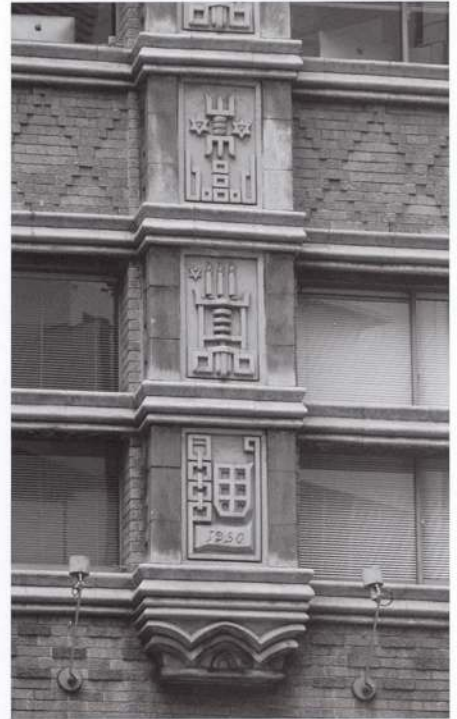
- ② 外観
- ③ 1階陳列室
- ④ 2階陳列室
- ⑤ 横断面図
- ⑥ 縦断面図
- ⑦ 1階平面図
- ⑧ 正面図 (堺筋側立面図)



⑧



⑨ 外観テラコッタ (5階付近)



⑩ 外観テラコッタ (3・4階部分)



⑪ 屋上の時計塔 (左) と階段室、平成14年に新設されたトップライト



⑫ 塀筋側からみたエントランス 左手がレセプション



⑬ 4階から5階へ至る主階段
天窗の新設により大変明るい



⑭ 1階北側の旧エレベータ扉付近



⑮ 施主・生駒権七のイニシャル入り
1階のステインドグラス

ところで、時計塔の役割を果たす塔屋は、ここが時計店であることから目立たせるべき存在だが、建物全体の中で南東部にあり、正面から見ると左手となる。だが、時計塔の存在で建物自体が引き締まった印象となっている。塔屋の下には、3階から5階まで縦長の出窓が伸びる。2階には円窓があり、これらの縦長出窓と円窓で、時計の振子をあらわしているという。図像としての分かりやすさ、親しみやすさも、このビルの人気の一因であろう。

ファサードは一面、当時大流行したスクラッチタイル貼り。しかし、一口にスクラッチタイルといっても、そこにはさまざまなバリエーションがあった。

生駒ビルディングのスクラッチタイルは、表面のスクラッチの幅が広く、あばれた感じが強調されている。また、釉薬が施されているために光沢感がある。ファサード全体を覆った感じとしては、各タイルの持つ光沢感がビル全体を包み込み、さながら施釉陶器のような味わいを醸し出している。

このほか、大阪市内の現存する近代建築では、大林組旧本店、旧第四師団司令部庁舎、天満屋ビル、商船三井築港ビルなどがスクラッチタイル貼りであるが、それぞれのスクラッチタイルの表情が少しずつ異なる。生駒ビルディングのそれは、表面の大きな凸凹と釉薬の輝きに抜kindで存在感がある。

以上のように、生駒ビルディングの外観表現は、当時の時代相と消費者の嗜好に反映するとともに、デザインに対応した素材選定にも細心の注意が払われていたことがうかがえる。

■狭いフロアを美しく

平面図や「新築工事概要」によれば、地階は倉庫等、1階は主に営業室(陳列室)、2・3階は陳列室、4・5階は事務室とある。1～5階は53.33坪(176㎡)で、各階ともエレベータ1機、階段2ヵ所、倉庫または便所があるから、営業室・陳列室はそれほど広いとはいえない。竣工写真には、ところ狭しと陳列ケースが並べられていた様子が写る。しかし、この建物が今日まで大切に残されてきたのには、こうした使用状況にも負けないだけの、建築として、デザインとしての強さがあったからだろう。関東大震災の教訓を生かした過剰ともいえる大梁・小梁の強固な構造はもちろん、外観に負けないアール・デコのデザインも一貫している。

内部の見どころの第一は、2ヵ所の階段室である。主階段は堺筋側の店舗入口をはいると正面にみえる。入口は堺筋側(東側)のほ

かに平野町通側(北側)にもあった。江戸時代以来のまちの正面は平野町側だったが、ここでは階段との位置関係から拡張された堺筋が正面であったことがうかがえる。さて、堺筋側からはいると、階段と同じく段々状になった手摺のデザインと、大理石の質感が目飛び込んでくる。現在は、赤絨毯が階段に敷かれている。竣工写真では色までは判然としないが、おそらく現在とそう変わらない雰囲気であっただろう。大きな違いは、階段踊り場のステインドグラスが、当時はなかったことくらいであろうか。狭い平面を有効に使えるよう、「コ」の字形に階段が配されている。

もうひとつの階段は、南側裏手に位置する勾配も急なものであるが、手摺や段裏の曲面表現などは見事である。裏側でありながら手を抜かない姿勢が読みとれる。

階段とならんでデザインのモチーフとなったのが、垂直に伸びるビルの顔であるエレベータであった。竣工時のエレベータは、1階は北側、2・3階は東側と扉の位置が階によって異なっていた。現在は東側の扉に統一されているが、1階北面には竣工当時の名残をみせる文字板などが健在である。

1階内部の壁面は、二丁掛の施釉タイル貼りで、目地は金泥仕上げであり、大理石部分とも調和している。外装のスクラッチタイルとは一味違った魅力がある。また、照明器具はビル全体のアール・デコの雰囲気を継承している。

このように、細部にいたるまでデザインに気が使われ、外観の印象とたがうことがなかった。

■コンシェルジュオフィスとしての再生

今日でも、竣工時と見劣りしないほど見事な外観・内装を呈しているのは、このビルが定期的に補修を受けてきたからだろう。昭和57年にエレベータの交換、翌年に外壁のテラコッタとスクラッチタイルの補修が行われた。

さらに大きな改修が行われたのは平成14～15年のことである。Y's建築設計室(現・Y's design建築設計室)によるこの時の改修は、建物の性格を根本的に変えるものとなった。生駒時計店としての用途から、オフィスへの大々的な転換である。近年、リノベーションやコンバージョンが盛んであるが、生駒ビルディングの例は比較的に早い成功例であろう。

「コンシェルジュオフィス北浜T4B」として生まれ変わったこのビルは、その名のとおりホテルのコンシェルジュのようなサービスを提供し、個人の起業家や企業の大阪オフィ

スとして利用されている。内部はわずか2.02坪から6.68坪までの小部屋に分割され、それぞれ1～5名程度の利用を想定してレンタルされている。こうしたサービスの中核を担うのが1階のレセプション(総合受付)である。電話の取り次ぎ、来客応対などにより、少人数の企業でも顧客や訪問者に十分対応できるサービスを提供している。デザインの上でも、レセプションの設えはアクリルチューブを用いた斬新なものとなった。

しかし、こうした改修は歴史的建造物の価値を損ねてしまうのではないかと、という問いと常に隣り合わせにある。

しかし、ビルオーナーである生駒伸夫氏の意味はしっかりしたもので、歴史的な価値を損なうことなく機能を付加・向上し、新しいビジネススタイルに対応しようとするものだった。結果、堺筋側から正面階段にいたる動線と視線は十分守られ、アール・デコを基調とする歴史的な内装もほぼ昔の面影をとどめている。もっとも、天井の照明器具が1階で新たに装飾物としての役割を与えられたり、欄間が1階ウェイティング・ルームを飾ったりと、用途や配置は微妙に変えているが、当初の意匠・素材はできる限り尊重されている。使われなくなった一部の装飾部材は、オーナーによって大切に保管されている。階段室のステインドグラスが現在位置になったのも、実はこの時である。本来は東面・東北面・北面にあったショーケースの欄間として用いられていたものが、90度向きを変えて階段室の踊り場の窓におさまった。言われなければ気付かないほどに、現在の空間と調和している。

船場を中心とする個人オーナーの比較的小さなビルが、大阪の近代建築の特徴を築いている面がある。それは、オーナーの個性が建築に反映されているためで、建築家を選ぶ際も、個性の表現は大きな基準になったと思われる。設計者の宗建築事務所は、生駒ビルディングの学区であった集英小学校・校舎の設計者でもあった。建築家と地域の関係を考える上でも、面白い事例であろう。そして、ビルの改修にあたっては、オーナーの果たした役割は大きい。歴史的建造物の継承を考える上でも、ビルとオーナーの関係は無視できないものであろう。

(さかい かずみつ/大阪歴史博物館学芸員)

清水 重敦

—SHIMIZU SHIGEATSU—



「平城宮第一次大極殿」にて

学歴

1999年 東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得満期退学
2005年 博士（工学）

経歴

1999年 奈良国立文化財研究所 研究員
2009年 奈良文化財研究所 景観研究室長
同年より 京都大学大学院人間・環境学研究科客員准教授を兼任

主な著書

「擬洋風建築」（至文堂、2003）
「復元思想の社会史」（共著、建築資料研究社、2006）
「復元 幻の大寺院 新薬師寺の謎に挑む」（共著、NHK出版、2011）

「歴史家」と「建築家」の間で

「そもそも大極殿復元には反対だった」。奈良文化財研究所でまさに平城宮第一次大極殿復元事業に関わってきた清水氏の意外な言葉である。「特に古代建築の復元は“推定”の積み上げであり、復元された建物は様々な解釈があるなかの一つの考え方であることを忘れてはならない」と、復元事業の不安定な側面を指摘する。

歴史的建造物の保存・再生とその活かし方についての研究を進めていた氏は、1999年、同研究所に籍を置く機会を得る。当初は埋蔵文化財の発掘調査や全国のまちなみ調査などを行っていたが、その後大極殿の復元設計から完成後の報告書作成に至るまでを担当することになる。「都市や建築は、様々な時代に手を加えられたり更新されたりしながら歴史・文化の重層として現在が形づくられており、これこそが本来の姿である。しかし歴史的建造物の復元とは、建てられた当の時代を切り取って今に現すことであり、あいだの時間が完全に省略される行為である」。復元する意義とは一体何なのか、その葛藤に悩まされながらも進められる事業に新しい価値を見つけ出そうと考えた。一つは、歴史的建造物の復元や保存をめぐる議論において、この注目される事業に関わった研究者として説得力ある発言をしていくこと、もう一つは、復元設計の根拠を構造や機能といったアプローチで考えることで新しい発見を求めることだった。

「大極殿は2階建てであった」。実際に構造検討を進めるにつれ、当初考えられていた架構ではこの巨大木造建築物を到底支えることができないという壁に直面した。このことは古代建築をあらためて調査解明する必要を生み出し、法隆寺金堂、薬師寺東塔などの構造方法を新しい視点で見直すことで道が開けた。また、鴟尾、金具、高欄の据玉など、装飾的な解釈だけでなく機能上の意味を問うことで形の根拠が明確なものになった。これらは、復元という行為を通すことによって発見できたことであり、表層的な様式や形態といった枠組みの中で行われがちな歴史学研究の盲点があぶり出される結果となった。「復元の意義とは、断絶して失われた時代の建物を、現代の設計者の視点で見直し、新しい発見を得ること」。逆にいえば、研究成果を単に形にするだけの、新たな発見が得られない復元ならすべきでない、と氏は主張する。

現在は、「文化的景観」という新類型を基軸に、文化遺産が現代の環境形成にどう寄与されるべきか、そのアプローチの開拓に注力している。「“復元”は限りなくデザインの問題である」。それは歴史学だけで片付けられる問題ではなく、復元される現代の空間を新しくデザインするという、いわば“建築家”のセンスが必要な事柄であるということだ。「歴史家は時代を遡ることを得意とし、建築家は歴史を現代に下ろして考えることが得意である」。その両方を持ち合わせた“建築家的センスをもった歴史家”というスタンスで、歴史と現代との付き合い方についてこれからのあり方を探究している。

大極殿から南を見ると、平城宮跡を貫き疾走する近鉄電車越しに朱雀門が見える。「この風景はなかなかシュールで面白い」。これまでの歴史家には無かったであろうこの感覚が、新境地を切り開く発想の源なのかもしれない。

聞き手 根木和人（東畑建築事務所）
写真撮影 河合止揚

JFE443CTの紹介

ステンレス鋼には多くの鋼種があるが、建材分野ではSUS304（18%クロム-8%ニッケル）が主に使用されている。しかし、原料のニッケルは希少金属であり、高価であるとともに価格変動が激しい。そのため、SUS304も価格が高くて変動しやすい欠点を持っている。

SUS304代替策の一つとして、JFEスチールが販売しているニッケル無添加の省資源型ステンレス鋼「JFE443CT」を紹介する。

JFE443CTの特徴

JFE443CTは次のような特徴を持つ。

1. 優れた耐食性

耐食性能に寄与するクロム含有量を21%に高めるとともに微量の銅とチタンを添加しており（表1）、SUS304と同等の優れた耐食性を持っている。塩水に対する耐食性の指標である孔食電位はSUS304と同等である（図1）。さらに、沿岸地域における4年間の長期屋外暴露試験では、SUS304より錆びの発生が少なく良好な耐食性を持っていることが確認されており（写真1）、屋外用途でも使用が可能である。

2. 価格優位性・安定性

ニッケルを添加していないのでSUS304より安価である（2011年4月現在の素材価格比較では、-10～-30%）。また、ニッケルが高騰してもその影響を受けず価格が安定している。

3. 良好な機械的特性・加工性

実際の強度の指標となる0.2%耐力はSUS304と同等以上の特性を持っており（表2）、SUS304と同じ板厚で代替できる。溶接性、成形性も良好である。SUS304に比較して熱伝導がよく熱膨張が少ないので（表3）、屋根、壁や床等の長尺物溶接の熱変形が軽減される利点もある。

4. 製造形態

JFEスチールは薄板を供給している。薄板であればSUS304とほぼ同じ表面仕上げの品揃えがある（表4）。その薄板を素材としてJFEスチール以外のメーカーから化粧パイプ等も販売されている。ただし、厚板、形鋼や棒線は販売されていない（表4）。

省資源型高耐食ステンレス鋼

JFE443CT(SUS443J1)

JFEスチール株式会社

〒530-8353 大阪市北区堂島1-6-20

TEL 06-6342-0729

5. 公的認定

2010年よりJIS規格に「SUS443J1」が追加されて、JIS鋼種として使用が可能になった。さらに2010年10月発行の国土交通省監修『建築工事監理指針（H22年版）』（16章「建具工事」5節-ステンレス製建具、7節-建具用金物）に明記された。

用途

2005年の生産開始以来、建築、電機（屋外用通信設備等）、自動車（マフラー等）や産業機械（液晶製造設備等）の多くの用途でSUS304代替鋼として使用されている。建築分野では建具、金具、内外装材や厨房機器等に使用が広がっている（写真2、3）。

薄板に限定という制約はあるが、耐食性が低下せずコスト低減を図れるとともに、建具メーカーや金物製作メーカー等でも材料入手に問題はないとの事から、SUS304代替鋼として活用が期待される。

（阪本重信／建材委員）

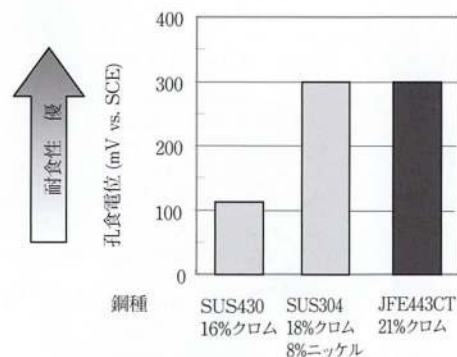


図1 耐食性 (孔食電位)
(3.5%NaCl, 30℃で測定 JIS G 0577に準拠)

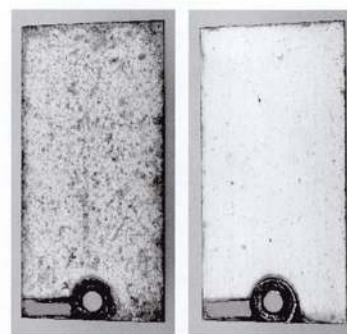


写真1 耐食性 (4年間沖縄海浜地区暴露試験結果、試験片寸75×150mm)

表1 化学成分 (単位: %)

鋼種	クロム	ニッケル	銅	チタン
JFE443CT	21	—	0.4	0.3
SUS430	16	—	—	—
SUS304	18	8	—	—

表2 機械的特性 (例は板厚 0.8mm)

鋼種	0.2%耐力 (N/mm ²)	引張強さ (N/mm ²)	伸び (%)
JFE443CT	規格値	205以上	390以上
	例	305	483
SUS304	規格値	205以上	520以上
	例	260	645

表3 物理的特性

	密度 (g/cm ³)	磁性	熱伝導率 W/m・℃	熱膨張係数 ×10 ⁻⁶ /℃
JFE443CT	7.74	あり	22.5	10.5
SUS304	7.93	なし	16.2	17.1

表4 JFE443CTの製造範囲

形状	板 (専業メーカーから化粧パイプ、パンチングメタル等有)
板厚・板幅	厚: 3mmまで※ / 幅 1,524mmまで
表面仕上げ	光沢仕上げ (仕上記号2B) 白色仕上げ (仕上げ記号2BW; SUS304の仕上記号2Bに類似の仕上げ) ヘアライン仕上げ (仕上記号HL) 等の研磨仕上等

※熱延焼鈍酸洗仕上げは4mmまで

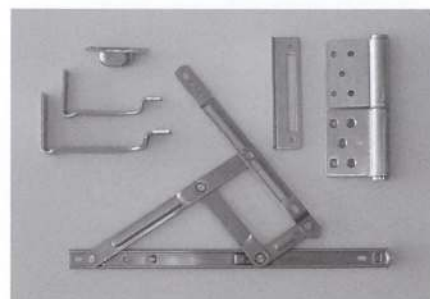


写真2 JFE443CT適用例 (金具類)



写真3 JFE443CT適用例
(免震エキスパンション)

読者と選ぶ 「建築と社会」賞入賞発表

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■第10回選考委員 (50音順)

井上雅人 (武庫川女子大学講師)

江川直樹 (関西大学教授)

鈴木克彦 (京都工芸繊維大学大学院教授)

「建築と社会」編集委員)

多田元英 (大阪大学大学院教授)

論考部門入賞

白井晟一における石の「発見」

〈2010年7月号〉

倉方俊輔

建築における石の特集で、白井晟一について書いてください。突然、このような依頼を受けて驚きました。しかも、伝統ある「建築と社会」誌です。当時の自分にとって「建築と社会」は、第一に日本建築学会の「建築雑誌」に並ぶ歴史研究の基礎文献でした。第二に関西建築界の優れた論考が掲載される、縁遠い雑誌と思っていました。東京に生まれ育ち、日本近代建築史を研究する身にとっては。

そして、今これを書いているのは大阪です。この春から在阪の大学に着任して、研究・教育活動を始めました。原稿を執筆した時には思ってもみないことでしたが、不思議なご縁です。

この1年の間に、さまざまなことがありました。自分の話で申し訳ないのですが、2010年度に北九州小倉にある大学で教えていた時の様子は「建築と社会」2010年10月号に「研究の風景」として書かせていただきました。

東京以外への赴任は、自ら望んだことでした。しかし、頭では分かったようであっても、身を移して初めて会得できることが、理解の遅い私には多くあります。東京以外の街に、それぞれ異なった豊かな可能性を感じました。そうした街のほうが、むしろ状況は動かしやすいのではと思いました。ただ、多くの人が、東京至上主義と量的成長の考え方に今もとらわれているのは意外でした。それは明治期や戦後復興期には効率的だったでしょうが……。保護の対象ではない、互いにコミュニケーション可能な「強いローカルティー」を私は望んでいます。国内の多極化によって、日本はもっと面白く生きられるのではないのでしょうか。

賞をいただいた論考では、白井晟一の戦後を論じました。日本の戦後を振り返ること、東京以外の豊かさを見つめること。今年、その必要を感じているのは、私だけではないと思います。

倉方俊輔 くらかた・しゅんすけ

1999年 早稲田大学大学院理工学研究科博士課程満期退学

2010年 西日本工業大学准教授

2011年 大阪市立大学大学院工学研究科准教授

●著書

『吉阪隆正とル・コルビュジエ』(王国社)

『建築家の読書術』(TOTO出版、共著)

『東京建築ガイドマップ』(エクスナレッジ、共著)

『伊東忠太を知っていますか』(王国社、共著)ほか



論考部門入賞

京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に—

〈2010年10月号〉

中村昌生

戦後、「現代数寄屋」などと呼ばれ、新しい和風のデザインが目ざましく流行した。そこには、日本建築の伝統が近代化されていると評価されていた。確かに目新しい魅力が感じられた。しかしそこに日本建築の真髓が生かされているとは、私には思えなかった。それは、私が茶室の研究に取り組むことになった理由の一つともなった。

茶室の研究では、工匠とは異なる茶匠の創作の秘密を探りたかった。そのために、自身も物づくりを志し、幸い仕事に恵まれ、実践的研究を進めることができた。そこで茶匠の建築法とともに、大工や左官の技術も学べた。茶匠の建築法は近代の数寄者たちによって、和風の基調として生かされ、普請の黄金時代を築きあげた。「近代和風」の世界である。

「夏は涼しく、冬は暖かに」をもてなしの極意とした茶の湯は、日本人が昔から続けてきた「自然との共生」に培われた英知の源泉である。茶匠の建築もその英知に根ざしたもので、その建築はおのずから、自然との対立を躲し、融合を求める。そして「庭屋一如」の空間が具現できたのである。

今回の天災は、自然との共生の思想を忘れ、自然をもコントロールできるような錯覚に陥りかけた、すべての日本人に猛省を促した。「便利で快適な生活」の追求だけでは得られない理想の世界を、「現代和風」は私たちに啓示してくれる。

自然とともに呼吸する家づくりを甦らさなければ、自然の怒りはいつまでも鎮まらないであろう。



中村昌生 なかむら・まさお

1927年生まれ。現在京都工芸繊維大学名誉教授、福井工業大学名誉教授。

年来、茶室・数寄屋の研究を通じ、日本建築の伝統を追究。1980年伝統建築技術の継承と発展のため、同志と財京都伝統建築技術協会を設立。1991年より理事長。

日本芸術院賞、第1回圓山文化賞など受賞。1998年京都市文化功労者。

著書に『茶匠と建築』『数寄屋邸宅集成』他多数。

佐野記念病院/介護老人保健施設 栄公苑

(2010年6月号)

京都工芸繊維大学大学院教授

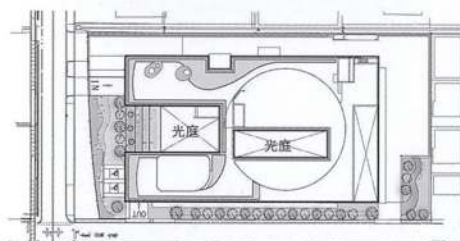
鈴木克彦



バルコニーのないシンプルな矩形に、ランダムに穿った窓。「一見病院や老健施設に見えず、どことなく愛らしさを感じる建物」をデザインテーマとした。

建物には2つの開放的な光庭を設けている。共用部では、光庭を介して視線が抜け、空間の広がりを感じることができる。光と風、緑が豊かで潤いのある療養環境が得られることを目指した。

地面から屋上へ、光庭から空へと段々に緑を連ね、内と外を緩やかにつなげる。そして街並みにも潤いを。建物を使う方、訪れる方に「何だかちょっといい感じ」と思ってもらえたと嬉しい。



所在地 大阪府泉佐野市中町2-4-28

建築主 社会医療法人 栄公会

施工 安藤建設・ダイダ・三晃空調



岡田泰典 おかだ・よしのり▶

1992年 日建設計入社

現在 日建設計設計部 主管

●過去の作品

村田製作所本社

京都リサーチパーク8号館

INAX大阪ビル

京都リサーチパーク9号館 など



◀西田佳代 にしだ・かよ

1993年 日建設計入社

現在 日建設計クライアント

リレーション部 課長

●過去の作品

住友病院

読売京都ビル

まりデイサービス内海

阿波銀行鴨島支店 など



第10回を迎えることになった読者と選ぶ「建築と社会」賞は、本誌2010年1月号から12月号に掲載された建築作品および論考・記事を選考対象として作業が進められた。会員の声を反映し広く開かれた賞という趣旨から、読者の投票結果をふまえた後、編集委員会から建築作品13点、論考・記事16点が選考委員会に推薦された。さっそく、3月15日に選考委員会が開催され、選考委員から新たに推薦があった建築作品1点、論考2点を加えて、個々に慎重な審議を行った。審議にあたっては、「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性と環境への配慮に対する評価を重点に置いて選考したが、選考委員全員が授賞にふさわしいと評価に至った建築作品と論考を、次のとおり選出した。

まず、作品部門であるが、賞にふさわしいと全員の選考委員に評価された作品は「佐野記念病院/介護老人保健施設 栄公苑」(設計・監理：日建設計)のみであった。光庭を巧みに組み入れた設計の技が、内外空間が一体となった明るく開放的な療養環境を生み出しており、患者の立場に立ったきめ細やかな設計姿勢が高く評価された。利用者への高い配慮という点では「春日育成苑」(設計・監理：安井建築設計事務所)も好感が持てたが、残念ながら全員の評価が一致しなかった。「ふつうの暮らし」ができる環境に対して、入所者による評価がどのようなものであったか期待したいところである。

一方、論考部門では和風建築の魅力について論じた「京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に—」(中村昌生氏)が高く評価された。その深みのある内容は、先生の多年にわたる茶室・数寄屋建築研究の蓄積のたまものであり、和風建築の奥深さを感じさせてくれる迫力ある内容に、全選考委員が深い感銘を受けた。論考ではないため評価対象にはならなかった「伝統木造構法を未来につなぐ」(木下孝一氏)とともに、伝統技術を次世代につなぐ責務を読者に伝えている貴重な論考である。

白井晟一の建築思想について論じた「白井晟一における石の「発見」」(倉方俊輔氏)も、建築造形における素材へのこだわりを巧みに説いた論考であり、建築技術の真髄とは何かを解きほぐしてくれる内容であった。

「建築と社会」賞の選考作業を通じ、毎号企画されている特集内容の充実ぶりには毎回感心させられている。このたびの受賞の皆様には心から感謝を申し上げるとともに、日頃から誌面の充実に鋭意取り組まれている編集委員会委員の皆様にも厚く敬意を表したい。

建築に対しては、ますます複雑な機能が要求され、建築家に対しては、ますます複雑な知識が要求されている。

今回受賞した作品の「佐野記念病院」は「介護老人保健施設 栄公苑」を併設している。高齢化社会が深化していくにつれ、リハビリテーションや介護を必要とするのが「病人」とは限らなくなり、「健常」の状態が曖昧になっている。現在、病院はいずれ回復する症状を持った「病人」がいくところではなくつつある。そういった状況に対応していくためには、病院にリハビリテーションや介護を行う機能を単純に付加していくという方法論では、どうしても限界があるのは明らかであろう。「佐野記念病院」以外の多くの作品でも、福祉施設をどのように複合的な機能を持った日常空間として設計していくかが試みられていたが、光のあり方によって居心地の良い空間をつくり出そうとした本作品は、その中でも評価されるべきだろう。

受賞した二つの論考、「白井晟一における石の「発見」と「京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に—」は、どちらも歴史について書かれているが、単なる歴史研究ではなく、現在の建築にどのようにして歴史的な知恵を生かすことができるかという視点を忘れていない。

白井晟一は近年再評価が著しい建築家で、現在も展覧会が開かれている。「白井晟一における石の「発見」」においては、白井の石の使い方に着目し、白井が石を素材として「発見」するところに、日本のモダニズムの重層性を見いだしている。白井の構築的ではない石の使い方や、歴史観が現在に持つ意味は大きい。

他方、明治から昭和にかけて建てられた和風建築にこそ日本の伝統があるとするのが、「京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に—」である。近代和風はどこかキッチュな存在として、研究の対象とはなっても、新しい建築において、まともに参照されることは少なかった。しかし、近代和風建築の木構造と、「庭屋一如」の思想が次代に受け継がれていくことの重要性を著者は力説する。先頃建てられた「京都迎賓館」を機に現代建築と伝統が融合されることを願っているが、それは単なる願望ではなく、建築家たちへの強い要望であろう。

「減築」という言葉が使われるようになっていくが、建築家の仕事は無から新しい空間をつくることではなく、既存の空間を治すことへと変わりつつあるのかもしれない、と思わせる作品や論考が多かった。先頃の震災で建築がどう変わるのか見守っていききたい。

建築作品は、読者、編集委員会からの推薦があったものは極力現地に行き確認をするように努めたが、いずれも私が建築にとって一番重要と思っているところが、そのように扱われていないのが残念であった。事前審査でも多くの票を集め、最終受賞となった「佐野記念病院／介護老人保健施設 栄公苑」も同様であった。たしかに、内部空間はよく出来ていて、東側が全面ガラスのロビーも大変気持ちよく、この規模の施設の質が向上することは社会的に重要なことである。しかし、利用者にとってだけ気持ちが良いのでは困る。幅員の大きな前面道路に面した外壁であるような分節とセットバックをしているが、本来ならば、周辺の戸建て住宅に面する側面や北背面にこそ配慮すべきである。写真が掲載されていない北背面はあまりにも貧しい。西面1階のサービス部分も雑な感じだし、開口が揃っていないことに起因するのか、コンクリートの精度も悪く、クラック防止目地も気持ち良くない。とにかく全部真っ白に塗っちゃったという感じが、このあたりはもう少しキメの細かい対応ができないものか。そここのところが大いに残念であった。

その他、受賞には至らなかったが、「春日育成苑」の発想は悪くない。ここでも、プロパン庫に代表される細かな部分への処理に賛同できず、配置ももっと自由に良かったのではと感じた。

事前には票がなかったようだが、「金山センタープレイス」は思っていたように、夜の雑然とした金山の境界性を映し出す表現で、朝は写真以上に静謐な感じでまちなみを形成している。しかしここでも、街に直に接する1階部分、特にコーナー部分の足元の処理があまりに貧しい。建築は大地と連続する部分にその本質が表れる。せっかくこれだけの発想があるのに残念である。「白井晟一における石の「発見」」は、「ある」ことの衝撃へと誘う沈黙の石、そこに変わらずに流れているのは、彼が抱いた直接性への希求「素材の始原」「石そのものの発見」と述べ、建築に宿る命の大切さを感じさせる文章で、興味深く読んだ。

「京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に—」も、あらためて建築の在り様を考えることを助ける文章である。建築が周囲と和し、威圧することのない造形でなければいけないこと、工夫をあらわに見せず、ましてや建築を立派に見せてはいけなく、そのために技を凝らすこと。近代和風を例にとって語る建築の在り様は、わが国に建つすべての建築についての真実だと感じる。

「建築と社会」賞の選考委員会では、数時間に及び合議のうえ以下の3点を選定した。論考の2点については、対象建築物の写真や図面が誌面に十分に掲載されておらず、構造分野の自分には一読で理解しづらいものであった。個人的には別途に資料を検索しながらの選定となった。

京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に— 日本の建築界の近代化は、西洋建築をいかに導入してきたかで語られることが多い。それに対し、ややもすれば軽視されがちな近代木造建築に焦点を当て、明治・大正・昭和戦前における大工技術の継承および洗練熟成の事例を紹介している。京都の鹿ヶ谷から南禅寺・岡崎にかけての山荘群の建物と庭について、施主・大工・庭師の人間的な交わりを紹介しながら各山荘の魅力を論じている。近代和風建築の魅力が伝わってくる論考である。

白井晟一における石の「発見」 白井晟一の代表的な建築（計画）である親和銀行本店・松井田町役場・原爆堂計画を採り上げ、白井が石素材で何を表現しようとしたかについて論じている。構造体として石を積み上げるのではなく、鉄筋コンクリート構造の表面仕上げとしての石の使用に対して、「構造体としての使命や、様式統一への奉仕から解放されることで、私たちが古代や中世の建築から感じる石の存在感を受け継ぎ、より強調している」と論じている。機能を伴わない装飾に対して、その深い意味を読み取った事例が他にも多いが、その新たな事例として興味深く読ませていただいた。

佐野記念病院／介護老人保健施設 栄公苑 ベッド数95の病院（主として整形外科と脳神経外科）とベッド数55の介護老人保健施設が複合した鉄筋コンクリート造4階建ての建物である。凹凸のない平らな壁面に窓をランダムに配置しており、「ベッドまわりのカーテンを閉めても、通路部分に換気と採光を確保できる」などの配慮をしている。患者や入居者の居住性に配慮した施設である。

Information

7月号から、本欄掲載の美術館等の招待券をご希望の方は、電話等で申込みをした後、招待券送付用の切手(80円)を日本建築協会事務局までお送りください。

▶大阪歴史博物館開館10周年記念特別展「民都大阪の建築力」

大阪の近代建築の魅力を、建築家の図面に表現された「描く力」、建築細部を魅力的なものとする「装飾の力」、そして建築を愛するオーナーや美術家による「伝える力」の3つの視点から紹介する大阪歴史博物館の展覧会「民都大阪の建築力」。

図面やスケッチ、細部装飾など約250点の展示品を通して、近代建築の魅力とそこに込められた人々の思いを感じ取り、今後の大阪の建築やまちづくりを考える一助になればと企画されたもの。

会 期 2011年 7月23日(土)～9月25日(日)
9:30～17:00 火曜日休館

会 場 大阪歴史博物館・6階特別展示室
TEL06-6946-5728

大阪市中央区大手前4-1-32

観覧料 【特別展のみ】

大人800円、高大生600円

【常設展との共通券】

大人1320円、高大生940円

*中学生以下、大阪市内在住の65歳以上(要証明)等は無料

出 展 ①大阪市公会堂設計競技1席(岡田信一郎案透視図)

②大阪城天守閣新築設計図より南北立面図・部分



大阪市公会堂設計競技1席 岡田信一郎案透視図
明治45年 大阪市中央公会堂所蔵

③旧鴻池本店ステインドグラス

④島野三秋作「旧そごう大阪店エレベータ漆螺細装飾屏」

⑤伊達伸明作「美章園温泉ウクレレ」など

■講演会「世界の中の20世紀大阪の建築」

日 時 2011年 8月6日(土) 14:00～16:30

講 師 五十嵐太郎(東北大学大学院教授・建築評論家)

会 場 大阪歴史博物館・4階講堂

定 員 250名(当日先着順)

参加費 300円

特別展観覧券の半券を持つ人は無料
以後、会期中の9月初めまで特別展を楽しむための連続講座やコンサートを企画。

招待券は日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。

▶京都工芸繊維大学美術工芸資料館で同時開催

■展覧会1「建築家 白井晟一 精神と空間」

白井晟一(1905～1983)は京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)を卒業後、私淑していた哲学者の戸坂潤や深田康算の勧めでドイツに留学した。ドイツで白井は当時のモダニズム建築の動きに接することなく、カール・ヤスパースの下で学んだ哲学とゴシック建築を通して西洋そのものと出合っていく。そして帰国後、建築を志し建築家としての道を歩み始める。

寡作ながらも、戦後に入ると「秋ノ宮村役場」を皮切りに活動の場を広げ、「原爆堂計画」「善照寺」などを経て、「親和銀行本店」(1968)によって日本建築学会賞を受賞する。

本展では、日本近代建築の異端として今なお建築の根源的な意味を問いかける存在でもある白井晟一とはどんな建築家だったのか、何を求めているのか設計原図やスケッチ、写真、模型、その他の資料を通して、その建築と思想の全体像に迫る。

会 期 2011年 5月23日～8月11日(木)
10:00～17:00 日曜・祝日休館

会 場 京都工芸繊維大学美術工芸資料館
TEL 075-724-7924

京都市左京区松ヶ崎橋上町

入場料 一般200円、大学生150円、

高校生以下無料

■展覧会2「ベルギー 木の匠の技」

優れた木造建築とその技術が遺されているベルギー南部のワロン地方の建築を中心に、ヨーロッパの木造建築と技術を、図面、模型、道具、映像などで紹介する。

会期・会場は上に同じ。上記入場料で白井晟一の展覧会を見ることができる。

招待券は日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。

■講演とシンポジウムー参加費無料ー

「ヨーロッパの伝統的木造建築と技術」

講 演 クリストフ・ヘンリヒセン(ハイデルベルグ大学カールヤスベル研究所)

討 論 クリストフ・ヘンリヒセン/西山マールセーロ(竹中工務道具館)/松本絵里(鳥根県教育委員会)/日向進(京都工芸繊維大学)

日 時 2011年 7月30日(土) 14:00～16:30

場 所 京都工芸繊維大学60周年記念館
1階記念ホール

定 員 先着200名(申込み不要)。

▶につぼんの客船 タイムトリップ展

INAXギャラリー大阪では、日本の船のデザインの完成形と見ることができる客船として、世界一周の航路をとった大阪商船（現・商船三井）の「あるぜんちな丸」（1939年）と、東京から伊豆へ航行した東京湾汽船（現・東海汽船）の「橘丸」（1935年）を取り上げ、見る者を当時の船旅へと誘う。入場無料。

●「あるぜんちな丸」—基本設計は大阪商船の和辻春樹が手がけた。和辻は日本独自の様式の客船完成を目指して、建築家の中村順平や村野藤吾を起用した。和辻の言う独自性とは、欧風の踏襲ではなく、和風を持ち込むのでもない、新しい日本デザインの良さがにじみ出るような洗練された客船であった。

●「橘丸」—三菱重工神戸造船所副所長の南波松太郎が流線形の船体を設計、建築家の本野精吾が手がけたモダンで優雅な室内外のデザインが見どころとなっている。

会 期 2011年6月4日～8月18日(木)
10:00～17:00

水曜日休館、8/10～8/17休館

会 場 INAXギャラリー大阪
大阪市中央区久太郎町4-1-3
伊藤忠ビル1階

LIXIL大阪水まわりショールーム内

■講演会「客船の黄金時代 船のデザイナー・和辻春樹とあるぜんちな丸」

講 師 野間 恒 (海事史家)

日 時 2011年7月21日(木) 18:30～20:00

会 場 LIXIL大阪水まわりショールーム

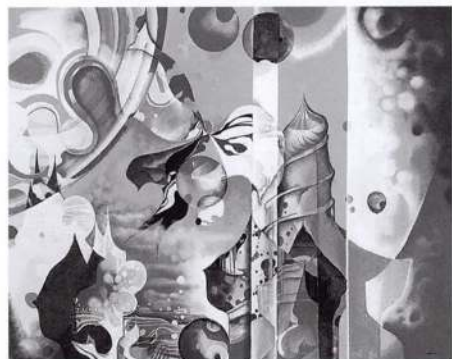
参 加 無料 (申し込み要)

申込先 TEL06-6733-1790

e-mail: xbn@i2.inax.co.jp

▶空想のきらめき～シュルレアリスムとイメージ世界～

奈良県立美術館が所蔵する近・現代コレクションの中から、シュルレアリスムを推進した日本人画家の作品や、影響を受けた作品、さらにはシュルレアリスムから派生した抽象表



熊本正義《ワシリー寺院 (リボンと風船のたわむれ)》
1972年

現の作品に焦点を当てる。

会 期 2011年7月16日(土)～8月28日(日)
9:00～17:00

(8/5～8/14は無休。19:00まで)
月曜休館 (7/18開館、7/19休館)

会 場 奈良県立美術館 TEL0742-23-3968
奈良市登大路町10-6

観覧料 400円、大高生250円、小中生150円

出 展 絹谷幸二《大和遠望》、古沢岩美《壁》、
白石道夫《時の形象'08-2 Kizashi》
など82点

招待券は日本建築協会 (TEL06-6946-6981) へ。

▶京都文化博物館 リニューアルオープン



秋野不矩
「紅雲」
1938年
京都市美術館蔵

2010年12月末から改装工事のため約7カ月間休館していた京都文化博物館は、7月9日正午にリニューアルオープンした。2階、3階の展示内容を大幅に刷新し、映像ホールも「フィルム・シアター」としての設備を整えた。

■細川家 永青文庫コレクション1

会 期 2011年7月9日～9月4日(日)
10:00～19:30

月曜休館・8月9日臨時休室

会 場 京都文化博物館・2階総合展示室
京都市中京区三条高倉

入場料 総合展示室:500円、大学生400円

展 示 【細川家と京都】—細川ガラシャ消息、源氏物語(細川幽斎 筆)、宮本武蔵「五輪書」ほか。【細川家と茶湯】—禾目天目茶碗、細川三斎墨蹟ほか

■「日本画 きのう・京・あす」

会 期 2011年7月9日～8月21日(日)
10:00～18:00(金曜日は19:30まで)

月曜休館 (7/18開館)、8/2休館

会 場 京都文化博物館・2階総合展示室

出 展 秋野不矩《紅雲》、小松均《赤富士》、
上村淳之《憩う》—前期一、中路融
人《燿》—後期一—ほか450点

観覧料 【模様替え前期・後期の通し券】
1200円、高大生900円、小中生600円

【模様替え前期・後期の半期券】

800円、高大生600円、小中生400円

「日本画展」の招待券は日本建築協会 (TEL06-6946-6981) へ。

▶『日本美術にみる「橋」ものがたり—天橋立から日本橋まで—』

1911年、諸国へ通じる起点であった日本橋が現在の石造二連アーチ橋に架け替えられてから今年でちょうど100年になる。日本橋架橋百年記念として東京の三井記念美術館の今回の展覧会では美術品に描かれデザインされた橋に視点を広げ、日本人が橋に抱いてきた思いや、橋が持つ文化的な意味について考える。出品数約120点、会期中作品の展示替えあり。



日本橋と旧帝国製麻kk
堀潔画
昭和10年
和泉市久保惣記念美術館蔵

展示期間:
7/9～8/7

会 期 2011年7月9日～9月4日(日)

10:00～17:00 月曜日休館 (ただし7/18は開館・7/19休館。8/15は開館。状況により開館日・開館時間の変更あり)

会 場 三井記念美術館 (三井本館7階)
東京都中央区日本橋室町2-1-1

入館料 1200円、大学・高校生700円、
中学生以下無料

構 成 ①茶道具や漆器など橋をデザインした工芸品②橋にちなんだ茶道具③この世と浄土をつなぐ橋、参詣曼陀羅など聖と俗との境界に架かる橋、天橋立図や柳橋水車図など名所や文学に題材を取った橋④諸国の名橋や奇橋、東海道から大坂の橋⑤橋の長さランキング⑥京都洛中洛外の橋⑦江戸隅田川の橋、そして日本橋

招待券は日本建築協会 (TEL06-6946-6981) へ。

▶フェルメールからのラブレター展 京都展開催

17世紀オランダ絵画には、家族や恋人たちの語らいが数多く見られる。フェルメール、ピーテル・デ・ホーホ、ヘラルト・テル・ボルヒラの作品の中から、本展は、絵画におけるコミュニケーションというテーマにおいて、画中の人間関係を示唆するような人物描写や



ヨハネス・フェルメール《手紙を読む青衣の女》
1663-64年頃 油彩・キャンヴァス アムステルダム国立美術館
© Rijksmuseum, Amsterdam. On loan from the City of Amsterdam (A. van der Hoop Bequest)

小道具の表現に着目する。

絵画の中に見出される、文学との関連性、それにまつわる人物や、象徴的な意味合いを持つ品々を通して、絵画は鑑賞者に語りかけて対話する力を持ち、その謎解きに引き込んでいく。本展では、宗教上の意味合い、セクシなメッセージ、家族の絆、そして物語、それらを表現する身ぶり、目つき、顔の表情、あるいは欺瞞や幻影を4つの章に分けて約40点の名品から読み解く。

なお、フェルメールの《手紙を読む青衣の女》は、修復後世界で初めての公開となる。

会 期 2011年6月25日～10月16日(日)

9:00～17:00 月曜休館

(7/18、9/19、10/10は開館)

会 場 京都市美術館

京都市左京区岡崎円勝寺町124

入館料 1500円、大高生1000円、中小生500円

問い合わせは、TEL050-5542-8600。

招待券は日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。

▶「建築家のあかりコンペ」作品募集

LEDを使って、量産を目的とした照明器具の提案を求める日本建築家協会のコンペ。

第24回世界建築会議(UIA2011東京大会)が開かれるため、第5回コンペは募集を世界に広げ、8月中旬以降に審査。発表・表彰式は9月26日のUIA2011東京大会で。

テーマ LEDを利用した照明

資 格 ・国内外を問わず、設計を専業とする建築家

・日本建築家協会会員、及び所属する設計スタッフ

上記のいずれかの要件を満たす者

登 録 2011年8月8日(月) 必着

受付はインターネットのみ。(社)日本

建築家協会「建築家のあかりコンペ2011」運営事務局 <http://www.jia.or.jp>

提 出 ひとり1点のみ(参加無料)

提出締め切り8月10日(水) 必着

提出物 【一次】A2用紙1枚以内—PDF—
【二次】模型、パワーポイント等自由
使用言語は日本語か英語

審査員 内藤廣(建築家)、内原智史(ライ
ティングデザイナー)、永山祐子(建
築家)、マーク・ダイサム(建築家)、
前芝辰二(大光電機)

賞 最優秀賞1点50万円ほか

▶『夏休み!子ども絵画コンクール』

日本製粉㈱は、今年で4回目となる『夏休み!子ども絵画コンクール』を実施する。

毎年、応募作品1点につき100円を応募者に代わって日本製粉㈱がユニセフに寄付をしているが、東日本大震災の被災地で子どもたちが置かれている状況にかんがみ、今年は支援先を日本ユニセフ協会の東日本大震災緊急募金とする。

テーマ 「みんなが元気になるもの」

対 象 日本国内の小学生。学校・学級単位での応募も可

登 録 2011年6月10日から。必ず事前登録をした上で応募

募 集 2011年7月1日～9月15日(木) 必着

審 査 日本製粉㈱と日本ユニセフ協会ほか

発 表 10月中旬にウェブサイト上で受賞作品と受賞者名等を発表

問い合わせは、NIPPON世界の子ども支援企画事務局へ。Nippon_sekainokodomo@dff.jp

▶医療福祉建築賞2011 募集!

一般社団法人日本医療福祉建築協会の「医療福祉建築賞」は、優れた医療福祉建築を顕彰。優れた医療福祉建築とは、建築として質が高いことに加えて、利用者ならびに職員にとって快適で使い勝手がよいことを条件とする。

●顕彰対象

2008年4月1日～2010年3月31日までに日本国内において新築、増改築または改修をした医療・福祉・保健施設ならびにその関連施設

●応募資格

当該施設の開設者または管理者、設計者のどちらでもよい。

●選考のための提出資料

- (1) 所定の応募申込書ならびに建築概要書
- (2) 設計主旨
- (3) 配置図・平面図・断面図などA3判
- (4) 写真15葉程度。周辺環境がわかるもの

を含む。室内には家具・機器等が設置されていること。大きさは任意

上記(1)～(4)をA3判クリアファイル1冊におさめ、それらをPDF化しCD等に収めたデータも提出のこと。

●応募期日

2011年8月22日～同年9月2日まで。

●提出先

一般社団法人 日本医療福祉建築協会

〒108-0014 東京都港区芝5-26-20 建築会館

TEL 03-3453-9904 FAX 03-3453-7573

●応募料

1作品につき6万円を応募時に納入する。

●選考委員(7名)

今井 正次(三重大学名誉教授) —委員長—

▶建設リサイクル法説明会(第1回)

大阪府内建築行政連絡協議会建設リサイクル部会(大阪府と建築主事を置く府内17市で構成)は、「建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律(建設リサイクル法)」のほか、建築物等の解体等作業に伴うアスベスト関係法令等について説明会を開催する。参加費は無料。定員328名

日 時 2011年8月3日(水) 13:30～16:30

会 場 大阪府庁新別館北館4階・多目的ホール

大阪府中央区大手前3-1-43

申込み 8月1日(月) まで

申込先 ①パソコンまたは携帯電話から

②ファクシミリから

FAX 06-6210-9719

問い合わせは大阪府住宅まちづくり部建築指導室審査指導課開発許可グループ(TEL06-6941-0351)へ。

▶塚脇淳展 Drawings+Maquettes

鉄による抽象彫刻を制作し、国内外で活動している作家・塚脇淳氏(1952～)の個展を、2回に分けて開催する。ただし、個展のChapter Iは7月2日に終了している。

塚脇氏は京都府に生まれ、京都市立芸術大学美術専攻科彫刻専攻修了。現在、神戸大学発達科学部教授。

日 時 Chapter II

2011年7月12日(火)～8月13日(土)

11:00-13:00/14:00-19:00

会 場 ギャラリーヤマキファインアート

神戸市中央区元町通3-9-5-2F

JR・阪神元町駅西口より徒歩1分・風月堂斜め向かい

TEL 078-391-1666

暑中お見舞申し上げます

平成23年盛夏

岡 本 慶 一

日 建 設 計
代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

錢 高 一 善

錢 高 組
社 長

〒550-0005 大阪市西区西本町2-2-11
なにわ筋ツインズ ウエスト
TEL(06)6531-6431

沼 田 亘

株式会社 昭和設計
代表取締役社長

〒531-0072 大阪市北区豊崎4-12-10 TEL(06)7174-8787

香 西 喜八郎

株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長

〒541-0044 大阪市中央区伏見町4-4-10 TEL(06)6202-0391

立 成 良 三

財団法人 大阪住宅センター
理事長

住宅保険、評価、住宅情報相談、住宅展示場他

〒542-0081 大阪市中央区南船場4-4-3 心斎橋東急ビル4F
TEL(06)6253-0071 FAX(06)6253-0145

藤 井 實

エスケー化研 株式会社
代表取締役社長

〒567-0034 茨木市中穂積3-5-25 TEL(072)621-7720

近 藤 徹

不二熱学工業 株式会社
代表取締役

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1 TEL(06)6261-4321

立 野 純 三

株式会社 ユニオン
代表取締役社長

〒550-0015 大阪市西区南堀江2-13-22 TEL(06)6532-3188

安 本 志 郎

社団法人 日本建築協会
常務理事兼事務局長

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL(06)6946-6981

名誉会長

佐 野 正 一

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役相談役

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

長 谷 川 博

株式会社 大林組 大阪本店
専務執行役員 大阪本店長

〒540-8584 大阪市中央区北浜東4-33 TEL(06)6946-4578

理事

佐 野 吉 彦

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

会長

中 井 進

日 建 設 計
取締役副社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

理事

設 楽 貞 樹

株式会社 安井建築設計事務所
常務取締役

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

辻 文 三

財団法人 日本建築総合試験所
理事長

〒565-0873 吹田市藤白台5-8-1 TEL(06)6872-0391
<http://www.gbrc.or.jp>

暑中お見舞申し上げます

平成23年盛夏

設計事務所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長 森 口 雅 文

代表取締役社長 小 田 義 彦

本社・名古屋事務所 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 (桜通ビル) TEL (052) 222-8611

東京事務所 〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12 (聖公会神田ビル) TEL (03) 5294-6211

株式会社 瀬戸本淳建築研究室 ISO9001

代表取締役 瀬 戸 本 淳

〒650-0024 神戸市中央区海岸通1-1-1 神戸郵船ビル TEL (078) 333-0138

<http://www.jsao.co.jp>

株式会社 東畑建築事務所

代表取締役社長 香 西 喜 八 郎

本社 〒541-0044 大阪市中央区伏見町4-4-10 TEL (06) 6202-0391

大阪・東京・名古屋・九州・東北・上海

<http://www.tohata.co.jp>



日建設計

代表取締役社長 岡 本 慶 一

東 京	102-8117	東京都千代田区飯田橋2-18-3	TEL (03) 5226-3030
大 阪	541-8528	大阪市中央区高麗橋4-6-2	TEL (06) 6203-2361
名 古 屋	460-0008	名古屋市中区栄4-15-32	TEL (052) 261-6131

安井建築設計事務所

代表取締役社長 佐 野 吉 彦

本 社 〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL (06) 6943-1371 (代表)

支 社 大阪・東京・名古屋・広島・九州 <http://www.yasui-archi.co.jp/>

建設業有志



ODAYASHI

地球に笑顔を

株式会社 大林組

取締役社長 白石 達

専務執行役員
大阪本店長 長谷川 博

本社 東京都港区港南2-15-2 TEL 03(5769)1111

大阪本店 大阪市中央区北浜東4-33 TEL 06(6946)4400

100年をつくる会社



KAJIMA CORPORATION

本社 東京都港区元赤坂1丁目3番1号

関西支店 大阪市中央区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル
電話06(6946)3311

<http://www.kajima.co.jp/>

子どもたちに誇れるしごとを。



取締役社長 宮本 洋一

取締役副社長関西事業本部長 小橋 鴻三

本社 〒105-8007 東京都港区芝浦一丁目2番3号 シーバンスS館 Tel. 03(5441)1111

関西事業本部 〒541-8520 大阪市中央区本町三丁目5番7号 御堂筋本町ビル Tel. 06(6263)2800



大地への愛

人間への愛

銭 高 組
社 長 銭 高 一 善

本店 大阪市西区西本町2-2-11
なにわ筋ツインズ ウエスト
TEL(06)6531-6431
本社 東京都千代田区一番町31番地
TEL(03)3265-4611
支社・支店 大阪・東京・北海道・東北・北関東・千葉
横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州
URL <http://www.zenitaka.co.jp/>

地図に残る仕事。



大成建設株式会社

社 長 山 内 隆 司

専務執行役員
関西支店長 久 保 博 司

<http://www.taisei.co.jp/>



株式会社 竹中工務店

取締役社長 竹 中 統 一

〒541-0053 大阪市中央区本町4-1-13 TEL(06)6252-1201(代表)

建材・報道・学校・団体有志等



大阪工業技術専門学校

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

建築学科・建築学科Ⅱ部(夜間)・建築実務学科(午前)・建築設計学科・建築設備学科・大工技能学科・インテリアデザイン学科・建築士専科

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目8番24号 ☎ 0120-0910-19 🌐 <http://www.oct.ac.jp/> Tel. 06-6352-0091



社団法人

日本建築材料協会

会 長 藤 井 實

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋4階 TEL(06)6443-0345 FAX(06)6443-0348
<http://www.kenzai.or.jp/>



社団法人 日本建築協会京都支部

支 部 長 上 林 研 二

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入 京都建設会館別館 TEL(075)211-2857



社団法人 日本建築協会中国支部

支 部 長 森 畑 武

〒732-0048 広島市東区山根町28番22号 下岸建設株式会社内 TEL(082)264-0709



社団法人 日本建築協会東海支部

支 部 長 福 田 泰 造

〒460-0008 名古屋市中区栄4-3-26 (昭和ビル5階) TEL(052)261-1451



社団法人 日本建築協会

会 長 中 井 進

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL(06)6946-6981

理事会

第2回常任理事会

5月26日(木) 16:00~17:30

出席者 中井会長ほか6名

- 議事 (1) 22年度事業報告(案)
(2) 22年度収支決算報告(案)
(3) 一般社団法人の申請(案)について
(4) その他報告事項

編集委員会

第2回編集委員会

5月11日(水) 18:00~20:00

出席者 設楽委員長ほか7名

- 議事 (1) 5月号特集「変遷する“身の置きどころ”」の報告
(2) 6月号特集「ECO~建築設備ができるECO技術~」の報告
(3) 7月号特集「建築と土」の報告
(4) 8月号特集「鉄道駅に注目する」の報告
(5) 9月号特集「第58回青年技術者」の確認
(6) 10月号特集「建築の防火対策」の報告
(7) 11月号特集「コンクリートという素材」の報告
(8) 12月号構造特集の企画報告
(9) 各小委員会・分科会からの報告
(10) 2012年1~12月号の特集担当小委員会・分科会の割り振り
(11) 収支状況報告

第2回法令分科会

5月18日(水) 15:00~17:00

出席者 近都幹事ほか6名

- 議事 (1) 「法令コーナー」の企画
(2) 10月号「建築と防災」(仮称)特集の企画
(3) 情報交換

第2回8月号特集委員会

5月19日(木) 18:00~20:00

出席者 設楽委員長ほか3名

議事 8月号特集企画案検討

第2回構造分科会

5月6日(金) 18:00~20:15

出席者 志摩幹事ほか3名

- 議事 (1) 「構造の頁」の企画
(2) 12月号構造特集の企画

第2回施工材料分科会

5月10日(火) 17:00~17:40

出席者 中川幹事ほか2名

議事 11月号特集企画案検討

第2回設備分科会

5月10日(火) 18:00~20:20

出席者 赤澤幹事ほか5名

- 議事 (1) 6月号「ECO~建築設備ができるECO技術~」特集の報告
(2) 「設備の頁」の企画
(3) 見学会の企画
(4) 新企画の提案-計測機器のコラムを中心に
(5) 超高層・高層マンションやオフィスビル計画時への提案

第2回作品作風小委員会

5月26日(木) 19:00~20:00

出席者 池上副委員長ほか6名

- 議事 (1) 作品の選定
(2) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(3) 「gallery」掲載報告・予定
(4) 前回の編集委員会の報告
(5) その他

第2回広告企画小委員会

5月11日(水) 17:00~18:00

出席者 設楽委員長ほか5名

- 議事 (1) 6月号特集「ECO~建築設備ができるECO技術~」
(2) 7月号特集「建築と土」
(3) 8月号特集「鉄道駅に注目する」
(4) 新シリーズ「素材特集」
(5) 収支状況報告

10年委員会

第2回10年委員会

5月12日(木) 18:30~20:30

出席者 設楽委員長ほか6名

- 議事 (1) 「建築の現場」見学会について
(2) 大阪「かくれたええところ」そうせい(創生)プロジェクトについて

出版委員会

第2回出版委員会

5月19日(木) 18:00~19:00

出席者 上原委員長ほか8名

- 議事 (1) プロのノウハウと特装本の経過報告
(2) 進行中のテーマについて
(3) その他

事業委員会

第2回情報見学小委員会

5月12日(木) 18:00~18:45

出席者 瀬戸川委員長ほか10名

議事 (1) 本年度事業について

「大阪富国生命ビル見学会」「JR大阪駅新北ビル見学会」

- (2) 「東日本大震災」をテーマにした催し等の開催について

特別委員会

第22回 群像(インタビュー)

5月11日(水) 13:00~16:00

出席者 久下 武彦(インタビュアー)ほか1名

- 議事 関西の建築界「群像」登場者の人間像に迫るためのインタビュー
Architects Office ICU
長田 直之 氏

入会者(敬称略)

〔個人正会員〕

仁科 誠治 (株)日建設計
増田 寛之 (株)竹中工務店
森根 義久 (株)日建設計

空調・衛生・クリーンルーム設備
(設計・施工)



本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7 電話03(3432)5711
大阪支社 大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支店 北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設計 施工

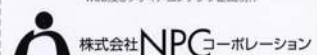


本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話(06)6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話(03)3261-8231
支社 名古屋・福岡
支店 札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所 旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店 シンガポール・ホンコン
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話(0492)58-1511



We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング、コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作



株式会社NPCコーポレーション
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel: (06) 6351-7271 (代) fax: (06) 6352-7479
第二ビル 〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel: (06) 6351-0128 (代) fax: (06) 6351-0208
東京支社 〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1
一光浜松町ビル7F
tel: (03) 3433-5211 (代) fax: (03) 5776-7733
(旧社名ナニワ印刷株式会社、日本データネット株)

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛸池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLビル
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

コンクリートのひび割れ対策に

NETIS 登録済み
KT-040018-V

DENKA
DENKI KAGAKU KOGYO KABUSHIKI KAISHA

高性能膨張材

デニカパワーCSA

JIS A 6202
適合品

特性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材 (タスコン)
 - ・躯体防水材 (シャガード)
 - ・ポリマーセメントモルタル (RIS シリーズ)
- など、各種混和材(剤)をラインナップしています。

●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

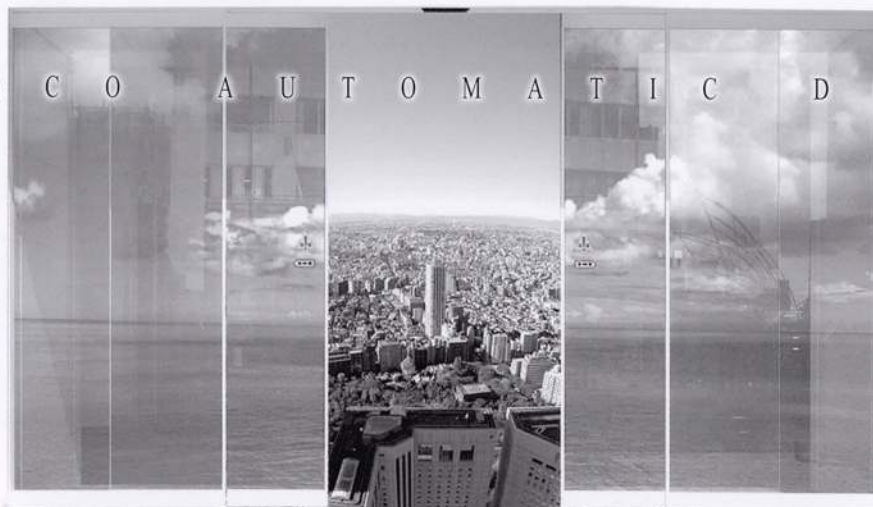
浜宗産業株式会社 本社
〒629-3101 京都府京丹後市網野町網野 126
TEL 0772-72-2220 FAX 0772-72-2888
舞鶴営業所・福知山営業所・豊岡営業所

金森藤平商事株式会社 大阪営業所
〒561-0817 大阪府豊中市浜1丁目1番7号
TEL 06-6332-6861 FAX 06-6332-6884

小浦産業株式会社
〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町1丁目14番6号
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270

Nabtesco
http://www.nabtesco.com

N A B C O A U T O M A T I C D O O R



快適空間創造

ナブコ自動ドア 自 NABCO 動

西日本地区販売会社 ナブコドア株式会社 ☎(06) 6532-5841
http://www.nabco-door.co.jp/

製造元
ナブテスコ株式会社
住環境カンパニー

プロが教える 住宅の植栽

藤山 宏 著 B5判・176(カラー32)頁・定価2940円

1947年生まれ。鳥取大学農学部農学科卒業後、電鉄系造園会社、住宅会社造園課、外構造園工事会社を経て、1994年造園造景空間研究所を設立。エクステリア・ガーデン工事の営業、設計、施工管理のキャリアを活かし、社員教育、技術研修等で活躍中。E&Gアカデミー副学長。著書に『住宅エクステリアの100ポイント』(学芸出版社)、他。

門廻り、アプローチ、壁、インテリア、屋上、
住空間で緑(樹木・草花)を効果的に
使いこなすための知識と考え方

実例・図面満載



●目次

- 第1章 植物の基礎知識
- 第2章 現地調査と植栽計画図の作り方
- 第3章 部位別植栽の考え方
 - 01 門廻り
 - 02 アプローチ・階段スペース
 - 03 垣・塀・フェンス等
 - 04 法面・擁壁

- 05 駐車スペース
- 06 坪庭・中庭
- 07 デッキ・テラス・ベランダ・バルコニー
- 08 壁・屋上
- 09 インテリア
- 第4章 イメージ別ガーデン植栽の考え方
- 第5章 施工・メンテナンス

学芸出版社

〒600-8216 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
tel 075-343-0811 fax 075-343-0810
http://www.gakugei-pub.jp/ E-mail info@gakugei-pub.jp